



月の光を  
纏う者 5



月の光を  
纏う者 5

ハンドルを握るエアニスは目じりに涙を浮かべながら大きな欠伸をする。そして際胸いっぱい  
に吸い込んだ空気の全てを、気だるそうな溜息に変えて吐き出した。

トントントンと、ハンドルを指で叩く。

「あー……。退屈だ」

低い声で誰へともなく呟いた。もはや、エアニスの口癖とも言える言葉だ。

「もうちょっと頑張って下さいよ。今日はこの山を抜けた所までは走っておきたいですからね」

エアニスの隣、助手席に座るトキが、地図上の目的地を叩きながら言う。しかし、そこには町  
の名前も何も無い。

「今日中に辿り着ける町や村なんか無いんだろう。」

どうせ野宿なら何処でも同じだ。日も傾いてきたし、今日の移動はココまでにしようぜ」

「駄目ですよ。只でさえ旅の予定が大幅に遅れているんですから。」

これ以上遅れると目的地のバイアルスは雪に閉ざされ、春になるまで足止めを喰らう事になり  
かねません」

そんな言われ方をされると、エアニスも反論が出来なかった。しかし、言われっ放しでは癪で  
ある。

「……。じゃあ、お前が運転しろよ。いつも俺にハンドル握らせやがって」

「駄目ですよ。僕、運転免許持っていませんし」

「そんなモン、俺だって持ってねーよ！！」

「持ってないんか——い！！」

さらりと出たエアニスの反論に、後部座席のチャイムが突っ込みを入れた。

ないんか————い

いんか——い

んか——い

・ーい・・

開け放たれた窓からチャイムの全力の突込みが山彦となって聞こえてきた。

その間抜けた現象がエアニスとトキの頭を酷く冷静にさせた。

「……。止めよう。」

最近何を話してても、いつの間にか漫才になっちゃうからな……」

「……。ですね」

居住まいを正すエアニスとトキ。

取り残されたような扱いを受け、チャイムは面白くない。

「ねえ……。ちょっと……。やめてよ。」

私のせいでそうっちゃった、みたいな空気……」

「いや、お前の突っ込みが要らない、という訳じゃないんだ・・・

誰かが突っ込んでくれないとボケっ放しで収集が付かないからな。

ただ、最近ちょっとお腹一杯なんだ・・・」

憂鬱そうに視線を山道の先に向けるエアニス。その言葉にトキが続く。

「僕はチャイムさんの突っ込み役を高く評価していますよ。

ただ、時々ボケのポジションに付く時がありますが、それは良くない事だと思います。

突っ込みは突っ込みだけ、ボケはボケだけ。

でないと、キャラが定まりませんからね」

「あんたも都合のいい時ばっか突っ込み役やってんじゃないの！！」

噛み付くチャイムのリアクションに、トキは嬉しそうに親指を立てる。

「そうそう、いいですよ。その調子です」

バチーン！ と、トキはチャイムに後部座席から顔を挟み込まれるようにビンタをされた。

歪んだ眼鏡を直しながら、

「・・・痛いじゃないですか」

「思いっきり叩いたからね」

「お前ら・・・次の町に着いたら酒場で漫才でもしてみればいい。小銭程度なら稼げるぞ」

3人の騒動は、ひとまずここで収束する。

その間ずっと無言だったレイチェルの視線は、窓の外を向いていた。呆れているのかもしれない。

「れ、レイチェルもそう思わないか？」

彼女の様子に気付いたエアニスが、話を振る。

「え、あっ、すみません、聞いてませんでした」

彼女を除く三人が同時にシートからずり落ちる。

「・・・まあ、いい加減こんな馬鹿話いつも続けてりゃ耳を素通りするようになるよな」

「ち、違いますよ！？ そういうワケではなくって、外に・・・」

「外に？」

「村・・・のようなものがあります」

自信無さげなレイチェルの言葉に、エアニスは車を止めた。

「村だと？」

エアニスは窓から乗り出し、眼下に広がる森を眺める。エアニスの視線を辿ったレイチェルは

「もう少し・・・左です。少し小高い丘の下。微かにオレンジ色の灯りが見えます」

日は既に傾いており、レイチェルの指す先は山影で暗く見える。そのお陰で森の中に幾つかのオレンジ色の灯りが辛うじて見えた。

「確かに・・・。良い目しているな」

レイチェルは山育ちですから、と言って笑った。

エアニスが持つエルフとしての優れた視覚でも見落としてしまいそうな、僅かな明かりである。トキとチャイムに限っては見えていないようだ。

「しかし、地図にはこの辺りに町や村があるという記述はありませんが・・・」

トキが地図を見直してから言う。

「古いんじゃないの、その地図。ともあれ、今日は野宿しなくても済みそうね！！」

ガッツポーズを見せて喜ぶチャイム。

「そうだな。ここ2日野宿続きだったし・・・行って見るか」

エアニスは村へ続く道を探し、車を走らせた。



エアニス達の車が村の入り口に着いたのは、日が完全に沈んだ後だった。

村は動物避けの簡単な木の柵で覆われており、その中には木材で作られた建物が10軒ほど建っている。かがり火で照らされた門には、槍を持った男が二人、門番として立っていた。

エアニスは敵意が無い事を示すように、車の窓から手を振りながら近づく。

「こんばんわ。旅の人ですか？」

門番の一人が、愛想良くエアニスに話しかけた。

「ああ。山の上からこの村の明かりが見えてな。

一晩泊めて貰いたいんだが、この村に宿は？」

門番は肩を竦めると、

「生憎、此処はその村を作る為に森を切り開いている開拓村でして・・・。宿と言ったものはないんです。

ですが、一夜の寝床と食事くらいなら提供する事は出来ますよ。どうぞ、こちらへ」

そう言って、門番の一人はエアニス達の車を先導した。

「随分と友好的だな・・・」

まるで砦を護るかのような柵と、門番が見えてきた時には、軽い緊張を覚えたエアニスが拍子抜けしたように言った。

「開拓村って言ってたし、むしろ新しい村に外部の人間が来てくれるのは歓迎する事なんじゃない？」

「・・・そうかもな」

チャイムの言葉に、車のギアを入れながらそう呟いた。

4人は、住人の居ない建築中の建物へ案内された。

建築中と言っても、壁や屋根は完成しており、ドアや家具が無いというだけで、一晩の宿とするには十分な場所である。切り出したばかりの木の匂いが新鮮だった。

道中、門番の男から聞いた話によると、彼らはここに新たな街を作る為に派遣されているだけで、正確にはこの住人では無いのだと言う。

この森の北と南には、大きな街がある。しかし、その街を繋ぐ唯一の道は険しい山々を貫き、道中人間が住んでいる場所は一切無い。当然宿場なども無く、エアニス達も北の町を出てから2日間は車とテントでの野宿だった。徒歩で山を越え、北の町から南の町へ向うとなると、7日はかかるという旅人にとってはかなりの難所である。

旅人が行き倒れる事も珍しくないこの広大な森の真ん中に宿場町を作る為、彼等は北と南の街から派遣された合同開拓団だった。

「んー！

新しい家の匂い！」

家の中に入ると、チャイムは胸いっぱい切り出されたばかりの木の匂いを吸い込んだ。部屋は滑らかな色をした白木の壁に囲まれ、用意された毛布以外何も無かった。

「いいじゃないか。ポロ宿に泊まるより何倍もマシだ」

荷物を部屋の隅に放り出し、エアニスは床に腰を下ろした。

「2時間後に集会所で、夕食があります。団長も歓迎したいと言っていましたので、遠慮なさらず来て下さい」

「ありがとうございます」

案内役の男にレイチェルは深々と頭を下げる。チャイムもそれに習い、礼を言った。

エアニス達は腰を下ろし、重苦しい旅装束や武器を外して体を休める。エアニスとトキはいつもの癖で、いざと言う時の為に部屋の間取りや周囲の道を調べて回った。

床に寝そべり伸びをしていたチャイムが、座っているレイチェルを見上げながら言った。

「あー、でもこれじゃおフロは期待できそうに無いわねー・・・」

この家はまだ水道が引かれておらず、周りに井戸も見当たらなかった。水に関して心配するチャイムに、レイチェルが思い出しかかのように言う。

「そいえば、集落の裏に川が流れてるみたいだったわ」

「ホント！？

じゃあ、また温泉作ろうよ！」

川辺で野宿をする時、よくチャイムとレイチェルは、石を積み上げ川の水を切り出し、レイチェルの火炎の呪文を打ち込んで即席の温泉を作っている。

「という事で、アンタらも手伝いなさいよ！！」

チャイムに指差されたエアニスとトキは顔を見合わせ、

「まあ、温かいフロに入りたいってのは俺も一緒だからな。やってやるよ」

「そうですね」

その作業につき合わされるのも、エアニスとトキにとっては日常となりつつあった。

ぼじゅうううううう・・・

レイチェルの魔導で川の水面が瞬時に沸騰し、辺りに濃厚な水蒸気を撒き散らす。手馴れたも

ので、積み上げた石によって川から切り出された水は、一発の術で丁度良い湯加減となっていた。ぬるくなったら魔導で暖め、熱くなり過ぎたら川の水を導き入れるのだ。

「おっけー。丁度いい湯加減だわ。

じゃ、ふたりとも見張り宜しく」

「はいはい・・・」

「ごゆっくり」

チャイムに言われ、トキとエアニスは、少し離れた岩場の影に腰を下ろす。

今の彼らは何時何処で襲われるか分からない状況なのだ。流石に街中の宿屋の風呂で同じ事はしないが、人気の少ない場所で無防備になる場合は、これくらいの警戒は必要になるのだ。

岩の陰とはいえ、数メートルしか離れていない場所にエアニスとトキが居るのだが、チャイムとレイチェルは構わずに衣服を全て脱ぎ捨てる。

エアニスもトキも男である。最初は覗かれるのではないかと警戒していたチャイムとレイチェルであったが、一緒に旅をするうちに、あの2人は、完全に"無害"である事が分かった。

「はぁ・・・それにしてもアイツらホントに枯れてるわよねー・・・」

エアニスとトキがいる岩陰に視線を向け、チャイムはそうぼやいた。

こうも無関心でいられると自信を失いそうになるが、ここはあの二人が男として終わっているのだと思い込み、チャイムはなげなしのプライドを護っていた。

「枯れてる？ 何の話？」

「・・・何でもない。」

そう言うと、チャイムとレイチェルは即席の湯船に裸身を沈めた。

木々の隙間から見える満天の星空。月が出ていない事や、標高の高い場所だという事もあり、街で見える数の倍はあろうかという星が瞬いている。

「・・・・・・・・幸せー」

「・・・・・・・・んー・・・」

顔だけを湯から覗かせ、チャイムとレイチェルは気持ちよさそうに目を細める。

「ねえ、チャイムはさ・・・」

「んー」

「この旅が終わったら、どうするの？」

レイチェルの問いに、チャイムの緩みきった表情が消えた。

順調に旅が進めば、目的地であるバイアルスまでもう少しである。そろそろ、次の身の振り方を考えなければならない頃であった。

「んー・・・正直まだ決めて無いんだけど・・・」

何と無く、今回あいつらと一緒に居て、自分がどうすれば良いのか分かったような気がしてきたわ」

「それって・・・」

チャイムは自嘲気味の笑みを浮かべて、

「エベネゼルに・・・帰ろうかなと思ってる。

やっぱり、あたしの力を役立てるのなら、あの国に居る事が一番なのかなって」

「それじゃあ、魔法医に戻るの？」

チャイムは頷く。

「傷ついた人しか救う事の出来ない魔法医の・・・自分の無力さが嫌になったから、この道を選んだけど・・・

きっと、それは逃げていただけなんだと思うの」

傷ついた人を救うのではなく、傷ついてゆく人を守りたい。

それが、チャイムが魔法医を辞め、騎士団へ入った理由だった。

「全ての人を救える訳じゃ無いという事は分かってる。それは、魔法医でも騎士でも一緒。

だから、私はより多くの人を救える、魔法医に戻ろうと思う。もう、現実や自分の無力さに目を背けるのは、ヤメてね」

「そう・・・」

「馬鹿みたいよね。この答えが出るまでに随分と遠回りしちゃったわ・・・

もちろん、傷ついてゆく人も、この剣で護っていけるようになりたいけどね」

チャイムは、これでもかと言うほど、明るく笑って見せた。しかし、それはすぐに寂しさに陰る。

「でも・・・。

でも本当は、もっと皆と一緒に、旅を続けていたいかな。

こんな事言うとレイチェルに怒られちゃうかもしれないけど、皆といるのが、今はすごく楽しいの」

「それは・・・私も一緒よ。外の世界が、こんなに楽しい所だとは思わなかったし」

「ん・・・そっか」

チャイムはここで一度言葉を切ると、やや上ずった声で次の言葉を続けた。

「じゃあさ、この旅が終わったら、あたしと一緒に、もう少し旅を続けてみよっか。

・・・ついでに・・・エアニスとトキも誘ってさ」

「え・・・？」

チャイムが言った予想外の提案に、レイチェルは驚く。

「ほ、ほら、まだレイチェルも色んな場所を見てみたいでしょ？

あたしもすぐにエベネゼルに帰らなくちゃいけないってワケでも無いしさ！

エアニス達も、ミルフリストでずーっと暇を持て余してたみたいだしっ！！」

だんだん声が高くなってゆくチャイム。照れ隠しのように無意味な身振り手振りを交えながら、言い訳をするように理由を言う。

「って、何必死になってんのかしらあたし・・・」

自分の滑稽さに気付いたチャイムは、ぶくぶくと湯の中へ沈んでいった。

「私は、この旅が終わったら・・・」

レイチェルが、どこか思い詰めたような表情で呟く。チャイムが水面から顔を出す。



裸身に唯一身に着けているヘヴンガレッドの首飾りに指を当て、彼女は言葉を詰まらせていた。

「私は・・・」

「・・・レイチェル？」

俯いてしまったレイチェルに、チャイムが訝しげに声をかけた。

岩の向こうから、微かにチャイムとレイチェルの話し声と水音が聞こえていた。

「・・・エアニス、この岩の向こうを覗いてみたいとは思わないんですか？」

「別に興味無い」

「それは男として彼女達に失礼ですよ。その点、僕は違いますからね。

枯れているなんて言われちゃ黙ってられませんかよ全く」

トキが腰を浮かし、その襟首をエアニスが捕まえた。

「だから覗くなって」

「いいじゃないですか」

「駄目だって」

二人がそんなやり取りをしていると、

『きゃあああああ————っ！！』

チャイムかレイチェルか、はたまた兩名か、絹を引き裂くような悲鳴が森中に響き渡った。驚き飛び上がった後、エアニスとトキは慌てて地面に置いていた剣と銃を拾い上げる。

「どうした！？」

エアニス達がチャイム達に駆け寄る。

「あ、あそこの茂みに、何かが！！」

レイチェルが動揺しながら暗い茂みの奥を指差す。確かに、そこには何かが動く気配があった。エアニスはチャイム達と気配の対角線上に割り込み、警戒しながら近づいてゆく。トキもホルスターに入った銃に手を掛けていた。

「誰だ、出て来い」

エアニスの呼びかけと同時に茂みが揺れた。

「待ってください！！何もしませんから！」

茂みから両手を挙げて姿を見せたのは、所々汚れた旅装束を着た、レイチェルと同じ年くらいの少女だった。栗色の髪を伸ばした、やや華奢な少女が怯えた表情で立っている。殺気も何も感無い。彼女からはただ戸惑いの気配しか感じられなかった。

小さく息を吐いて、エアニスは剣を下ろし、トキも背中に銃を隠した。

「脅かすな・・・こんな所で何をしている？」

エアニスの質問に、少女はハッと我に返る。そして、少女が何かを言いかけた瞬間、

「何処に行った！！」

野太い怒号と共に、今度は大柄な男が現れた。男は少女の姿とエアニス達に気付き、戸惑うような表情を見せた。しかし、すぐに穏やかな表情を作ると、

「これはこれは・・・娘が邪魔をしましたね」

その言葉に、栗色の髪の少女が驚いた様子で男に振り向く。

「仕事も手伝わずに遊んでばかり・・・あまつさえこんな時間に家を飛び出しおって！！

ほら、帰るぞ！！」

男はそう言うと、少女の手を掴んで引っ張った。

「あ・・・」

その時、少女はこちらを振り向き、エアニスと目が合った。

彼女のその瞳は、エアニスに何かを訴えるような色を宿していた。

それに引っ掛かりを覚えるも、自分が口出しをする事でもないと思い、エアニスは男に腕を引かれてゆく少女を黙って見送った。

カシャン。

エアニスは剣を鞘に戻し、溜息をつく。

「あー、びっくりした・・・。

もう、脅かさないでよね！！」

チャイムはエアニスの隣で、少女の背に向かい文句を言っていた。

「・・・おい、チャイム」

エアニスは、真横に居るチャイムの名を呼ぶ。

「なによ？」

全く気付いていない様子のチャイムに、エアニスは右手で顔を覆いながら困ったような声で言った。

「隠すかどうかしろよ、見えてるぞ・・・」

「へ！？」



咄嗟の事で、チャイムは体を隠すタオルよりも先に、戦う為の剣を掴んでいた。剣士としては優秀な判断だが、その代わりに今チャイムの裸身を覆っているものは何も無い。

エアニスはこういったリアクションをとれば良いのか分からなかったのも、とりあえず逃げも隠れもせず、いつも通り堂々とした態度を貫いていたが、それはこの場の反応としては間違っていた。

「いっ、いっ・・・」

いつまで見とるかあぁっ！！」

チャイム渾身の喧嘩キックがエアニスのみぞおちに決まり、その体を岩場の影まで吹っ飛ばした。

チャイムは顔を真っ赤に染め、肩で息をしながらレイチェルの方を振り向くと、タオルで胸を隠していたレイチェルの背後に、メガネを真っ白に曇らせたトキが怪しく立っていた。

ビクリとレイチェルも背後に居たトキに気付く。

「と、トキさんも早く出て行ってください！！」

叫びと共に炸裂した風の呪文が、木立と共にトキを木の葉のように吹き飛ばした。

ボロボロになったエアニスとトキは、再び岩場の影に並んで座っていた。

トキは鼻血を拭いながら、うずくまって悶絶するエアニスに声をかける。

「大丈夫ですか、エアニス？」

「・・・どうだろう。内臓破れたかもしれん・・・。

・・・ところでお前その鼻血、その・・・どっちの鼻血だ？」

「どっちの、とは、どう言う意味でしょうか？」

「・・・いや、もういい」

そんなやり取りをしていた二人の横を、湯船から上がり、借りた寝間着を着たチャイムとレイチェルが通り過ぎた。エアニスは立ち上がり、チャイムに向って、

「あ、おいチャイム、今のは 」

バチーン！！！！

と、問答無用のチャイムのビンタがエアニスの横っ面を張り飛ばした。

ふん、と、鼻を鳴らしたチャイムは怒った表情で歩き去った。

「あの一・・・」

トキは残されたレイチェルに声を掛けると、レイチェルはトキから顔を背けてしまった。トキはレイチェルと視線を合わせようと何度もレイチェルの顔を覗き込むが、レイチェルは笑っているような困っているような照れているような泣いているような、何とも表現し辛い顔をトキの視線から逸らし続ける。終いには、トキを避けるようにして早足でチャイムの後を追っていった。

あまりにもやるせなく、空虚な風が吹いた。

「酷くないか、これ・・・」

「酷い・・・ですよ」

掠れた声で、その言葉だけを交わすと、二人は肩を落として黙り込んでしまった。

「・・・でも、僕はレイチェルさんが、"裸を男に見られたら恥ずかしい" っていう恥じらいを持っているという事が分かって安心しました。

先のオーランドでの出来事を思うと、そういう羞恥心すら持ち合わせていないのではと心配していたので」

「・・・あっそう」

「まあ、個人的に残念でもありますが・・・」

「何が？」

二人は死んだ魚のような目で星空を眺めながら、そんな間抜けたやり取りを交わしていた。

「・・・とりあえず、一緒に風呂にでも浸かりましょうか」

トキの提案に、エアニスは暫く黙った後、

「・・・一人で入れ」

そう言って剣を担ぐと、とぼとぼと村の方へ歩いて行ってしまった。

一人残されたトキは、何とも言えぬ虚しさをと共に、暫く立ち尽くしていた。

「う」

部屋を出た所で、チャイムは川原の即席温泉から戻って来たエアニスと鉢合わせした。お互いの視線がぶつかり、エアニスは眉間にシワを、チャイムは顔を赤くする。

「何も無かったか？」

「う、うん。別になんにも」

「そうか」

タオルで湿った長い髪を拭きながら、エアニスはいつも通りの様子でチャイムの横を通り抜け、部屋に入ってゆく。その姿を見送ると、エアニスに対してではなく、何故か顔を赤らめ、態度が硬くなってしまった自分の反応に腹が立ってきた。

( やだな・・・あたし何意識してんだろ・・・ )

ごつん、と、自分の頭をこぶしで叩いた。

「おやおや。さっきとは違い、随分としおらしいリアクションですね」

いつの間にかそこに立っていたトキに冷やかされ、チャイムは自分の頭を小突いたたげんこつで彼を殴り飛ばした。

「さっきはすみませんでした・・・」

せっかく助けに来て貰っておいて、あんな事を言ってしまうて・・・」

「いや、その何だ。俺達も、もう少し気を遣うべきだった。

謝るのはこっちだったと思うし・・・すまん・・・」

部屋に入るなりレイチェルがエアニスとトキに頭を下げて何度も謝り始めた。それに対しエアニスも彼女と同じように頭を下げる。その姿勢の低さにチャイムは唇を尖らせた。

「ねえ・・・前から思ってるんだけど、なんであたしとレイチェルでアンタの態度そんなに違うの？」

突然そんな事を尋ねられて、エアニスはぼかんと呆ける。そして暫く考えるようにして俯き、  
「えーっと・・・何かお前と違ってレイチェルは傷つき易そうな感じがするから、粗暴な態度取っちゃ駄目っていうか・・・」

「・・・言わんとする事は分かるけど・・・"お前と違って"の部分は余計よ。

というか、アンタ普段の自分の態度が粗暴だって自覚あったのか・・・。

自覚あるなら改めなさいよ！」

「はっ、余計な世話だ」

チャイムの表情が引きつり、こめかみに青スジが浮んだ。

その二人の間を取り持つように、レイチェルがフォローを入れる。

「その、そんな気を遣って頂かなくても大丈夫ですから・・・。

むしろ、普段どおりのエアニスさんで接してもらった方が、私は嬉しいです」

レイチェルの素直な言葉にエアニスとチャイムは顔を見合わせる。

「だってさ」

笑いながらチャイムが言い、エアニスはどう答えたものかと、そっぽを向いて頭を掻く。

「・・・どMですね」

ボソリ、と、呟いたトキが電光石火の勢いで再びチャイムに殴り倒された。

「えむ？」

「何だそれ。どういう意味だ？」

トキの言葉の意味が分からないレイチェルとエアニスは、チャイムに口を押さえつけられるトキを見て首を傾げる。

「いいの！！ヘンな言葉覚えなくていいから！！」

顔を赤くしながら、チャイムが両手を振って答えた。

その後エアニス達は、開拓団の全員で食事をすると言う集会所へ向った。

「これは旅人さんがた、ここまで来るのは大変だったでしょう。歓迎しますよ」

開拓団の団長が、エアニス達をテーブルに誘う。エアニスは一応、余所行きの顔で礼を言ってから、4人掛けの椅子に座った。トキとチャイム、レイチェルもそれに習う。二人の男が次々と皿を運び、テーブルの上は大量の料理で埋め尽くされた。

「我々の仕事は体が資本ですからね。食料だけは有り余っているんですよ。どうぞ召し上がって下さい。もちろん、お代は結構です」

男は愛想良く笑い、エアニス達に料理を勧めた。

「ありがとうございます」

礼と共に作り笑いを見せ、エアニスはフォークを取った。トキとチャイムはその笑顔を胡散臭そうに横目で見る。

「みなさんは、北の町からいらしたのですね？」

「ええ、南のエルバークの街へ向う所です」

この森を通る者は北のミンティアと、南のエルバークを行き来する者しかいない。分かりきった質問にも、エアニスは愛想良く答える。

しかし、内心では静かに食事をしたいと思い、合間合間に話しかけてくる団長を煩わしく感じていた。食事中に会話をするのは好きではないのだ。にも関わらず、本音を見せる事無く愛想よく受け応えをする自分を、俺も社会性が身に付いてきたなあ、などと自己評価していた。

「エルバークの街には何のご用で？」

エアニスは言葉を詰まらせる。その質問にはトキが答えた。

「特に、用という訳ではありません。僕達は宛の無い旅の最中でして、ただ近くを通るので寄ってみようと言うだけの事です。

強いて言えば、名物の黒リンゴのパイを食べに行く為でしょうかね」

トキの答えに、男はそうでしたか、と笑いながら頷く。

「そうだ。黒リンゴのパイでしたら、エルバークの中でも一番と言う名店があります。後でお教

えしますので、是非ともお立ち寄り下さい」

「いいですね、お願いします」

適当なでまかせで、トキはその話題を乗り切る。息をするように嘘を吐く彼に、エアニスは内心舌を巻いた。

それなりに楽しい晩餐が続いていた。

昼間の仕事を終え酒に酔った男達の笑い声が、集会所のあちこちで聞こえる。エアニス達も、団長の男をはじめ何人かの開拓団の男達と言葉を交わす。チャイムとレイチェルは良く笑った。エアニスは、会話が面倒とは思いつつも、チャイム達が楽しんでいるのを見て、悪い気はしなかった。

並べられた沢山の料理は食べきれない程の量だと思っていたが、何とか全ての料理を胃袋に納める事が出来た。特筆すべき事は、レイチェルが沢山余ってしまった料理をほぼ一人で片付けてしまった事である。

お前、そんなに食って大丈夫か・・・？

黙々とフォークとナイフを動かすレイチェルが心配になりエアニスが訪ねると、残してしまうのは勿体ないですし、これくらいなら食べようと思えば食べれます。

そう言って笑い、ポテトサラダを口に運んだ。

本人曰く、普段はあまり食べる方では無いが、頑張って食べようと思えばそれなりに食べれるのだという。

この小柄な体の何処にこれだけの量が入るのかと、一同は首を傾げた。

「あー、満腹・・・北の街を出てからこだけ食べたのは久し振りー・・・」

「ごちそうさまでした。とても美味しかったです」

チャイムは椅子からずり落ちかけた格好で天井を仰ぎ、レイチェルは対面に座る団長の男に頭を下げる。

「いやいや。私もあなた方の旅の話が聞けて、とても楽しかったですよ」

団長の男の横から食事係りの男がカップに入った紅茶を置いてゆく。それは、エアニス達4人の前にも並べられた。

「それにしても・・・本当に男の人ばかりなんですね」

チャイムが周りを見回し、集会所に女性が自分とレイチェルしか居ない事に気付き、やや落ち着きを無くしていた。

「あっはっはっは、

この開拓村に派遣されているのはみんな男ですよ。女子供は一人も居ません」

団長の返事に、チャイムは引っかけりを覚える。

「一人も、ですか？」

「ええ、貴女達のように旅をしている方ならともかく、街の口うるさい女衆には、ここでの生活には耐えられんでしょうしなあ」

団長がわざとらしく大声で言い放ち、周りの男達は違いねえ、と言いつつ笑った。

首を傾げるチャイム。レイチェルも、同じように、きょとんとした表情をしている。

ついさっき、チャイムとレイチェルの入浴中に現れた、栗色の髪の少女。

この開拓村には男しか住んでいないと言うのであれば、あの少女は一体何者だったのか。

それについてチャイムが男へ問いかけようとした時、

「ところで、この紅茶は何処のものだ？

変わった香りだな」

エアニスが目の前に出された紅茶について話題を振った。

川原の即席温泉で見た少女に対し、エアニスも疑問を感じた筈なのに、その話題に触れず敢えて別の話題を持ち出したのだ。

エアニスは、知らないふりをしている。

それに気付いたチャイムは、慌てて自分の口をつぐんだ。

「私の故郷で飲まれている紅茶です。体が温まりますよ」

そう言って、男は自分のカップを傾けた。

エアニスも紅茶を飲もうと、カップに手を伸ばす。

指が取っ手に触れる直前

突然カップがソーサーごと浮き上がり、エアニスの目の前から消えた。

正確に言うと、カップを乗せたテーブルがひっくり返され、その上に乗っていた物全てが宙に放り出されたのだ。

ガシャアアン！！

エアニス達と団長の男が囲んでいたテーブルは、逆さに向けてやや離れた壁にぶつかった。テーブルに乗っていた食器が全て割れて、盛大な騒音を立てる。

その音に、騒がしかった集会所が一瞬にして静まり返った。

団長の男も、チャイムもレイチェルも。そして、エアニスまでも状況を飲み込めず、絶句する

。

全て理解していたのは、席から立ち上がりテーブルをひっくり返したトキのみだった。





「な、何を・・・!？」

驚きの表情を見せる団長は、トキを見上げてようやくその言葉だけを口にする。

「この紅茶は、僕達には勿体ないですね」

席を立ったままのトキは、リーダーの男を見下ろして言った。

「随分と香りの強い紅茶ですが・・・」

「どれだけ"マゴリア"の葉を使いましたか？」

「!!!」

団長の男が青ざめる。

"マゴリア"の名には、エアニスとチャイムも聞き覚えがあった。

戦時中、戦場で広く使われていた鎮痛剤の材料となる植物である。そして"マゴリア"は、非常に依存性の強い麻薬の原材料にもなる植物だ。薬の一種だったそれはやがて麻薬の代名詞へと取って代わり、現在では医療用として使う事も禁じられ、所持する事も栽培する事も許されていない。

トキは団長の男の反応に口元をいびつに歪める。

「大方、旅人にクスリで"餌付け"をし、人身売買が何かをしているといった所ですか？」

トキの"餌付け"という言葉聞いた開拓団の男達は、更なる動揺を見せる。

エアニスがその言葉の意味を図りかねていると、トキが簡単に説明を加えた。

「"餌付け"というのは、彼らの業界の隠語ですよ。」

犯罪組織が流れの旅人などを薬漬けにして、奴隷にする事です。

なるほど・・・これだけ深い森なら、旅人が行方知れずになっても、行き倒れたと思えば誰も不思議に思わないでしょうね。

"餌付け"にはもってこいの場所じゃないですか」

「・・・は、はは、・・・」

団長は冷や汗を流し、乾いた笑みを見せる。その反応を伺い、トキは嬉しそうに笑った。

「凶星のようですね」

男は黙り込むと、突然ズボンのポケットから銀色の小銃を抜き出し、銃口をトキに向けた。

バスッ

集会所にくぐもった銃声が一発だけ響く。

トキの右手は、腰の位置で黒光りする銃を握っていた。

お手本のような早撃ちだった。団長の男よりもずっと遅れて腰のバックから抜かれた銃は、最小限の動きで男の顎に狙いを付け、頭部を真下から撃ち抜いた。

「おっと・・・。

そう言えば、黒リンゴパイのお店を聞くのを忘れていましたね」

トキがそう言うと、団長の体はゆっくりと後ろに倒れ、隣のテーブルをひっくり返して地面に倒れた。静まり返った集会所では、食器が割れ散乱する音が良く響いた。

トキは、ついさっきまで共に食事をし、談笑していた相手を、表情一つ崩す事無く撃ち殺したのだ。

絶句、というより、突然の出来事に放心状態のチャイムとレイチェル。エアニスも含め、トキがテーブルをひっくり返してから、一步でも動いた者は一人も居なかった。

「お、おい、トキ、・・・」

戸惑いながらエアニスは立ち上がろうとすると、トキはおもむろにエアニスに銃を向け発砲した。

「うわっ！」

銃弾の衝撃波が、エアニスの耳元を打つ。

「ひぎゃっ！！」

エアニスの背後で自動小銃を構えていた男が、額に穴を開けて仰向けに倒れた。

全く気付いていなかったエアニスは、自分の後ろで倒れた男を見て、舌打ちをする。

「らしくないですよ、エアニス。周りを良く見て下さい」

我に返ったエアニスが周囲を見回すと、集会所に居る男達は皆、銃やナイフ、鈍器を手に、エアニス達を取り囲んでいた。

トキは再び腰の後に手を伸ばす。

左手で銃と一緒にバックに収められていた薄刃のナイフを抜き、右手の銃と共に構える。

「全員、敵です」

つい数分前まで、共に笑いながら夕食を楽しんでいた男達が、明確な殺意と武器を持ってエアニス達へ殺到した。

トキは襲いかかる男へ銃弾を放ち数人の敵を撃ち倒した所で、別の男に掴みかかれる。すぐさま左手に持ったナイフで、相手の首を撫でるように浅く薙いだ。

別の男が、背後からトキの頭を酒瓶で殴った。瓶が砕け散り、トキが体勢を崩す。砕けて鋭利な刃物となった酒瓶を、男は片膝をついたトキに振り下ろす。

「この野郎！」

エアニスが、テーブルの上から男の頭を鉄板の入ったブーツで蹴り飛ばす。続けて殺到する男を数人、鞘に収めたままの剣で叩き伏せた。

しかし、いくらエアニス達でも、この狭い室内でこれだけの人数の相手をするのには無理があった。

「レイチェル！」

構わないから小屋ごと吹き飛ばせ！！」

「は、はいッ！」

エアニスに言われ、レイチェルは呪文の詠唱を始める。詠唱を続けるレイチェルに襲い掛かってきた男が、チャイムに椅子を叩きつけられて倒れた。

レイチェルは紡ぎ上げた魔導式を解き放ち、床に手を当てる。エアニス達の回りの空気がゆっくりと渦巻いた後、爆発的な風が4人を中心に吹き荒れた。襲い掛かってきた男達は風に吹き飛ばされ壁に叩きつけられたり、窓ガラスを突き破り外へ投げ出される。レイチェルが床に当てた手を天井に向け振り上げると、その風の勢いは更に力を増す。バリバリと音を立て、風は小屋の壁を、屋根を内側から押し破り、中にいた男達と一緒に集会所をバラバラに吹き飛ばした。

エアニス達の立つ床板と数本の柱を除き、集会所の建物は跡形も無く吹き飛んだ。辺りには散乱した木材と、呻きながら立ち上がろうとする吹き飛ばされた男達。まるで竜巻が通り過ぎた後のようだ。そのような惨状にも関わらず、レイチェルの力加減によって大怪我をした者は居なかった。

エアニスは風で乱れた髪を掻き上げ、溜息をつく。

「何だか良く分らんが・・・」

とんだ無駄足だったな。荷物を引き上げ、さっさとおいとみましょう」

剣を肩に担ぎ、歩き出したエアニスの腕を、トキが掴んだ。

「エアニス。」

こういう連中のタチの悪さは知っているでしょう。

野放しにはできません」

トキの声は、いつもの浮ついた声とは違い、硬く冷たいものだった。表情にも、普段の薄い愛想笑いが無い。

「・・・どういう意味だ？

こいつら全員片始末するとも言うのか」

トキはエアニスの問いに即答するつもりで口を開く。しかし、チャイムとレイチェルの視線に気付くと、渋々といった様子で答えた。

「・・・そう、言っているんです」

チャイムとレイチェルは驚いてトキを見る。エアニスはわざとらしく息を吐くと、  
「・・・何度も言ってるだろ。俺はもう、殺しは極力したくない。  
奴等がどれだけクズだろうと、俺が相手をする理由にはならん。  
俺の気分が悪くなるだけだ」

「そう、ですか。

じゃあ、頼みません。僕一人でも出来る事ですからね」

そう言うとトキは唐突に後ろを振り向き、ナイフを握った左手を振るった。

ガンッ、という金属と共にトキの手元で火花が散り、同時にチャイムの足元に何かが突き立  
った。

それは、トキの背中に向けて投げつけられた手斧だった。

「ひえっ！」

トキは、驚くチャイムの足元に手を伸ばし、自分が叩き落した斧を拾い上げる。

「返しますよ」

それを、茂みの暗がりからトキに斧を投げた男へ、無造作に投げ返した。

暗くて良く見えなかったが、トキの投げつけた斧は湿った音を立てて男を突き倒した。

「・・・！」

チャイムとレイチェルが息を呑む。

そしてトキは、自分達を遠巻きに囲む男達に向けて駆け出した。

チャイムとレイチェルは、今までトキが戦う姿を見た事はあってもトキが人を手にかける所は、  
見た事が無かった。

それはとても自然で、普段のトキの姿そのままだった。

表情を崩す事無く、淡々とトキは襲い掛かる男達を殺してゆく。時折、相手からの返り血がト  
キの服を、頬を濡らした。

チャイムの表情に、僅かな怯えの色が浮ぶ。

それを見たエアニスは、舌打ちをして頭を抱えた。

トキは怯えながら棍棒を握る男に歩み寄る。

「こ、この化け物っ！」

男は一声叫ぶと、トキへ殴りかかった。

トキは混雑する雑踏の人ごみを避けるように、自然に男の突進をすり抜けると、すれ違いざま  
に男の脇腹にナイフを突き立てようとした。

しかしその前に、棍棒を持った男はエアニスの鞆に納まった剣で殴り倒された。男は仰向けに倒れ込み、誤ってエアニスに触れそうになったトキのナイフが止まる。

トキの服を、エアニスが掴んだ。

「やめろ。らしくないのはお前じゃねーか。

こんなクズども相手に、何イラついてんだ!？」

エアニスは、やや声を荒げて言った。

「イラついている・・・という所は、否定しません。

エアニスは分かっているでしょう。僕は、彼らのような人間を許せないんですよ」

「・・・お前・・・」

トキの目つきが変わっていた。

エアニスがこの表情を見たのは随分と久し振りだ。

トキが、"敵"としてエアニスの前に初めて現れた時、彼はこんな目をしていて。

普段のふざけた仮面の下にある、トキの本当の素顔。

そのやりとりの間に、エアニスに殴り倒された男は起き上がり、力ない足取りで逃げ出した。

それに気付いたトキは、襟元をエアニスに捕まれたまま、右腕の銃を逃げる男の背中に向ける

。

エアニスの頭へ一瞬にして血が昇る。思わず拳を握っていた。

しかし、トキの銃が男の背を撃つよりも早く、エアニスの拳がトキの頬を打つよりも早く。

レイチェルがトキの正面に立ち、胸の前で銃を両手で包み込んでいた。

「・・・」

トキも、エアニスもチャイムも、思わず動きを止める。

レイチェルはゆっくりとトキの手から銃を取り上げると、彼女は取り上げた銃を空に向け、目をつむって引き金を引く。

ガンッ！ ガンッ！ ガンッ！

レイチェルは、銃は自分で撃ってみると、はた目から見ているよりもずっと大きな音と衝撃がある事を知った。

全ての弾丸を撃ち尽くしたレイチェルは力なく銃を下ろし、トキに言う。

「この人達のしている事が許されない事だというのは、分かっています。

ですが、こんな一方的な・・・殺戮を、見過ごす事は出来ません」

レイチェルの声は怯えの色を含んでいた。視線もトキの瞳からは外れ、彼の足元を見ている。

トキは、そんなレイチェルの様子にショックを感じていた。



「・・・彼らは、ヘタな殺し屋なんかより、ずっと沢山の人間を死に追いやりますよ」  
トキの反論は、既に苦し紛れの言い訳をしているような口調であった。

「そうだとしても！！

私は見たくないんです！！

トキさんのそんな姿は！！」

レイチェルが叫んだ。

誰も言葉を口にしなかった。

暫くして、トキが震えるような溜息を吐いた。怒りか哀しみか、何らかの感情を押し殺しているような溜息だ。トキは、チャイムとレイチェルが見た事の無い表情をしていた。思い返してみ

れば、彼女達が今まで見た事のあるトキの表情の種類は、とても少ないような気がした。だから、それだけで彼が自分の知らない人物だと錯覚してしまいそうになる。

トキは左手に握ったナイフを手の中で回し逆手に握ると、腰の後のガンベルトについた鞘へ、それを納めた。

エアニスとチャイムは胸を撫で下ろす。レイチェルは変わらず、トキの顔から目を背けるように俯いていた。

エアニスが口を開く。

「とにかく・・・ここを出よう。落ち着いて話も出来・・・」

「あっ！！」

エアニスの耳元で、チャイムが思い出したかのように声を上げた。エアニスは身を仰け反らせ、

「な、何だよ？」

チャイムは興奮気味にまくしたてる。

「食事の時、アイツは村には女が一人も居ないって言ってた！！

じゃあ、あたし達が温泉で見た子は何だったんだろうって、考えてたんだけど、もしかして・・・！！」

アイツというのは、エアニス達と共に食事をした、開拓団の団長を名乗る男だ。エアニスも、会話の途中にチャイムと同じ疑問を抱いていた。エアニスが顔をしかめる。

「・・・あの女も、俺達みたいに嵌められて捕まっていたって事か。

そして何かの切っ掛けで逃げ出して、俺たちと鉢合わせた・・・？」

エアニス達に背を向けていたトキが動いた。そして、近くで倒れていた男を引きずり起こす。「うわあっ！！も、もう止めてくれ！！」

怯える男に、トキはいつもと同じ事務的な口調で言う。

「話しは聞いていましたね？」

案内して下さい。あなた方の"商品棚"へ」

既に開拓村の男達は、戦意を喪失していた。

散発的に銃を持っている者が襲い掛かってきたが、トキとエアニスが男達の武器を持つ腕を正確に撃ち抜いてゆく。

案内役の男を引き連れ、エアニス達は借りていた小屋から荷物を引き上げ、車で村の中を移動する事にした。幸い、荷物や車は無事であった。

捕らえた男の案内によって、村の外れにある、唯一の石造りの建物にトキ達は辿り着いた。

「こ、ここだ」

男が小屋の中の床を指差して言った。エアニスは男の指差した床をブーツで踏み鳴らし、剣を抜いて床に突き立てた。そして剣をねじる様にして引き上げると床板は持ち上がり、地下に続く石の階段が姿を現した。

それを確認すると、トキは捕らえていた男の首筋を叩き、あっさりと昏倒させた。4人は暗い

地下室への階段を覗き込む。

「・・・さてと、行くか」

エアニスが階段を数段降りると、

「ッ！！」

肺と脳髓がドクン、と疼いた。不慣れな体の内側からの衝撃に、危うく意識を失いかける。

「げはっ！！」

胸を押さえて、エアニスが膝をつく。

「エアニス！？」

危うく階段を転げ落ちそうになったエアニスを、チャイムが慌てて支えた。その"匂い"に気付いたトキは、チャイムに向かい叫ぶ。

「早くこの階段から離れて下さい！！」

クスリが燻してあります！！」

トキの言葉にチャイムは慌てて口元を押さえ、トキと二人でエアニスの体を階段の上へ引きずり上げた。エアニスを壁にもたれ掛けさせ、階段の蓋を閉める。

「ちょっと、エアニス、どうしたのよ！！」

チャイムは首を垂らしたエアニスの頬をビシバシ叩く。エアニスはその腕を払いのけて、チャイムの頭をはたき返した。

「ああ・・・クソッ・・・大丈夫だ・・・」

朦朧とした頭を抑え、エアニスは苦しそうに言った。

「・・・エアニスのハーフエルフとしての五感は、人間のそれよりも遥かに優れたものです。

その分、こういったクスリにも敏感に反応してしまうんですよ。

チャイムさん達も、あまり近づかない方が良いです。このクスリの濃度じゃ、5分も吸っていれば薬漬けになってしまいますから」

うっ、と、チャイムが呻いた。

「じゃあ、この地下で捕まっているかもしれない人達は・・・」

「・・・とくに重度の薬物中毒でしょうね。

ですが、助けられない訳ではありません」

そう言うと、トキは床下の階段を下り始めた。

「トキさん！！」

レイチェルがトキを呼び止める。

「すぐに戻りますよ。もう少しだけ離れて待っていて下さい」

「そうじゃなくて、トキさんまで薬に当てられてしまいます！！」

トキは一瞬呆けたような顔を見せて、レイチェルに苦笑いを見せる。

「僕の体は、こういうモノへの耐性ができているんですよ。心配しないで下さい」

そう言うと、さっさと地下へ降りて行ってしまった。

「なにそれ・・・どういう意味？」

チャイムとレイチェルが顔を見合わせた。



暫くして戻ってきたトキの背中には、一人の少女が背負われていた。

エアニス達が川原で会った、栗色の髪をした少女だ。チャイムがトキに駆け寄る。

「トキ・・・その子は・・・」

トキが背中の中の少女を車に乗せながら、

「・・・案の定、薬漬けにされて地下の牢屋に入れられていました。意識が戻らないので、そのまま連れてきました。他には誰も居ませんでしたよ。

エアニスの具合はどうですか？」

トキの質問に当のエアニスが身を起こし、手を上げる。

「ああ、もう大丈夫だ・・・」

頭を振りながらエアニスは立ち上がった。

「・・・助けられそうか、その子？」

「森を抜けた南の街まで連れて行ければ・・・なんとかしてみせます。

クスリも何日分か、頂いて来ました」

そう言うとトキは、カラカラに干からびた草の束を見せた。

エアニス達も飲まされそうになった、麻薬の紅茶葉。"マゴリア"の葉だった。

「その薬・・・使うの？」

「ええ、でなければ、街に着く前に薬が切れて、彼女は狂い死にでしょうからね」

困ったようにあっさりと言うトキ。チャイムとレイチェルの表情が強張る。

エアニスは片手で体を支えつつ、車の運転席に座った。

「それじゃ、行くぞ。

もうこんな所に用は無い」

開拓村、もとい麻薬密造組織のアジトを後にし、エアニス達の車は山道を走り抜ける。追ってくる者の姿は無かった。

車の中には、いつもの4人に加え、死んだように眠る一人の少女がいた。本当に死人かと思わせるような顔色だったが、その胸は息をしている事を示すように浅く上下している。

「トキ、本当にこの子、大丈夫なの？」

チャイムが心配そうに問いかける。レイチェルは眠る少女の服の襟元を緩めてやっていた。

「僕は医者じゃないですから何とも言えませんがね。

薬のせいで意識が混濁しているだけかと思います」

「だと・・・いいんだけど・・・」

チャイムも医者といえば医者なのだが、薬物中毒患者は専門外である。彼女は少女の頬を触ると、少女の体が冷え切っている事に気付いた。チャイムは後部座席の後に突っ込んだ自分の毛布を引っ張り出し、少女の体に掛けた。

「くそったれ。とんだ無駄足だったな・・・」

愚痴をこぼしながら、エアニスは煙草に火を点ける。ハンドルを切り、車は大きくカーブを描

きながら、真っ暗闇の山を登ってゆく。その時、山道の端にあった"それ"を、ヘッドライトが一瞬照らし出した。

「エアニス、車を止めて下さい」

助手席のトキが後を振り返りながら言った。

「ああ、何で？」

「いいから止めて下さい」

そう言うとトキは身を乗り出し、エアニスの足ごとブレーキペダルを踏みつけた。

『うおあああ————！！』

エアニスとチャイムが声を上げる。急制動のかかった車は土の地面を数メートル横滑りし、幸運にも崖下に落ちる事無く止まった。

「ああ、危ないじゃないのーっ！！」

車が止まってチャイムが叫ぶと、既に助手席にトキの姿は無かった。トキは車から降りて、山道の外れを見ていた。

「エアニス、こっちをヘッドライトで照らして下さい」

「あ、ああ」

エアニスはトキが指差す方へ車を回頭させ、山道の端をライトで照らす。

そこは花畑だった。真っ暗闇の山道の外れに、真っ白で繊細な花卉をもつ花が一面に咲き誇っている。

「わ・・・すごい・・・」

ヘッドライトの光の中だけに浮かび上がる、何処までも続く花畑。その幻想的な光景に、レイチェルは思わず声を漏らしていた。

「マゴリアの花です。

ここで薬を栽培していたようですね」

「え・・・！？」

その言葉に、レイチェルの気分は一瞬にして暗転する。

トキは車のトランクから、大きなタンクを引っ張り出した。トキは花畑へ降りると、タンクの蓋を外し、中に入っていた液体を撒きながら花畑を歩く。エアニスは車から降り、呆れた声で言う。

「おいおい、そいつは、予備の燃料・・・」

「その車には魔導機関も付いている筈です。燃料が無くなっても、エアニスの魔力を動力に走り続けられる筈ですよ」

「そうだけどさ・・・魔導機関動かすの、結構魔力喰われるんだぞ・・・」

そう言って、溜息と一緒に煙草の煙を吐く。こんな様子のトキには、何を言っても無駄と言う事を、エアニスは知っていた。

「借りますよ」

「あ」

エアニスの啜っていた煙草が、ひょい、と取り上げられた。トキは火の点いた煙草を指で弾き

、花畑の中へ落とす。

煙草の火は一瞬にして花畑へ撒かれた燃料へ引火し、爆発的に燃え広がった。闇夜に慣れていた目には強烈過ぎる閃光に、4人は目を細める。

みるみるうちに花畑に炎が広がり、白く繊細な花はねじれる様に燃えてゆく。

「これで当分、彼らもこんな馬鹿な真似はできないでしょう」

「・・・ま、こうしておくべきなんだろうけどさ」

トキの言葉に、エアニスが答えた。

「行こう。追っ手が来ると面倒だ」

エアニスは燃え上がる花畑に背を向け、運転席に戻った。チャイムとレイチェルも、複雑な表情を浮かべ、車の中から炎を見つめていた。

エアニス達は、トキの本当の意図に気付いていなかった。

燃え上がったマゴリアの花畑から立ち上る、白い煙。その煙は風に流され、エアニス達の走ってきた方向へ流れる。そしてその流れは山の断崖に遮られ、行き場を失った煙はそこで溜まり滞留する。

そこはエアニス達が後にした開拓村のある場所だった。

「これだけの煙に巻かれれば・・・生き残った連中も夜明けには全員狂い死にでしようかね」

トキは煙の流れる先を見て、つまらなさそうに呟いた。

「トキ、もういいだろ。早く行くぞ」

エアニスが新しい煙草に火を点けながら言った。

「ええ。」

もう、十分です」

燃え盛る炎に、トキは頭の後ろで手を組みながら背を向けた。

風向きは暫く変わりそうに無かった。

## 第51話 仮面の下の笑顔

---

ノキアはゆっくりと目を開ける。

最初に見えたのは随分と低い天井、そしてすぐ隣に居た赤い髪の少女だった。朦朧とした意識のまま自分の周りを見回すと、その少女と目が合った。すると少女の瞳と口はゆっくりと大きく開いてゆき、

「え、エアニース！！

起きた！！

この子起きたよ————っ！！」

赤毛の少女の大声に驚き、ノキアの意識はようやく覚醒した。

「どうだ。気分は？」

ノキアの前に座りそう言ったのは、自分の髪の色と良く似た、長髪の・・・男だった。髪の長さといい顔立ちと言い、一見して女性である。しかし声だけはやや低く、はっきりとした男のものだった。

ノキアは止まった車の後部座席に座り、開いたドアから長髪の男に話しかけられていた。車は山の中の開けた場所に止められており、芝の上にはビニールシートが敷かれ食事の用意がされていた。まるでハイキングに来ている一団のようだが、男の腰には剣が吊るされ、その周りに居る男女も旅装束を身に纏っている。

自分の置かれた状況が分からない。

ノキアは何があったのか思い出そうとする。散らばった記憶の断片は比較的早く形を取り戻し、目の前の4人と出会っていた事を思い出す。

「あなたち、あの村の近くで水浴びしてた・・・

そうよ、わたし、あの村で眠り薬盛られて、捕まって、見張りの隙を付いて逃げ出した時に・・・！！」

自分の身に起こった事を思い出し、ノキアの声のトーンが上がってゆく。

「落ち着け。アンタを捕まえてた連中は、もういない」

「ここは、ここは何処ですか！？」

詰め寄るノキアに、男は親指で自分の後を指す。

ノキア達の居る広場は山の中腹ほどの高さにあり、そこから眼下に広がる平野部が一望出来た。そして、目の前には彼女の住むエルバークの街並みが広がっていた。

意図せず自分の街に帰って来れた事で、ようやく安堵の表情を浮かべるノキア。

「丁度良かったです。

これから僕達、お昼を食べる所なのですが、ご一緒にどうですか？

お腹空いているでしょう？」

芝に敷かれたシートに座る、眼鏡をかけた黒髪の男が笑顔で言った。

とても柔らかい、人を安心させる笑顔だと思った。



エアニスはカップに口を当ててから話し始めた。

「自己紹介がまだか。

俺はエアニス。そこのメガネがトキで、そこの赤いのがチャイム、黄色いのがレイチェルだ」  
『メガネです。宜しくお願いしますね』

一体どうやっているのか、トキは手を使わずメガネをピコピコ上下に動かし、唇を一切動かさずにそんな言葉を発した。

「あんた凄いわねそれ・・・

チャイム=ブラスハートよ。宜しく」

「レイチェル=エルナースです。よろしく」

トキの謎の一発芸についてもっと言及したい所だったが、いきなり会話の腰を折る事に繋がりがねないので断腸の思いでスルーしたチャイムとレイチェル。

「私は、ノキアと言います。エルバークの街の商人です」

「なんだ、エルバークの人間だったのか。・・・何屋さん？」

「魔法医へ卸す、薬草などを扱っている店です。

薬草を取りに森に入った所で、あの村に迷い込んでしまって・・・」

「ふうん。

歳は？ 働いてる割には結構若いみたいだけど」

ノキアという言葉が重くなってきた途端、エアニスは話題の矛先を変えてしまった。それに気付いたチャイムは、普段は無神経なのにこのような時には気を回す彼を少しだけ見直した。

しかし、それはエアニスがノキアをナンパしているようにも見えて、チャイムは何故か面白くなかった。



(ん・・・何であたしが腹立ててんのよ・・・)

ふと浮んだ疑問について、チャイムは空を見上げて考える。

(・・・・・・・・無い無い無い。それは無い)

どんな結論に行き着いたのか、誰にともなくぱたぱたと手と首を横に振り、食べかけのパンに勢い良くかじり付いた。

エアニスは一人でジェスチャーゲームをするチャイムへ心配するような視線を送る。

「あ、えっと、歳でしたね。16・・・歳です」

「あ、私と同年ですね！」

レイチェルが嬉しそうに身を乗り出す。彼女の村には自分と同じ年齢の女の子が居なかったため、同年齢と言うだけで何となく嬉しくなってしまうのだった。

「俺達もエルバークへ向う途中だ。このまま山を降りて、川を越えて・・・夕方には街に入れるだろう」

「その・・・皆さんは、あの村で捕まっていた私を助けてくれたのですよね・・・？」

実は記憶が曖昧で、状況が飲み込めなくて・・・。

できれば食事より先に、何がどうなったのか、聞かせて貰えませんか？」

ノキアが身を乗り出してエアニスに言った。チャイムとレイチェルは顔をしかめ、エアニスも髪を掻きながら唸る。

「あー・・・そうだよな。どう話しせばいいか・・・」

「あ、あ。お肉焼けましたよ。はい、冷めないうちにどうぞ」

「あ、ありがとうございます・・・」

言葉を濁している間に、トキが話しの腰を折ってしまった。

無視する訳にもいかず、ノキアは遠慮がちにトキから渡された皿を受け取ろうとした。

ノキアの視界が、突然ぐにやり、と歪んだ。同時に平衡感覚を失い、足を地につけていながらも、まるで空中に放り出されたかのような感覚に襲われる。強烈な寒気にも襲われ、両手が誰かに揺さぶられているかのように震え出す。

ノキアの手は宙を掴み、トキに手渡された皿を取り落としてしまう。

「・・・あ、あれ・・・？」

ノキアは震える右手を、慌てて左手で掴んだ。

手の震えは、すぐに全身に伝わり、ノキアは自分の肩を両手で掴み、うずくまった。

今まで感じた事の無い体の異常だった。例えるならば、その苦しみは"渴き"に似た感覚。

「ち、ちょっと・・・！！」

チャイムが腰を浮かすが、どうすればいいのか分からず、戸惑う事しか出来ない。それはレイチェルも、エアニスも一緒だった。

唯一、トキだけがそれを予想していたかのように、料理の片隅に用意していた紅茶をノキアに差し出した。

「このお茶を飲んでください。

これで、震えは収まる筈ですから」

トキがうずくまるノキアにカップに入った紅茶を差し出した。ノキアは震えの収まらない手をカップに伸ばす。トキに手を添えてもらいながら、彼女は言われるがまま、紅茶を飲み干した。

紅茶を飲み終わると、体の震えは嘘のように収まった。未だ乱れた呼吸のまま、ノキアは自分の体を見回す。

朦朧とした眼差しで、ノキアがトキの顔を見上げた。

場の雰囲気など関係無く、基本は笑顔であるトキが、珍しく表情を曇らせている。

暫くして、トキが口を開いた。

「ノキアさんが意識を失っている間、奴らに何をされたのか・・・説明しましょう。

少々・・・重い話になりますが・・・」



エルバークの街に入り、エアニスの運転する車は、街の大通りを荷馬車と並んで走っていた。

「おい。おーい・・・ノキア、聞ってるか？」

「・・・」

え。あ、はい！　すみません！！」

エアニスの3度目の呼びかけで、ノキアは飛び上がりながら返事をした。

「次の角を右でいいんだよな」

「あ・・・はい。

曲がってすぐに、白い壁と赤い屋根の家があります。そこがわたしの店です」

「おっけー・・・」

エアニスは馬車と荷台と人間でごった返す大通りを、ゆっくりと走る。

ゴン、と荷台が車にぶつかった。荷台を引いていた男へ、エアニスが中指を立てながら怒鳴った。が、男はそ知らぬ顔で雑踏の中へ消えてゆく。

「くそつたれめ・・・街の外に車を置いて来るべきだったな・・・」

「いいじゃない。どうせキズとヘコミだらけの車じゃん」

「旅路の途中で付いた傷はいいんだよ。飛び石とか、森に分け入った時の傷とか。

でも、街灯や馬車にぶつかって傷つくのはむかつくだろうが」

チャイムの視線が、斜め上をゆらゆらと泳いだ。

「・・・ごめん。エアニスの感覚、ちょっと分かんないや」

二人のそんなやりとりを見て、トキとレイチェルは苦笑いを浮かべている。トキがふとノキアの方へ視線を向けると、彼女は再び表情を無くし、自分の足元を見つめ続けていた。

ノキアは自分の体が麻薬に犯されている事を知らされた。1日に1度、"マゴリア"の紅茶を飲まなくては禁断症状が発生する事。そして、"マゴリア"の葉は所有する事自体が違法であり、入手も困難な事。そして、この体を放置すれば、次第に禁断症状のサイクルは短くなり、いずれは精神と体を病み、命を失う事。

トキからその話を聞かされた時は、目の前が真っ暗になり、叫び出したい衝動に駆られた。それでもノキアが正気を保っていたのは、最後にトキが言った言葉に支えられたからだ。

大丈夫です、僕がなんとかしてみせますから。

根拠のある台詞かどうかは分からない。しかし、そんな言葉でも信じていなければ、ノキアの心はバラバラに砕けてしまいそうだった。

「ここだな？」

白い壁と赤い屋根のこじんまりとした店の前で、エアニスは車を止めた。

「ノキア！！」

彼女が店の扉を開くと、カウンターに座っていた男が立ち上がり、ノキアに駆け寄った。ノキアと同じ髪の色で、顔立ちがノキアに非常に良く似ていた。エアニス達は、ひと目見ただけで二



人は兄妹だと分かった。

「兄さん・・・ただいま」

「ただいま、じゃないよ！！2日も戻ってこないから、街中を探してたんだぞ！！」

怒った口調で言われ、ノキアはビクリと肩を震わせる。その肩を、ノキアの兄は両手で抱きしめた。

「でも、無事で本当に良かった・・・」

そう言って、安堵の息を吐いた。

「ごめんなさい・・・」

ノキアは兄に抱きしめられたまま、震える声でそう謝った。

途端に、今まで押さえ込んでいた感情が、せきを切ったかのように溢れ出す。彼女はぼろぼろと流れ出した涙を隠すように、兄の肩に顔を押し付けた。

「ど・・・どうした、ノキア・・・？」

それに、この人たちは？」

ノキアの兄は戸惑い顔で、店の戸口に立つエアニス達を見た。エアニス達は泣き崩れるノキアを見て、言葉を失っていた。



日は完全に沈み、賑わっていた大通りも今では人通りがまばらになっている。3階の窓からは、夜遅くまで開いている酒場の灯りが点々と見えていた。夜でも街明かりが多いという事は、魔族やルゴワールの刺客から追われる身のエアニス達にとって安心出来る事だった。

ノキアの店からさほど離れていない宿にエアニス達はいた。いつも通り2つ続きの部屋を取って、今はチャムとレイチェルの部屋にエアニスが居た。

3人は何をすることもなく、本を読んだり、窓から街明かりを眺めたりしている。会話は殆ど無い。

そこに、外出していたトキが戻ってきた。

「遅くなりました。何か変わった事はありませんでしたか？」

「なにも」

部屋に置かれていた雑誌を流し読みしながら、エアニスが言う。

「で、そっちはどうだった？」

トキは肩に掛けた重そうな鞆を下ろす。中から、分厚い本が何冊も出てきた。

「この街で一番大きな病院のトップとお話をしてきました。

彼らも、僕がミルフィストの大学で研究していた知識に関心を持ってくれたようです。

・・・まあ、若干乱暴なやり方をしましたが、大学病院の協力をとりつける事も出来ましたよ」

トキの簡単な説明に、エアニスが苦笑する。

「色々とすっ飛ばし過ぎだろう・・・たった数時間の交渉にしては上出来だな。

・・・どんな手を使ったのかは聞かないけどよ」

「そうして貰えると助かります」

そのやり取りに、チャイムとレイチェルは顔を見合わせゲッソリした。

トキは無茶な要求を通す為、脅迫まがいの交渉でもしてきたのだろう。

ルゴワールの刺客や魔族に襲われる事よりも、役人や憲兵隊に踏み込まれた時の心配をした方が良さそうだ。チャイムはトキの悪事と自分が無関係だと言う事を、どう説明するべきかを考え始めた。

「5日」

トキが右手の指を全て立てて、そう言った。

「ノキアさんの事は、5日で僕が何とかします。

ですから・・・レイチェルさん達は、先にバイアルスへ向って下さい」

トキの提案にエアニスは、キョトンと目を点にする。

「え、お前を置いて3人で先に行けって言ってるのか？」

「ええ。これは、僕の個人的な用事です。レイチェルさんの旅の足止めをする訳にはいきません。

それに前にも言いましたが、雪が降り出す前に到着しないと山越えが困難になります」

「俺、バイアルスまでの道分らないぞ？」

「・・・それくらい自分で地図読んで行ってくださいよ」

「俺の方向オンチは知ってるだろ！！」

エアニスは開き直るように叫んだ。堂々と、立ち上がって。トキが頭を抱える。

「ああ・・・そうでしたね・・・」

そう溜息交じりに呟き、椅子に沈み込んだ。そのやり取りを見てチャイムは、

「エアニス・・・方向オンチなんだ。そんなんでよく旅人やってたわね」

「いや、歩きや屋根の無いジープ、バイクとかだったら大丈夫なんだ。

でも、外の空気と隔絶される車とかになると、途端に方向感覚がバカになるんだよな。分かるだろ？」

エアニスの持論を聞き、チャイムは暫し考え込んだ後、

「・・・やっぱりアンタの感覚ちょっと分かんない」

眉間を押さえながら、エアニスの言葉を理解するのを諦めた。

「あー・・・じゃあ、こうしましょう。

車の屋根をぶった斬ってオープンカーにして行ってください」

「バイアルスは雪国だぞ。凍死するだろうが」

「それじゃあ・・・」

「あ、あの・・・」

論点がズレ始めたエアニスとトキの相談に、レイチェルが割り込んだ。

「私達だけで先に行くのは、嫌です。

私も、ノキアさんの事が心配ですから、何か助けになりたいです」

「・・・」

沈黙するエアニス。

いつも思うのだが、レイチェルの言葉は何故いつも、こう真っ直ぐなのであろう。エアニスもチャイムもレイチェルと同じ事を思っているのに、二人は彼女と違いひねくれてしまっている。その言葉がなかなか出てこないのである。

「まあ、そうだな。乗りかかった船だ。最後まで付き合わせろ」

それを自覚しながらも、やはり素直に言えないエアニスであった。

「・・・ですが、このような大きな街に5日も滞在するのは危険です。ルゴワールの情報網は、大きな街ほど綿密に張り巡らされています。もし僕達がこの街にいる事が見つければ、翌日には刺客が大挙して押し寄せてきますよ」

「目立つマネはしないさ。例え襲われる様な事があっても、俺達は負けない。

俺は言うまでも無いし、レイチェルも強い。コイツの腕も、なかなかのものになってきたしな」

そう言うと、エアニスは後ろに居るチャイムの頭をむんず、と掴んだ。

頭を捕まれた事に対する抗議も忘れ、チャイムは言葉を失った。

エアニスとの剣の稽古は、今でも毎晩続けている。その稽古の中でも、エアニスの口から自分の腕について褒め言葉を聞いた事が無かったのだ。不意にエアニスの口から出た、自分の腕を認めてもらえた言葉。思わず嬉しくなり、チャイムの表情がふにやりと崩れる。

頭をぐりぐりと掴んでいるのに、チャイムから抗議の声が上がらない事を不思議に思い後を振り向くと、チャイムがエアニスに頭を捕まれたまま、やたらと嬉しそうな顔でニヨニヨしていた。ビクリと身を引くエアニス。

「どっ・・・どうしたその顔・・・気持ち悪いぞ・・・」

エアニスに心配そうな声で聞かれ、チャイムはようやく自分の顔がニヤケている事に気付く。

「な、なんでもないっ！」

ばんっ、と、手近にあったトレイでエアニスの頭を叩いた。

エアニスとチャイムの漫才を聞き流し、トキは黙って考えていた。

考えて、非常に自分らしくない回答に行き着いた事を、心の中で自嘲気味に笑った。

「わかりました。

それでは、皆さんにも協力をお願いする事があるかもしれません。

その時は、宜しく願います」

諦めの色が混じった笑みを浮かべ、トキがそう言った。

チャイムとレイチェルが満足そうに笑った。エアニスも微苦笑を浮かべている。

この判断は、どう考えてもトキにとっては誤りである。

トキの話したルゴワールの情報網は、嘘偽りも誇張表現も無い。このまま5日も街に滞在していれば、刺客に襲われる可能性の方が高いとトキは考えていた。

その気になれば、レイチェル達を説得する事も可能であった。

ただ一言。

ここにレイチェルさんが居る事で、ノキアさんやこの街を、ルゴワールとの戦いに巻き込む事になります。

そう言えば、少なくともレイチェルとチャイムは引き下がり、先行して旅を続けてくれただろう。

それを言わなかった、いや、言えなかったのは、そう言われた時の時のレイチェルの顔を見たくなかったからか。あるいは、本心では一人で残るのが嫌だったのか。考えてみたが、面倒だったのですぐに止めた。自己分析を放棄するという事もまた、トキにとっては自分らしく無い事であった。

本当に、彼女達と出会ってからは調子が狂いっ放しですね。

トキは心の中でぼやいた。

「それでは、早速お手伝いをお願いしましょうか」

「え？」

「こ、これから？」

時刻は深夜に近い。

「これから僕は大学病院へ戻り、実験の準備をしなければなりません。

できれば明日の朝から作業を始められるようにしたいと思っています。

機材の運び込みをお願いしたいのですが」

自分達の言い出した事とは言え、急な展開でチャイムは少し戸惑う。エアニスが椅子から重そうに腰を上げた。

「さて、と・・・じゃあ、やるか」

「はい！」

レイチェルも元気良く立ち上がる。

「お、おーっ！」

やや遅れて、チャイムが腕を振り上げながら言った。

そんな3人を見たトキは、片手で顔を隠しながら、笑った。

おや？ と、エアニスが首を傾げる。

トキの笑顔はうんざりする程に見慣れているが、彼が自分の顔を隠すようにして笑う所を見た記憶が無かった。

ひょっとしたら、これはいつもの作り笑いではなく、本当のトキの笑顔なのかもしれないな。

エアニスはそんな事を考えていた。

「おっと・・・」

机に突っ伏して寝ていたトキが目を覚ます。

場所はトキが脅迫まがいの交渉で国の病院から借り受けた大学病院の研究室。資料に埋もれた時計を見ると、時刻は早朝の4時を指していた。太陽はまだ昇っておらず、窓から見える空の端には僅かに藍色のグラデーションがかかっていた。落ちかけた眼鏡をかけ直し後を振り向くと、部屋の中央のソファに、チャイムとレイチェルが寄り添うように眠っている。そしてドアの近くでは、エアニスが剣を抱きながら座っていた。

「よ。・・・起きたか」

「僕はどのくらい眠っていました？」

エアニスは徹夜明けのようなガラガラした声で。トキは寝起きとは思えないほどはっきりした声で言葉を交わす。

「1時間と経ってない。今日で3日目だぞ。いい加減ちゃんと寝たらどうだ？」

「いやあ。戦場では3日くらい眠らなくても平気だったんですけどね・・・」

「そりゃ、クスリ使っていたからじゃないのか？」

「まあ、そうなんですけどね」

そう言ってトキは、あははと笑い、らしくもない溜息をついた。やはり、気丈に振舞っていても疲れた様子が見て取れる。

「で、あの娘のクスリは抜けそうか？」

あの娘、というのは、エアニス達が助けたとある少女の事だ。人身売買組織に捕らわれ、麻薬漬けにされていた少女、ノキア。エアニス達は、トキを中心として彼女の体から麻薬の依存を取り払う為の方法を探しているのだ。

しかし、酒や煙草を止められる特効薬が無いように、強力な麻薬の依存を消し去る事など容易な事ではない。

「僕には多少の医学と科学の知識があります。チャイムさんには一流の魔法医としての知識が、レイチェルさんにはエルカカ一族に古代から伝わる魔導の知識があります。これだけの要素があって、方法を見つけられない方がおかしいですよ」

そう言って、トキは散らかった机の上の資料を片付け始める。それが強がりのように聞こえたエアニスは、しかめ顔で唇を弾いた。

「・・・そいえば、エアニスはあまり役に立ってませんね」

「・・・買い物でも行こうか？」

「お願いします」

日が昇り街が動き始めた頃、エアニスは病院の敷地を出た。朝早い事もあり、外の空気は冷たい。オーランドシティの南に横たわる山脈を越えてから、季節は加速するように冬へ向っている。ほんの数週間前、常夏のオーランドシティで海水浴をしていた事がひどく昔の事のように

感じた。

「ついでに冬用のマントでも買ってくかな・・・」

肌寒さに首を縮め、エアニスは手元のメモを見た。そこには治療魔法の媒介として使われる植物の名前が沢山記されている。殆どが聞いた事も無い名前だ。

「そーね。この街で夏物処分して、冬の装備に変えたほうが良いかも」

エアニスのすぐ後にはチャイムが居た。魔法医用の薬を買いに行くのに、魔法医の知識が無いエアニスだけでは不安だと言って彼女の方から付いて来たのだ。

「で、どこのお店行くの？」

「もちろん、ノキアの店だ」

偶然にも、ノキアの家は魔法医に薬を卸す薬屋だったのだ。トキが実験で使う薬も、魔法医を相手にする薬屋でなら手に入る筈だった。もちろん、ノキアの様子を見に行くという理由もある。

「何より、薬をタダで譲ってくれそうだからな」

「うわっ、せこい」

そんな事を話しながら、エアニスはノキアの店のドアを開けた。ドアに吊るしたベルが鳴り、カウンターの奥からノキアが顔を出した。

「エアニスさん！」

「どうも」

エアニスが手を上げて挨拶をする。

「今日はお客だ。このメモにある薬が欲しいんだが」

「・・・ひょっとして・・・私の薬に使う材料ですか？」

「そんなとこだ」

「それならば、うちの店にある薬ならどれでも持って行って下さい。

このメモにある物も・・・全部ありますから」

そう言うとノキアはメモを片手に、店の棚から薬を集め始めた。

「ホントか？」

「いやあ、悪いな・・・」

白々しく言うエアニスを、チャイムは蔑んだ目で見下ろしていた。

「アンタって奴は・・・」

「いいじゃねーか・・・浮いた金でマントや服買って帰ろうぜ・・・」

「駄目よ！ トキが怒るわよ・・・！」

ノキアに聞こえない位の小さな声で、二人はコソコソと喧嘩を始める。

「構やしないよ・・・ついでにカフェでケーキでも食って帰るか？」

「あ、うん」

ケーキでコロリと懐柔されたチャイムは、以後文句を言う事は無かった。

「店番なんてしてて大丈夫なのか？」

薬を袋詰めしているノキアへ、エアニスは尋ねる。彼女は手早く薬を包みながら、  
「はい、昨日もおとついても、決められた時間にあの紅茶を飲んだら発作は起こりませんでした。  
体も、具合が悪いという事ありませんし」

「そっか」

それが根本的な治療どころか、現状を悪化させているだけの間に合わせの行為だという事を、  
彼女も知っている筈だ。しかし、今はそれしか出来る事が無いのだ。

ノキアは薬の詰まった紙袋をエアニスに手渡す。

「あの、トキさんは・・・？」

「あいつは部屋に籠りっきりだ。あんたの薬作るために、がんばってる」

ノキアはエアニスから1歩下がると、深々と頭を下げた。

「・・・トキさんに、どうかお願いしますと伝えて下さい。

その・・・わたしでは、あまり大したお礼はできませんが・・・」

申し訳無さそうに視線を落とす彼女に、エアニスは口元に人差し指を当てながら言う。

「そうだな・・・

頬にキスの一つでもしてやれば、あのムツリは大喜びするんじゃないのか？」

「えっ、えええ！？」

エアニスの冗談に、ノキアはリアクションに困った驚き顔、チャイムは呆れ顔を見せる。

「まあ、考えといてよ。それじゃ」

そう言い残し、エアニスは店を出た。チャイムもノキアに笑いかけてから、エアニスを追った

。

ノキアは暫く二人の出た扉を見つめていたが、クスッと小さく笑った後、カウンターに残った瓶や包み紙を片付け始めた。

◆

「チーズケーキとアップルティー」

「あ、あたしはモンブランとダージリンで」

大通りに面したオープンカフェで、エアニスとチャイムは注文を待つ。エアニスが椅子に沈み込み、あくびを噛み殺した。

「・・・ね、寝てないの？」

「あんまりな」

「ふ、ふーん・・・・・・・・・・そう」

トキが薬の研究に没頭している為、ルゴワールの襲撃に対する警戒はエアニス一人で行っている。一日中周りの気配に気を配っているせいで熟睡する事も出来ない。

そう言うチャイムも寝不足である。夜遅くまで、トキとレイチェルと薬の精製について意見交換をしているからだ。





すっ、き・・・って、そ、そんなの知らないわよっ！！」

「は、はあ・・・？」

熱くなった頬を両手で覆い隠し、チャイムは叫んだ。

「それにしても・・・トキは何であんなにノキアちゃんにこだわってるのかな？」

運ばれてきたケーキをつついているうちに落ち着きを取り戻したチャイムは、今まで疑問にしていた事を口にした。

「トキってさ・・・その、外面はいいけど、極端に他人への関心が無いじゃない？」

もちろん悪い事じゃないんだけど、そんなトキにしては今回の件はらしくない気がしちゃってさ・・・」

エアニスは一フォークを止める。

「へえ・・・良く見てるな」

「まあ、あんた達とは一日中一緒に居る訳・・・だしね」

そこで何故か再び言葉をどもらせてチャイムは言った。

エアニスは手にしたティーカップをソーサーに戻し、抜けるような青空を見上げる。

そして、言うか言うまいか迷った後、言葉を選ぶようにして話し始めた。

「多分・・・あいつは今の自分を、昔の自分と重ねてるんだろ」

「どういう意味？」

チャイムが眉を寄せる。エアニスは組んでいた足を戻し、トーンを落とした声でチャイムに言う。

「あいつは、麻薬のせいで唯一の家族を失ってる」

ゆっくりと、チャイムは息を詰めた。

トキの身の上話話など聞いた事が無かった為、チャイムは一瞬その言葉の意味を掴みかねた。エアニスはチャイムと視線を合わせず、ぽつり、ぽつりと話を続ける。

「その時、あいつは何も出来なかったんだ。

だが、今のあいつなら、昔と違って知識も金もある。同じ境遇の人間を、あの時助けられなかった人を、今度は救う事ができるかもしれない。

多分、そう思ったんだろ」

チャイムは黙ってエアニスの話に耳を傾ける。口を挟みたい所は多々あるが、聞いて良いものかどうか分からず言葉に出来ない。

「・・・だとしたら、トキにしては珍しく人間らしい行動だよ。

だから、今回ばかりはアイツに協力してやりたくてな。

レイチェルや、もちろんお前にも感謝してる。

ありがとうな、アイツにつきあってくれて」

苦笑い、といった表情を見せるエアニス。アップルティーの最後の一口を飲み干し、そう話を締めくくった。

「・・・トキは・・・」

チャイムが何かを言いかけた時、

『!』

チャイムとエアニスは、何かに気付いたように肩を震わせる。

「・・・エアニスのうしろ・・・向こうの通りから、誰か見てた・・・」

チャイムは、視線の主と一瞬だが目を合わせてしまった。何ともいえない、気味の悪い敵意が向けられていた。エアニスは律儀にフォークとナイフを紙ナフキンで拭い、ケーキ皿に置いて溜息をつく。

「ああ、嫌な感じの気配だったな・・・

どんな奴か見たか？」

「少しだけ・・・2人組みで、揃いのマントを着てたわ。フード付きで、黒っぽいマント」

チャイムの証言に、エアニスの表情が強張る。

(まさか・・・あの連中か?)

揃いのマントを纏った集団。エアニスはそれに心当たりがあった。以前、エアニスが一人でレナの墓標へ赴いた時、彼を襲った襲撃者達。

そして恐らく、レイチェルの故郷を襲ったのも――

「トキの所へ戻るぞ」

「あ、うん！」

エアニスがコインをテーブルに置いて、席を立った。チャイムも残ったケーキを急いでかき込み、エアニスの後続く。

カフェを後にしたエアニスとチャイムの後を、例の気配は追いかけてきた。

「ど、どうするのよ？」

背後に気配を感じながら、チャイムはエアニスに聞く。

「撒いた所で・・・意味は無いかな・・・。

どうせこの街での拠点・・・研究室の方も知られてるだろう。

あーあー。マジで見つかったなあ・・・」

アテが外れたといった程度の落胆を見せ、エアニスは早足で歩く。その間にも、敵の手が何処まで伸びているのだろうか考える。戦いの最中、直感と経験で相手の出方を読むのは慣れているが、こういった読みは面倒だ。

「じゃあ、後の奴ら無視して、早くトキ達の所に戻る！」

チャイムの提案に、エアニスは暫し考え、

「・・・そうだな」

チャイムの意見に賛同し、エアニスは歩みを速めた。当然のように、後の気配もエアニスの歩幅に合わせるように付いて来る。

エアニスが後を振り向いた。

付いてくる気配が、2つから3つへ増えていた。それだけに留まらず、一つ、また一つと、エ

エアニス達を追う気配が増えてゆく。

「え、エアニス、これって・・・！」

そうしているうちに、前方にも新たな気配が現れた。赤黒い、揃いのマントを羽織った4人組の男。

その姿を見てエアニスは確信する。赤黒いマントと、白いデスマスクを身に着けた集団。ルゴワールで暗殺を主な任務とする"マスカレイド"と呼ばれる部隊である。しかし、目の前の4人はフードもデスマスクも被っていない為、街中でも違和感を感じる格好では無い。

突然、エアニスは、チャイムの手を引いて走り出した。そして、大通りのど真ん中にも関わらず、腰の剣を抜いた。抜き身の剣を携えて走るエアニスを見て、周りの通行人が驚く。

「ち、ちょっと！！エアニス！！」

「付いて来い！」

そう言って前方の4人組に向けて走り出す。エアニスに手を引かれたチャイムはダッシュについて行けず、足をもつれさせながら必死で走った。

エアニスは身構えるマントの男達へ、走り込みながら剣を一閃させる。立ちはだかる男達は驚き顔で、左右に飛んでエアニスの剣戟を避けた。

うわあっ！！

抜いてるぞ！！

きゃあっ！！！！

多くの人々が行き交う大通りで剣を振り回すエアニスに驚き、群集が一斉に動いた。

マントの男達は人波に飲まれて動きを封じられる。エアニスとチャイムは割れた人ごみの間を堂々と中央突破した。

逃げまどう群集に行く手を遮られているマント男達を鼻で笑い、エアニスとチャイムは路地裏に飛び込んだ。

「はあっ、はあ・・・エアニス・・・無茶しないでよ・・・！！」

「上手く振り切ったじゃねーか」

「まだこの街に居なきゃなんないんだから、目立つマネしちゃ駄目！！」

「うるさいなあ・・・もし捕まったとしても、大した罪にはならねーよ」

エアニス達は狭い路地裏をずんずんと歩きながら話す。チャイムは現在地が全く分からないが、エアニスは迷うそぶりも見せず歩みを進める。

「道分かるの？」

「この辺りの道は一通り頭に入れておいた。市街戦での鉄則だぞ」

「頼むから、この街を戦場にはしないでね・・・」

「奴ら次第だな」

ゲッソリとうな垂れるチャイム。

「さてさて・・・奴らの目的は何だと思う？」

俺じゃああるまいし、まさかあの大通りで仕掛けて来る気は無かったと思うが・・・っ！！」

エアニスは唐突に歩みを止め、チャイムの手を引き横手の壁際に隠れた。それとほぼ同時に足音が近づき、対面する路地からマントを羽織った人影が現れる。しかし彼らは、二人の存在には気づかず、そのまま通り過ぎて行った。

「・・・さっきの奴ら？」

「ああ。物騒な気配だったなあ・・・どういうつもりだ？」

二人は来た道を引き返し、ルートを変えてトキとレイチェルが待つ大学病院へ向う。しかし、エアニスが選ぶ道は何処もマント男達に遮られており、身を隠しながら突破をする事は難しかった。

5度目に出くわしたマント男をやり過ごし、路地裏の物影でチャイムは小声でエアニスに話しかけた。

「これって・・・囲まれてるわよね？」

「ああ。こうなると、もう邪魔な奴を倒すしかないな・・・」

彼等の着ているマントは、あらゆる銃弾も魔導も効かない、魔導技術で作られた特殊な生地と金属繊維で出来ている。例え人間一人を跳ね飛ばすだけの衝撃を与えても、マントはその衝撃を吸収し、装備者の体を僅かに揺さぶる程度の衝撃しか伝えない。エアニスを知る限り、戦車の装甲を貫通するような大口徑ライフルを持ち出すか、エアニスの持つ"オブスキュア"で、マントに仕込まれた魔導式を打ち破りながら斬りつけるしか、彼らにダメージを与える手段は無い。しかし、それは相手を殺してしまう事に繋がり、街中に死体を一つ転がしてしまう事になる。とはいえ、あのマントを着られていては、手加減して気絶させるだけ、という事も難しい。マントの性能だけでなく、マスカレイドの刺客は誰もがそれなりの手練揃いだという事をエアニスは知っている。

「駄目よ。いくら相手が悪人でも、そんな事したら街に居られなくなるか、逆に憲兵隊に目を付けられて当分街を出れなくなっちゃう。

まだノキアちゃんの薬出も出来てないし、レイチェルの旅も終わってないんだから」

「分かってるよ、んな事は。でも、いつまでもこんな所にいたらトキ達が・・・」

そこまで言って、エアニスはハッと気付いた。

何で奴らは仕掛けてこない？

俺に以前、まるごと一部隊潰された事で警戒してるから？

いや、それを知っているならもっと頭数を連れてくるか、とびきりの手練を連れてくる筈だ。

それとも、俺達の足を止める事そのものが・・・

そこまで考えて、ようやくエアニスは"マスカレイド"と、トキの関係を思い出した。

「あ・・・」

くしゃり、と、エアニスは自分の髪を掴んだ。

ようやく連中の目的が分かった。今の今まで気付かなかった自分を張り倒したくなった。

「エアニス？」

裏道の真ん中で立ち尽くすエアニスに、チャイムが心配そうに声を掛ける。

「！！」

背後に気配が生まれた。

考えに没頭していた為、エアニスの反応は一瞬遅れた。チャイムの頭を掴んで、物陰に押し込もうとする。

「わっ！ ちょっ・・・！！」

いきなり押さえ込まれたチャイムがバランスを崩し、エアニスの襟を掴んだ。

(うおあっ！)

声にならない声を上げ、エアニスもバランスを崩して倒れ込む。幸い、新たに現れた気配がエアニス達に気づいた様子は無かった。

チャイムは打ち付けた後頭部をさすりながら、息を潜めて身を起こそうとする。すると、今度は額にドスンと何かが当たった。

「う・・・わわ・・・っ！」

チャイムの額にぶつかったのはエアニスの胸だった。仰向けに倒れこんだ彼女の上には、僅かに体を浮かせて覆いかぶさるエアニスが居た。

間違ってもトキやレイチェルに見られたくない状況である。

(しーっ！)

(・・・・・・・・っ！)

チャイムの顔の目の前で、エアニスが人差し指を口元に当てた。エアニスの顔が近い。

エアニスの全く乱れていない息遣いが聞こえる。当然、彼には乱れまっくったチャイムの息遣いも聞こえているだろう。

(こ・・・この状況は・・・色々とマズイ・・・)

どんどん顔に血が昇ってゆくのが分かる。



エアニスは身を隠した木箱から、少しだけ顔を覗かせようとして身を起した。チャイムの内腿に触れていたエアニスの膝が動く。

(っ……！)

口を押さえて、チャイムは身を震わせる。その顔に、バサリとエアニスの長い髪がこぼれ落ちてきた。

(うぶっ！)

首を振って髪を払いのける。彼はチャイムの様子に気付いていない。

「何か話してるみたいだな……」

マント男達の会話は、ハーフエルフであるエアニスの耳なら何とか聞き取れる声量だった。小声で囁き、エアニスはもう少し身を乗り出した。その時、チャイムの頬に落ちていたエアニスの髪が、彼女の首筋を撫でた。

ぞぞぞぞぞぞぞぞ

(うひiiiiiiiiiiiiii——！！)

何ともコメントし難い感覚が全身を駆け抜け、チャイムはエアニスの下で身悶えする。



「居たか？」

「いや、この包囲網の中をグルグルと回ってるようだ。やはり、向こうも我々とやり合うつもりはないようだな」

「そのくらいの分別はあるって事か。

・・・噂では連れの男もとんでもないバケモノらしいじゃないか」

「本当か嘘かは分からんがな・・・それより心配なのは向こうの方だ。

戦力を分断したとはいえ、ターゲットはこれまでの任務の中で最悪の相手だ」

そして、マント姿の片割れが言い淀むように、その名を口にする。

「トラキア=スティンブルク・・・。

"マスカレイド"の、いや、"ルゴワール"屈指の暗殺者が、何故こんな街に・・・」



「やられた・・・

連中の狙いはトキだ」

トキの過去を知るエアニスは、男達の会話で全てを理解した。

彼らの狙いは、レイチェルだけではない。

"マスカレイド"は、今まで姿をくらましていた"裏切り者"の始末に来たのだ。

面倒な事になってきたな、と唇を噛む。

エアニスは、あの刺客達の事などは本当のところ、どうでもよかった。それよりも、このままではトキの素性がチャイムやレイチェルに知られてしまうという事を危惧した。

しかし、今は目の前の状況を何とかしなければならない。ここを一刻も早く突破し、恐らく襲撃を受けていると思われるトキやレイチェルと合流しなくてはならない。

「チャイム、隠れんぼをしてる暇が無くなった。

多少の騒ぎは覚悟で一気に・・・」

そう言いながらチャイムを見て、エアニスは絶句する。

エアニスの下で仰向けに倒れたチャイムは、顔を真っ赤にしてエアニスを見上げていた。しかも、その目にはうっすらと涙が浮かんでいて、見ている間にもそれはぽろぽろとこぼれ出した。

ここに来て、エアニスはようやく自分がとんでもない事をしている事に気付く。

男達の会話を聞くため身を乗り出した時、エアニスの右手は、チャイムの胸を鷲掴みにしていたのだ。

それに気付いたエアニスは、すぐに右手を離す事が出来なかった。それどころか、自分でもよく分からない衝動に駆られ、彼女の胸の感触を確かめるようにフニフニと指を動かしてしまった。

「み、見た目より胸大きいんだな」

気は確かかと自分に問いながら、そんな言葉を口走っていた。

死んだ。エアニスがそう思い、そっと目を閉じた瞬間、

「死んで来いドスケベ！！！」

チャイムの本日2発目のアッパーカットが、エアニスを空高く打ち上げた。

「なっ、何だ！！？」

マント男達が驚きの声を上げる。路地裏の奥から、女の絶叫と共にスイカが砕け散るような音がしたのだ。

男達が路地裏に振り向くと、

「すまん！！今回ばかりは俺が悪かった！！謝る！！痛い！！」

「信じてたのに！！アンタはトキと違ってそういう奴じゃないと思ってたのにっ！！」

男を片腕で吊るし上げた女が、泣きながら男へボディブローを連打していた。

「お・・・おいおい、何だよこいつら・・・」

マント男達は青ざめた顔を引寄せ、一歩引く。出来れば関わりたくないが、このまま無視する訳にもいかない。

「お、おまえら・・・ココは今取り込み中だ。

面倒ごとに巻き込まれなければ、さっさと出てけ・・・」

どん引きしながらもチャイムとエアニスに近づくマント男。一方的にバイオレンスな暴行を受けている男が、自分達が追い込んでいるターゲットのひとりだとは微塵も思わなかったようだ。

男を吊るし上げた女がグルリと振り向くと、

「コッチの方がお取り込んでんのよ！！」

ぱぐしゃっ！！

男の即頭部を、チャイムの裏拳が叩いた。エアニスの腹を打っていた拳が、一切の無駄な動きを見せず、お手本のようなコンボへと繋がった形だ。防弾・耐衝のフードを被っていなかった為、マント男はまともに脳を揺さぶられ、支えを失った操り人形のように崩れ落ちた。

「きさま！」

男がナイフを抜いた。刃を艶の無い黒で塗った、暗殺用の物だ。しかし、その腕はエアニスの右手にねじ上げられ、そのままゴキんと肩を外された。男が悲鳴を上げるよりも早く、彼の顎はエアニスの左掌に打ち抜かれ、意識を刈り取られる。

2人目のマント男を倒したのも束の間、今度はチャイムの正拳がエアニスの顔面を捉えた。まだチャイムの制裁は終わっていないのだ。

「待て！！一旦待て！！お前の不満は後で受け止めてやるから今はコイツらを！！」

「問答無用オーーーーー！！」

チャイムの折檻はもう暫く続く事になる。チャイムにとって敵はマント男ではなくエアニスだった。

数分後、路地裏には倒れ伏した3人の男と、息を切らして仁王立ちする少女の姿があった。

それは全て、彼女の乙女心が成した事だった。



レイチェルは、化学式がビッシリと書き込まれたトキのノートに目を通していた。時折、科学書を手に取り、ごく稀に魔導書のページをめくる。考えを纏めてペンを走らせ、今まで導き出した幾つかの解と照らし合わせ、トキの提唱する理論が魔導にも当てはまるかを検証してゆく。

彼女がページをめくる音と、ペンを走らせる音だけが部屋で聞こえる音だった。小一時間ほどが経過し、ソファに沈み込んでいたトキが船をこぎ出した頃、レイチェルはペンを置いて感嘆の息を吐いた。

「すごい・・・完璧です！！」

トキさんが言うこの論理は、魔導で実現可能です。昨日、不可能だと判断したグリモア草のレキスト分離も、トキさんが教えてくれた式の14番目で実現できそうですし・・・これなら、マゴリアの依存を中和できる薬が作れる筈です！！」

レイチェルの喜びの声に、眠りかけていたトキはビクリと顔を上げる。

「ああああ・・・そうですか。自分では少し自信が無かったのですが、魔導士から見ても意味が分かるという事は、僕の解釈は間違っていないみたいですね・・・。

では、一度この線で薬の精製を試してみましようか」

トキは目を擦り、凶悪な睡魔を呼び起こすソファから背中を引き剥がす。そして自分の定位置である、資料が山積みされた机についた。

「実験の準備ですか？

まだ材料の薬草も届いてませんし、少し休んだ方が・・・」

「材料が無くても出来る準備はありますよ。

僕はいいですから、レイチェルさんの方こそ、少し休んで下さい」

疲れ果てた表情にいつものこやかな笑顔を乗せて、トキはそう言った。レイチェルはそんなトキを見て、諦めたようにくすり、と笑う。

レイチェルは、ここ最近になってから疑問に感じる事がある。

彼女はトキと一緒に旅をして来て、トキがどのような人間か、ある程度は理解しているつもりだ。

そんな彼女がトキに対し最も強く感じている事は、彼は人と関わろうとしない、という所だ。

出会った当初、人当たりも良く社交的な性格から、そんな印象は欠片も感じられなかったが、一緒に旅をするうちにレイチェルは気付いた。トキは、その社会に溶け込みやすい容姿と性格を利用し、人を避けているのだと。

エアニスのように、人間社会を掻き分け、ぶつかり、波風を立てながら通り過ぎるタイプではない。人々に溶け込み、表層的に交わり、そして何も残さずに通り過ぎて行く。トキはそんなタイプの人間だった。

そんなトキも、ごく稀に積極的に人に関わろうとした時がある。他でもない、レイチェル自身が抱える"ヘヴンガレット"の件と、今回のノキアの件である。

トキは何故、ノキアの為にここまで身を削り頑張るのか。そして、今更ながら何故自分の旅に協力してくれているのか。トキの性格をある程度理解できた今だからこそ、分からなくなった。

「その・・・トキさんは、どうしてノキアさんの為にそこまでするんですか？」

レイチェルは感じた疑問をそのままトキに投げかけた。ややニュアンスに誤解が生まれそうな問いかけに、トキは首を傾げた。

「レイチェルさんらしくない質問ですね。

困ってる人が居たら、助けるのが普通じゃないですか？」

「それは・・・」

レイチェルは言葉を濁す。

普通はそうかもしれないが、レイチェルの知るトキは、恐らくそれに当てはまらない。とはいえ、それは悪口以外の何でもない所以她は言い淀んでしまった。レイチェルがトキと出会ってから、彼の方から関わり合いを求めた人物は自分とチャイム、そしてエアニス以外に心当たりが無かった。自分達を除き、ノキアは唯一トキの方から積極的に関わりを持つとした人物なのだ。

困っているレイチェルを見て、トキは笑った。

「あはは、どうやら、見透かされているようですね」

「・・・え？」

レイチェルは凶星を突かれた事以上に、トキが話をはぐらかさず、自ら言葉の偽りを認めた事に驚いた。

トキは眼鏡を外し、シャツの裾でレンズを拭きながら言う。

「もちろん、僕にだって出来れば助けたい、という気持ちは多少なりともありますよ。

ですが、それ以上に試してみたかったです」

「何を、ですか？」

「自分の研究成果をですよ」

眼鏡を外し、淡々と喋るトキは、少し怖かった。

「僕がミルフリストで大学生をしていたのはね、ノキアさんみたいな人を助ける為なんです。

ですが、机上の検証や普通の実験では、自分の理論が正しいかどうか証明するのに限界があります。

まあ、つまりは・・・」

トキはそこで一度言葉を切ると、

「ノキアさんは、丁度良い実験体だったという事です」

レイチェルに言葉は無かった。

トキは肩をすくめて、

「もちろん、自信が無ければこんな事はしませんよ。人の命がかかっているのですからね。

が、しかし、正直僕の自信は過信だったようです。ここまで薬の精製に苦勞するとは思いません

んでしたから。

だから、手伝ってくれたレイチェルさんやチャイムさんには、本当に感謝しています。僕一人では、駄目だったかもしれませんからね」

そう言って、トキは笑った。

この場にチャイムが居たら、トキは間違いなく殴り飛ばされていただろう。誰が聞いても、身勝手な言葉だった。

しかし、レイチェルはトキを責める事よりも、どうしても聞きたい事があった。

「それじゃ・・・トキさんは何で私の旅に協力してくれているんですか？」

咄嗟に口を突いた言葉だった。

トキにとって、ノキアは実験体だというのなら、自分はトキにとって何なのか。レイチェルは言葉にしてから気付いた。その答えを聞くのは、かなりの恐怖である事に。

トキは苦笑いを浮かべ、

「もちろん、僕にメリットがあるからですよ。

それについては・・・詳しくは話せませんが」

回答は、曖昧にぼかされたものだった。トキは拭いた眼鏡をかけ直し、

「この旅が終わるまでには、必ずお話します。

でも今は・・・もう少し、時間を下さい」

その言葉を最後に、二人の間に沈黙が落ちた。

研究室の中は街の喧騒も届かず、その静寂はレイチェルの耳の奥を、心を圧迫してゆく。

「・・・コーヒーを、淹れてきますね」

レイチェルは静かにそう言って、逃げるように部屋を出て行った。

一人になったトキは、椅子に沈み込み、深く深く、溜息をついた。



レイチェル達が間借りしているこの大学病院は、丁度学生達が長期の休みの最中であり人気は全く無い。少し離れた別棟に、数人の教師が詰めているだけだという。

そんな静まり返った廊下を、レイチェルは歩いていた。

トキの言葉がレイチェルの心に影を落とす。トキは、レイチェルの為ではなく、自分の目的の為、この旅に同行しているという事。レイチェルは、トキに利用されているだけなのかもしれないと言う事。

レイチェルは首を振った。もしそうだとすると、トキはエアニスと共に、自分とチャイムを守ってくれている。アスラムへの船上で、ルゴワールの軍隊と戦った事、オーランドシティで、4人で疲れ果てるまで海で遊んだ事。苦楽を共にしている仲間だという事には、変わりはない。エアニスはトキの笑顔指して、愛想笑い、作り笑いだと蔑む事があるが、その笑顔の全てが偽物だとはレイチェルは思えなかった。

「きっと、事情があるのよ・・・うん、そうじゃなかったら、わざわざこんな事、当の私に言う事無いもんね・・・」

廊下の突き当たりにある給湯室で、レイチェルはコーヒーを淹れながら、自分に言い聞かせるように呟く。

何気なく。

背後に生まれた気配に、レイチェルは振り向いた。

そこに居たのは異様な姿の人間。全身をフード付きの赤黒いマントで多い、顔には真っ白なデスマスクをしていた。

それは、レイチェルにとって忘れる事の出来ない仇の姿。

レイチェルの故郷を襲った、ルゴワールの刺客達と同じ姿だった。

「・・・！！」

レイチェルは言葉を失い硬直する。よもやこんな街中でこの姿を目にするとは思ってもしなかったのだ。レイチェルの硬直が解ける前に、デスマスクの男はレイチェルの顔にスプレーを吹きかけた。まともに吸い込んでしまったレイチェルの意識が薄れる。

「あ・・・う・・・」

レイチェルはよろめきながら男のマントに掴みかかった。しかし、すぐに力なく崩れ落ち、床に倒れ伏した。

同じ姿をした、デスマスクの男達が3人、隣の部屋から現れた。

廊下に出てきた3人目の男は、赤黒いマントは羽織っていたものの、デスマスクは被らずに素顔を晒していた。

「あれだけ組織が手こずっていたこの女の確保も、不意をついてやればこんなものか・・・」

その中の一人、金色の髪を長く伸ばした男が、床に崩れ落ちたレイチェルの腕を引き上げ、気を失っている彼女の顔を覗きこんだ。

彼女の腕を掴む手に力を込める。

「久し振りだな。会いたかったぜ・・・」

怨嗟にも似た声色で、男はそう言った。

一通りの片づけを終えて、トキは手をはたいた。

「さてと、後はエアニス達の戻りを待つだけですわが・・・遅いですね」

そしてレイチェルが出て行ったドアを見る。

「・・・レイチェルさんも・・・」

トキは、先のレイチェルとのやり取りを少しばかり後悔していた。ただでさえ、ノキアを助け出す時の一件で、あのような姿を見せてしまったのだ。もう少し、マシな言い方があったらうに、どうしても自分の事は自虐的に話してしまう所がトキの悪い癖だった。

レイチェルはいつもと変わらない様子で接してくれているが、彼女の内心はどうなっている

のか。

とはいえ、いつまでも秘密にしておくのも気分が悪い。

自分の過去の話、この旅に同行している理由。いずれ話しておきたい事ではあるが、きっかけが掴めなかった。何より、出来るなら話したくないという思いが、心のどこかにあった。

自分の女々しさに嫌気がさしたトキが額をゴンゴンと小突いていると、窓の外から乾いたエンジン音が響いた。

エアニス達が車を使って買い物から帰ってきたのかと思ったが、違う。車のエンジン音が違っていたし、車のキーは自分が持っている。トキは窓に寄り、外の様子を見た。

そこには幌のついた黒塗りのトラックが止まっていた。そして、見覚えのある赤黒いマントを纏った男達。マスクとフードは外していた。そして、今まさに、レイチェルが男の一人に抱えられ、車に乗せられようとしている所だった。

トキはその男と目が合った。長く伸ばした金髪で、切れ長の目をした男。

それは1年半振りに見る、よく知った顔だった。

心臓がドクンと大きく跳ね上がる。

「ツヴァイ！！」

トキが大声でその名を叫んだ。金髪の男、ツヴァイは、地上からトキが居る3階の室内に向けて、銃弾を放った。

パァァン！

トキの目の前でガラスが砕け散り、トキの耳元を銃弾が掠めていく。その衝撃で、後のソファ一へ倒れこんでしまった。

「クソッ！！」

トキは自分の荷物を掴むと、3階の割れた窓から身を躍らせる。壁を蹴り、少し離れた木立の枝を掴み、落下スピードを落としてから地面に着地する。

その時には車は走り出し、建物の影へと消えていった。タイヤを打ち抜こうと銃を構えたが間に合わず、トキは舌打ちをしてからトラックとは逆の方向へ走り出す。自分達の車で追いかけるつもりだった。



その出来事から数分後。エアニスとチャイムが研究室に戻ると、部屋には誰も居なかった。外出する前と違っていたのは、窓ガラスが割れ、天井に銃弾が撃ち込まれていた事。そして、トキとレイチェルの姿が見当たらない事。

「遅かった・・・か？」

現状を把握出来ず、エアニスは戸惑う。とりあえず、他に変わった所は無いかと、部屋を見て回った。

「車も無くなってるし、二人とも居ないし・・・どうなってるのよ!？」

「知らねーよ。

・・・トキの荷物が無くなってるな。レイチェルの荷物はそのまま、ロッドも帽子も置きっ放しか・・・」

「それって、どういう事よ？」

「・・・さあな。全く見当が付かない」

「・・・」

二人は次の行動を決める事が出来ず、部屋の中で立ち尽くしていた。



トキの運転する車が、路肩のごみ収集所を蹴散らしてカーブを曲がる。

追跡を始めた時は黒いトラックの後姿を確認できたが、さっきから全く相手の姿が見えなくなってしまった。車を運転するのが久し振りという事もあるが、相手の運転手の腕はトキより遙かに上だった。焦りだけが先行する。

しかし、トキの口元は笑みの形に歪んでいた。

事はようやくトキが望んでいた方向へと動き出したのだ。

すなわち、この旅を利用し、レイチェルを利用し、マスカレイド部隊の人間を誘い出す事。

レイチェル達と出会い、彼女から事情を聞いたトキは、この旅について行けば、いずれツヴァイがトキの前に姿を見せるであろうと踏んでいた。そして、ようやくその時は来た。

しかし、レイチェルが誘拐されてしまうなどという事態は、トキにとって最悪のシナリオである。夜中に隠密活動ばかりしていたマスカレイド部隊が、このような街中に、真っ昼間から現れるとは思ってもしなかったのだ。

一度戻って、エアニス達と合流するべきか？

しかし、これはトキ1人で解決するべき問題であった。ツヴァイはレイチェルをさらって行ったが、ツヴァイが本当に用があるのはトキの筈である。無論、ルゴワールの刺客として"石"の奪取という命を受けているのだろうが、それは彼にとっては"ついで"の用でしか無いだろう。ツヴァイの目的は、恐らくトキの命。レイチェルは、トキを誘い出す為に誘拐されたのだと、トキは思っていた。

しかし、それは半分誤りであった。ツヴァイは、トキだけでなく、レイチェルにも恨みを持っている事。そして、エルカカの村を襲ったのがツヴァイの部隊だった事を、この時点でトキは知らなかった。

トキは自分だけで事を片付けようと判断する。引き返す事を止め、黒いトラックが走り去った方角へ走り続けた。

トキの車は、寂れた街外れへ辿り着いた。

エルバークの旧市街。先の世界大戦中期に戦場となり、10年以上昔に破棄された区画である

。現在では新市街に居場所の無い者達が暮らす、スラムと成り果てている。そう聞いてはいたが、旧市街に入ってから人を見かける事は無く、そこは無人街の呈を見せていた。

ガオン！

トキの目の前、車のボンネットから火花が散った。続いて車のあちこちを銃弾が叩く。道の両脇に立つ廃墟の窓から発砲の光が見て取れた。しかしこの車は、外装から窓ガラス、タイヤまでもが全てエアニスの趣味によって防弾仕様に交換されており、車の足が止まる事も、トキに銃弾が届く事も無かった。このまま走り抜ける事も可能であったが、トキはブレーキをかけ車を止めた。同時に銃撃が止む。

車の正面、やや離れた場所に、マントとデスマスクの男達が5、6人立ちはだかっていた。その中央には、ただ一人素顔を晒すツヴァイの姿があった。

「・・・ツヴァイ」

一瞬だけ、フロントガラス越しに、トキとツヴァイは睨み合う。

「待ち侘びましたよ、この時を」

トキは助手席に置いた自分の荷物に手を掛けた。

止まったままアイドリングを続ける車の周りに、赤黒いマントと白いデスマスクの男達が集まり始めた。路地裏や、廃墟の中から次々と現れる。ツヴァイの周りに居る刺客達も含め、20人弱。更に廃屋の中で、狙撃手が数人、身を隠している。

車のドアが開き、トキが姿を見せる。その姿を見て、刺客達は動揺の色を浮かべる。

車から降りてきたトキは、赤黒いコートに身を包み、手には真っ白なデスマスクを持っている

。

それは、マスカレイド部隊の刺客達と、よく似た姿だった。



「久しいな。1年半振りって所か」

姿を見せたトキに、ツヴァイは嘲るような声色で話しかける。

「無駄話は結構です。こんな誘い出すような真似をしてくれたという事は、僕とやり合う気があるのでしょうか？」

「さっさと始めましょう」

トキの言葉に、もとい、その口調にツヴァイは鼻白む。

「何だ、そのふざけた言葉使いは？」

その言葉に、トキはハッと口を噤む。

「ああ、いや・・・気に・・・しないでください。癖のようなものです」

唇をなぞりトキは笑った。ツヴァイはその余裕に満ちたトキの態度が気に入らなかった。

「たった一人で俺達を相手にするつもりか？」

もう俺達は、お前の居た頃のマスカレイド部隊じゃない。組織を離れ、ぬるま湯に浸かっているお前じゃ、俺達には敵わないぞ」

ツヴァイの声を聞きながら、トキはコートのフードを被り、鋼鉄と魔導鉱石で作られたデスマスクを顔にあてた。途端に、トキが振りまいていた敵意や殺気が消えた。刺客達の目はトキの異形の姿を目に写しながらも、不思議とその姿を頭ではっきりと認識する事が出来なかった。敵意や殺気、感情ばかりではなく、完全な"存在感"の消失。それは人でありながら、人の精神を越えた人



外の"存在"。

「やはりその姿が一番似合っているぞ。

・・・マスカレイド創設メンバー、トラキア=ステインブルグ」  
ツヴァイが右手を振り上げると、刺客たちが一斉に武器を抜く。  
戦いの始まりの合図だった。

トキが駆け出した直後、その足元の石畳が粉々にはぜ割れた。

身を隠した狙撃手が一齐にトキを狙い撃ちしたのだ。彼らが構えている銃は、普通の狙撃手が使う長距離用ライフルではなく、トキや彼らが身につけているアダマントタイトの戦闘服をも撃ち抜く、対戦車用ライフルだった。

ツヴァイに向い一直線に駆け出すトキへ、デスマスクを被った刺客たちが発砲をする。何発もの銃弾がトキの纏うコートを押した。しかし、トキのコートは全ての銃弾を受け止め、体には軽く叩かれた程度の衝撃しか伝わらない。

この戦場にいる全員が、アダマントタイトの戦闘服に身を包んでいるのだ。大型の銃火器や、アダマントタイトの衝撃許容量を越える爆薬、アダマントタイトの硬度を魔導的に無力化する術などが無いと相手にダメージを与える事が出来ないのである。長期戦は間違い無い。とはいえ、全員を相手にしては日が沈んでも決着はつかないであろう。なのでトキは、周りの刺客達を無視しツヴァイただ一人だけを見据える。元々、周りの塵芥に用はない。

トキとツヴァイの前に、数人の刺客が割り込む。トキの体を叩く銃弾の数が増えるが、構わず刺客の真っ只中に突っ込んだ。

先頭の刺客2人の足元へ滑り込み、前衛の陣形を突き崩す。トキは姿勢を崩した刺客の胸へ、銃口を押し付けた。

ぼごんっ

銃口から噴出したガスと、砕けた銃弾が刺客とトキの間で飛散する。アダマントタイトのマントは着弾の衝撃を受け止めきれず、刺客の胸骨を砕いた。

トキの持つ銃は、拳銃の中では超大型の物である。これでもアダマントタイトを貫く事は出来ないが、零距离で銃弾を打ち込めば、それなりの衝撃を相手に与える事が出来る。それはトキも、マスカレイドの刺客達も知っている事だ。

こうなると、戦いは銃を使った格闘戦となる。そしてこの中でトキに体術で敵う相手は居なかった。入り乱れる刺客達のせいで、対戦車ライフルを持つ狙撃手達も、手が出せなくなっていた。戦況はいきなりトキが狙った通りに流れ出す。

「ツヴァイ！！」

トキが刺客の一人をねじ伏しながら叫んだ。しかし、いつの間にかツヴァイの姿はトキの前から消えていた。



バガンッ

鼓膜をつんざく轟音で、レイチェルは目を覚ます。

反射的に身を起そうとしたが、レイチェルは既に自分の足で地面に立っていた。正確に表すと、気を失っているうちに石の柱に縛り付けられていたのだ。

「よう。気分はどうだ、お姫様よ」

目の前には薄く煙をたなびかせる銃口。硝煙の匂い。そして、自分の耳元の石柱が砕けていた。耳元に銃弾を撃ち込まれたようだ。飛び散った石の破片で頬と耳を少し切っていた。右耳は聞こえなくなっている。

レイチェルは自分の目の前で銃を構える男、ツヴァイを見て、すぐさま意識を覚醒させた。

「くっ！」

一瞬で状況を理解したレイチェルはツヴァイの軽口に取り合わず、意識を集中し目の前の空間に魔導式をイメージする。魔導の熟練者は、手足の自由や呪文の詠唱が無くても、簡単な魔道式ならばイメージだけで起動させる事が出来る。見えない魔導式にレイチェルの魔力が流し込まれ、術式に流れ込んだ魔力が加速する。魔導式の起動点まで魔力が増幅した時、レイチェルとツヴァイの間に、火花を撒き散らしながら巨大な火球が現れる。

筈だった。

その代わりに、魔導式の起動点に達した瞬間、レイチェルの全身に激痛が走った。

「きゃあああああッ！」

体の中から電流を流されたような痛み。その痛みは一瞬で消え去ったが、レイチェルの全身に異常なまでの虚脱感を残していった。冷たい汗が吹き出る。

「薬を打たせ貰った。魔導士の魔力に反応して作用する薬だ。暫くは魔導を使おうとすると、今のように体の内側を焼かれるぞ」

石柱に縛られたまま、レイチェルは荒い息を吐き、ぐったりと首を垂らしていた。

それでも彼女は気力を振り絞り、首を持ち上げ辺りを見回す。

見晴しの良い場所だった。そこは廃墟の立ち並ぶ、旧市街の塔の上。狭い見晴台には、レイチェルの村を襲い、レイチェルの父親を殺した男、ツヴァイと、デスマスクを被り、赤黒いマントを羽織った男の2人が居た。

「下を見てみる。面白いものが見えるぞ」

ツヴァイが大通りを指差す。塔の下の景色は、レイチェルが縛られた位置からでも見下ろす事が出来た。

そこでは、十数人の人間が入り乱れるようにして戦っていた。それは、たった1人を相手に、デスマスクの刺客達が次々と殴り飛ばされているように見えた。

刺客達に襲われている男は、見覚えのあるコートを着ていた。そう、トキが戦いの時にだけ着ている、防弾服だった。そしてその顔は、また違った意味で見覚えのある物、マスカレイドの刺客たちと同じ真っ白いデスマスクで隠されていた。

「トキ・・・さん？」

自信無さげにレイチェルは呟く。ツヴァイはその言葉を肯定するかのよう、にやりと笑った。

「そのままトラキアを引き付けろ。これから300の後に奴を撃つ」

ツヴァイの独り言、ではない。フードの内側に仕込んだ無線機で、刺客達に指示を送ったのだ。因みに、トラキアとはトキの事だ。レイチェルは、いつかあの魔族の少女が、トキの事をそう

呼んでいた事を思い出す。

「何を・・・する気・・・!？」

「トラキアを、この塔の正面にある逃げ場の無い路地に誘い込む。そこを、この特別製のライフルで狙い打つ」

ツヴァイの傍らに、毛布を被せられた何かが立てかけられていた。彼がその毛布を剥ぎ取ると、そこには身の丈程もある巨大なライフルがあった。

「俺達の戦闘服や、トラキアのコートは、剣も銃弾も、半端な魔導も通用しない。これは、アダマタイトという魔導鉱石から作られた特別製だ。こいつを貫くには、目の前から対戦車用ライフルを打ち込むくらいしなきゃ駄目だ。

だが、このライフルなら、遠距離からでも奴を殺れる」

ツヴァイはライフルを、予め用意してあった窓枠の台座へ据え付けながら言う。

「こんな面倒な事をしなくても、やろうと思えばいつでも殺せたが・・・。どうしてもお前に見せてやりたくてな」

「どういう意味よ!？」

「忘れたとは言わせんぞ。貴様のせいで、俺は右腕とはらわたを失ったんだからな」  
ツヴァイが、マントをめくった。

「!!!」

マントの下にあったツヴァイの体は、左の胸から腰の辺りまでが"無かった"。

忘れていた訳ではない。

レイチェルの目の前にいる男は、確かにあの日、兵士達を従えてエルカカの村を襲い、レイチェルの父、シャノンを殺した男だ。そして、レイチェルが不意を突き、この手で倒した筈の男。体の左半分を空間転移の魔導で、心臓に至るまで抉り取った筈だ。

死んだものだと思っていた。

しかし、目の前に現れた男は事実として生きている。チャイム自身あの時は必死で、今でもその瞬間の記憶は曖昧だ。だから、自分が思っていたよりも傷が浅かったのかと思ったが、やはり違う。

ツヴァイは、右腕を魔導で動く自動義手に替え、左の肺と心臓を失った体のままで生きているのだ。

「・・・生ける、屍・・・」

レイチェルが乾いた声で呟く。脳裏に蘇る、あの船上での光景。死なない兵士達。

「そうだ。お前も見ただ事があるな？」

お前にやられた後、俺はあの魔族の女に魂を売った」

レイチェルの脳裏に、軽薄な笑みを浮かべる魔族の少女がよぎった。

ツヴァイはレイチェルに穿たれた体を、再びマントで覆う。

「俺をこんなふざけた体にくれたお前は、真っ先に殺してやりたいところだ。

しかし、上からお前は殺すなという命令を受けている。

だから代わりに、お前の仲間を、お前の目の前で殺してやる」

トキが狙撃可能範囲に入った。狭い路地で、路地を囲む壁には窓が無かった。ここで狙撃されたら、逃げ場は無いだろう。

狙撃に備え、トキを取り囲む刺客達は、ツヴァイの狙撃の邪魔にならないようトキから距離を取り始めた。

「トキさん！！」

レイチェルは力の限り叫ぶ。

「無駄だ、あの騒ぎの中じゃ、ここからの声は聞こえない」

ツヴァイはライフルのスコープを覗き、トリガーに指をかける。

トキはこちらに気付いた様子無く、ツヴァイに背を向けて刺客と組み合っていた。

「本当は、この手で貴様の胸にナイフを突き立ててやりたかったー」

ツヴァイは、唯一の心残りを誰へともなく呟く。

「・・・じゃあな、トラキア」

その声が聞こえたかのように、スコープの中のトキが突然振り返った。

スコープ越しに、ツヴァイはトキと目が合ったような気がした。

「・・・・！！」

ツヴァイの背筋は一瞬にして凍り、得も知れぬ恐怖が反射的にライフルの引き金を引かせた。引き金が引かれるのと同時に、ツヴァイが覗いていたコープが破裂した。

「がっ！！」

ツヴァイが仰け反り、僅かに体を浮かせてからレイチェルの足元に仰向けに倒れこんだ。

ツヴァイのデスマスクには、トキが撃った銃弾が食い込み、煙を上げていた。

トキは、ライフルで狙いを付ける狙撃手に対してハンドガンを撃ち返し、両者の間の距離をものともせず、それを命中させたのだ。

ドン・・・

暫く遅れて、ツヴァイの放った銃弾が、トキや刺客たちから随分と離れた廃墟を撃ち崩す音が届いた。それは、とても一発のライフル弾の威力とは思えないものだった。あれが当たっていたら、いくら強靱なアダマントの防弾服を着ていても、無事ではいられなかったであろう。

「お・・・おあああッ！！何故だ！！何故気付いたッ！！？」

ツヴァイは憤然と身を起こし、マスクの右目に食い込んだ銃弾を引き抜いて石床に叩き付けた。大きな銃弾だったから助かったが、もしそうでなければ、銃弾は右目のスリットに飛び込んでいただろう。生ける屍でも、脳を損傷する訳にはいかない。死ぬ事はなくても、それはツヴァイの自我が崩壊する事を意味する。

マスク外し、右目に手を当てる。ツヴァイの右目は衝撃で傷つき、見えなくなっていた。しかし、体に刻んだ魔族との契約印から、右目に力が集まってゆくのを感じていた。僅かだが、右

目に視力が戻り始める。

「クソがッ！ 狙撃が駄目なら、目の前から直接ブチ込んでやる！！」

冷静さを失ったツヴァイは、立ち上がってスコープの壊れたライフルを掴もうとする。

それは予想だにしていない、あまりにも唐突な出来事だった。

レイチェルはもちろん、ツヴァイも、塔の階段を見張っていた刺客も、全く予想外の出来事だった。

ライフルは、ツヴァイが手に取るよりも早く、彼の傍らに居たもう1人の刺客が拾い上げた。それをその場の指揮官であるツヴァイに手渡すかと思いきや、その刺客は巨大な銃口をツヴァイに向けたのだ。

「お　」

ツヴァイが何かを言いかけたその瞬間、

ドガウッ！！

巨大なライフルの発砲音が、塔の内部の空気を振る寄せた。発射ガスがレイチェルの視界を一瞬だけ覆い隠す。

零距离で放たれた特別製のライフル弾は、ツヴァイの着るアダマタイトのマントを貫き、その背後の壁を吹き飛ばした。ツヴァイの体は、大穴の空いた壁に叩きつけられ、糸の切れた操り人形のように崩れ落ちてピクリとも動かなくなった。

「何だ、今のは！？」

階段を見張っていたもう一人の刺客が、室内での轟音に驚き部屋に飛び込んできた。

ドゴウッ！

その刺客も姿を見せるなり、ライフルを奪った刺客に壁ごと撃ち抜かれてしまった。

僅か10秒足らずの出来事だった。

ツヴァイと見張りの刺客が倒れ、その場には柱に縛り付けられたレイチェルと、彼らを撃った、ツヴァイの部下だと思われた刺客の一人だけが立っていた。

その刺客はライフルを投げ捨て、ナイフを抜いてレイチェルに歩み寄る。

レイチェルは状況が理解できず、一瞬だけ怯えた表情を見せるが、刺客のナイフはレイチェルを縛る縄を断ち切っただけだった。そして、その刺客は顔に付けていたデスマスクを外し、レイチェルに素顔を晒す。

「・・・助けるのが遅くなってすみません。なかなかチャンスが無かったもので」

知らない顔、では無かった。どこかで見た筈だが、すぐには思い出せなかった。僅かな逡巡の後、ようやく男の事を思い出す。

「あ、あなた・・・！？ ノキアのお兄さん！！」

男は、森で助けたノキアを家まで送り届けた時に一度だけ挨拶をした、ノキアの兄であった。

「なんで、あなたが・・・？ それに、これは・・・」

何を言えばいいのか、何から問いただすべきか、レイチェルが迷っていると、

「自己紹介がまだでしたね。私は、カインと言います。

とりあえず、詳しい説明は後で。隊長が動けない間に、逃げましょう」

レイチェルが視線を落とすと、ツヴァイの胸に空いた大穴に、飛び散った血肉が集まり、傷を塞ぎ始めていた。血色を無くし死人の顔をしたツヴァイの目が、レイチェルとカインをじっと見つめている。

「行きましょう。私も手伝いますから。トキさんを助けるんです」

カインは状況が理解出来ず混乱するレイチェルの腕を引き、塔の階段を駆け下り始めた。



刺客との乱戦の中、突然トキの目元に光が射した。それは、誰かが鏡やライトを使い合図を送っているかのような感覚だった。光が射して来る場所に目を向けると、誰かがライフルでこっちを狙っているのが見えた。反射的に撃ち返し、狙撃手の撃った銃弾は明後日の方へ飛んでいったが、その着弾時の衝撃音から、それは普通のライフル弾では無かったようだ。そのまま狙撃に気付かずあのライフルに撃たれていたら、無事ではいられなかったであろう。誰だか知らないが、あの合図を送ってきた人間に礼を言わなくてははいけない。

その人間が、まさか裏切りに走ったツヴァイの側近で、しかもその正体がノキアの兄であるという事を、トキが知るのはもう少し後になってからだった。ましてや、自分がハンドガンで撃ち倒した狙撃手がツヴァイだったという事も、この時は気付いていなかった。

その狙撃が失敗に終わってから、刺客達の動きに明らかな動揺が見られるようになった。理由は彼らを統率するツヴァイから無線による指示が途絶えた事。

トキには刺客達が動揺している理由が分からなかったが、彼はこのチャンスに畳み掛けるように刺客を撃ち倒しにかかった。

戦いは長引いており、さすがのトキも息が切れ始めている。アダマンタイトのマントのせいで、簡単に倒すことの出来ない刺客を全滅させる事は流石のトキにも無理である。早く刺客達の囲みを破り、一旦廃墟の中へ身を隠すつもりでいた。ツヴァイの姿を見失った今、目の前の刺客達とやり合う意味は無い。

残弾も残り少ない。今のマガジンを使い切るまでには、この囲みを突破したいものだ。そんな事をぼんやりと考えながら、トキは銃を振るう。

その時、引き金を引いた指に嫌な感触が伝わった。

弾切れ、ではない。銃弾が詰まったのだ。

普段から銃の手入れや調整を欠かさないトキには、まず起こらない事であったが、相手に銃口を押し付けて撃つ、という無茶な戦い方をしていたため、銃身に負担がかかっていたのだ。

トキは目前に迫る刺客の顎に、銃弾の代わりに拳を叩きこむ。トキの拳に伝わったのは、硬い顎の骨の感触ではなく、分厚い粘土を叩いたような鈍い感触。普通なら相手の上体を薙ぎ倒しているはずの衝撃は、アダマンタイトによって全て吸収されてしまった。こうなる事は頭では分かっていたが、体が反射的に動いてしまったのだ。

まずい。心の中で呟くと、トキの背中に冷たい汗が浮かぶ。

がっ！

短く響く、大きな発砲音とともに、目の前の刺客が吹き飛ばす。アダマタイトのマントが引き裂かれ、その内側から血が飛び散った。

刺客達の視線が、銃弾の飛来した場所を探し辺りを見回す。その間にも、2人の刺客がライフルの弾に撃ち抜かれた。誰かが、近距離から対戦車ライフルを撃っているのだ。

相手は何処か高い場所からこの場を見下ろし、狙撃している。刺客達はそう思い、視線を上に向けていた。

ドガンッ、と、今度の射撃音はすぐ間近で聞こえた。

「トキさん！！」

続いて響く聞き慣れた女の声に、トキはビクッと体を震わせる。

「なっ、レイチェルさん！！？」

戦いの最中だというのに、トキは思わず顔を覆っていたデスマスクを外して、コートの中に隠した。その隙を突こうとしたトキの目の前の刺客が、レイチェルと共に現れたカインのライフルに打ち抜かれた。

突然の同士討ちに、トキを囲んでいた刺客達に更なる動揺が走る。

「きさま、誰だ！！？」

「よせ！女に当たる！！」

刺客の一人がカインに銃を向けたが、もう一人の刺客がそれを制した。

その反応に、レイチェルは冷や汗を流しながらも微笑んだ。カインから聞いた通り、彼らにはレイチェルを傷つけないようにと命令が下りているのだ。レイチェルがここに居る以上、敵は迂闊に発砲する事が出来ない。

ガシャン、と、レイチェルは右手に持った鉄パイプを地面に叩き付けた。その先端には、長い鎖が繋がっている。丁度、レイチェルが普段使っているハンマーロッドと同じ形をしていた。レイチェルが、廃墟に転がったガラクタで作った即席の武器である。

「引いてください。貴方達のマントでは私の術を防ぐ事が出来ないのは知っていますよね？」

口ではそういつつも、レイチェルの眼差しは険しい。彼女にしては珍しく、怒りと憎しみの色が見てとれた。

しかし、刺客達は動かない。その中の数人が銃を仕舞い、腰から刃を持たない金属製の短いロッドを取り出した。

「・・・無駄ですよ。そんな言葉では彼らは引きません」

周りの刺客達と全く同じ装いのカインは、ライフルの弾を詰め直しながら言う。レイチェルは小さく息を吐くと、一足飛びで刺客達の集団に斬り込んだ。

「な・・・なんて無茶な事を！！」

トキは倒れた刺客の銃を奪い、レイチェルと、どういう事情かは分からないが、一緒に居るマスカレイドの刺客と合流するために、立ち足かかる刺客を一人一人昏倒させて行く。



それに対し、レイチェルとカインの戦いは豪快だった。二人は、トキのいる場所に近づきながら移動をしている。レイチェルはカインから離れないように、近づく刺客の足元をハンマーロッドの鎖で次々と絡め、払ってゆく。そして対戦車用のライフルを構えたカインが、刺客達を至近距離から打ち抜いてゆく。彼らはカインに反撃しようにも、すぐ近くにレイチェルが居るため迂闊に発砲する事が出来ない。彼らはトラキア=スティンブルグの殺害の他に、レイチェル=エルナーズの身柄と、彼女の持つ"石"の確保という命令も受けているのだ。既にレイチェルの身柄は押さえたと連絡を受けていた彼らにとって、この事態は予想外の事だ。

銃を向けられない事をいい事に、レイチェルは鉄パイプをハンマーロッドの要領で操り、刺客たちの動きを制してゆく。彼らのマントの前では、こんな鉄パイプは戦う為の道具にはならない。なのでレイチェルは、刺客を倒すことよりもカインのサポートに徹する。レイチェルの操る鎖は意志を持つ蛇の様に、地面を、宙を這い回り、二人を囲む刺客たちの動きを妨げる。ツヴァイに打たれた薬のせいで魔導が使えなくとも、レイチェルは十分にマスカレイドの擁す精鋭の刺客達と渡り合っていた。そして、レイチェルに動きを止められた刺客は、次々とカインのライフルに撃ち抜かれる。



「こっちです！」

カインが、トキに向かい叫んだ。

トキはレイチェルに視線を向けると、レイチェルはトキの目を見て力強く頷いた。レイチェルと共に現れた、このマスカレイドの刺客が何故自分達の味方をするのか分からないが、とりあえずトキはレイチェルを信用する事にした。

レイチェルとカイン、そしてトキは、大通りに面した、細い路地へと飛び込んだ。囲みを破られた刺客達は一斉に3人を追って路地に流れ込む。その浅はかな行動に、トキは溜息をついた。

「やれやれ・・・僕が居た頃と違い、今のマスカレイド部隊は能無しばかりですね・・・」

「ええ、お恥ずかしい話です」

トキの独り言に応えたのはカインだった。懐から手投げ弾を取り出すと、そっと足元に転が

した。転がった手投げ弾に驚き、路地に殺到した先頭集団がつんのめる。

そして爆発。アダマントのマントを着ていれば、あの程度の爆発はせいぜい爆風に吹き飛ばされ目を回す程度だろう。しかし、足止めには十分だった。刺客達が狭い路地で詰まっている間に、3人は旧市街の外れまで移動をしていた。

「ちょっとまって下さい！」

先頭を走っていたカインが足を止めた。

「ど、どうしたんですか？」

「この辺りには、監視兵が居た筈です。・・・作戦が終わるまで、この場から離れる事は無いのに・・・」

カインの胸に、嫌な予感が広がる。そして、トキにも。もし自分がこの場の指揮官なら・・・いや、ツヴァイだったらどうするかを考えた。

「走って！」

ここに居るのは危険です！！」

その叫びが終わるよりも早く、トキ達の両脇に立つ建物が、内側から爆発を起した。

一瞬にして視界が失われ、瓦礫の崩れる音が響く。そして地震のように、足元の大地が揺れた。

爆発の衝撃に視覚と聴覚を奪われ、爆風に押されて方向感覚も失い、トキの意識は闇に落ちた。



ガラんガラッガッシャン、と、

乱暴に開かれた扉とドアベルの音に、ノキアは驚いて店の入り口に目を向けた。

「おい、トキとレイチェルは来なかったか！？」

随分と慌てた様子でノキアの薬屋に現れたのは、エアニスとチャイムだった。二人が薬草を買いに店を訪れ立ち去ってから、それほど時は経っていない。

「い、いいえ、お二人が帰られてからは、誰も来ていませんけど・・・。何かあったんですか？」

心配そうに訪ねるノキアに、エアニスは、

「いや、まあ、・・・ちょっと二人の姿が・・・」

どこまで説明するべきか、と、エアニスが考えながら話し始めると、

ドゥン、ズズズン、と、遠くで低い音が響いた。細かく伝わる振動で、店の棚のガラスがビリビリと震えた。

顔を見合わせたエアニスとチャイムは慌てて店を飛び出す。店に面した大通りを行き交う人たちが、騒然とした様子で空に向かい指を指していた。そこには、遠くの空に舞い上がる黒煙があった。

「エアニス、あれって、やっば、あの二人が何かしてるのかな・・・」

チャイムの呟きに、エアニスは眉間にシワを寄せて目を閉じた。絶対、あいつらが何かしている。

「あれは・・・旧市街の方角です」

ノキアが店の戸口で、黒煙に汚された空を見上げて言った。

「旧市街？」

「大戦の時に戦場になって、街から切り離された区画です。今では、誰も立ち寄らないような場所ですが・・・」

おあつらえ向きの場所だと思った。チャイムの表情が心配そうに曇る。

「なあ、このバイク、あんたのか？」

突然エアニスは話を切り替え、店の脇に止まっていたサイドカー付きのバイクを指差して言った。

「あ、それは、兄さんのです。軍の払い下げの物で、薬の仕入れなどに・・・」

「頼む、ちょっと貸してくれ！！」

「お願い！！」

ノキアは慌てた様子でエアニスとレイチェルを交互に見て、コクコクと頷く。ポケットに入っていたキーの束から一つを外し、エアニスに手渡す。

「旧市街は治安も悪く、建物や地下道の崩落事故も多い場所です。お気をつけて・・・」

「すまん！」

バイクにキーを挿し、エアニスはミッションケースに付いたキックアームを一気に踏み下ろした。一発のキックでエンジンに火が入り、騒々しい排気音が通りに響く。

「チャイム、乗れ！」

「うん！っていうか、アンタバイクの運転出来るの！？」

「当然！車より上手い自信があるぜ！！」

チャイムが恐る恐るサイドカーに乗り込むと、エアニスは「サイドカー付きのバイクは初めてだがな」と呟いて、バイクを急発進させた。チャイムはその拍子にひっくりかえり、シートに逆さまに収まってしまう。

「必ず直して返す！！」

壊す事を前提としたエアニスの一言に、ノキアは気にしないでください、と大声で答えた。

逆さまになってスカートを抑えるチャイムを乗せたまま、エアニスの運転するバイクは旧市街へ向けて走り去った。

頬に伝わる冷たい感触で、トキは目を覚ました。

暗く、薄ぼんやりとした視界。意識や視覚に不具合がある訳ではない。実際に暗いのだ。トキの目の前には、僅かなオレンジ色の灯りを受けたレイチェルの顔があった。

「・・・トキさん？気が付きましたか？」

レイチェルが囁くように言う。トキはレイチェルの膝に頭を置き、塗れたハンカチで頬を拭われていた。

「うわ・・・何ですか、この状況は？」

男として喜ぶべき状況ではあるが、トキにはこんな事をして頂ける覚えは無く、覚えと言うより何より、トキには暫く前の記憶が無かった。トキは身を起そうとして、

「うっ・・・！」

右腕に走った痛み、思わず声を漏らす。

トキの右腕は血で真っ赤に染まった布が捲かれ、当て木がされていた。脇には止血用の為か布がぎつく巻かれている。肘の辺りは熱を持ち、焼けるような痛みが伝わるが、肘から先の感覚は無かった。

「あらら・・・こんな怪我した覚えはありませんよ？」

「・・・瓦礫に飲まれた時です。トキさん、私を庇って、崩れた岩の下敷きになって・・・」

トキは空を見上げる。しかしそこに空は無く、あるのは比較的高い、石造りの天井。僅かな灯りで確認できる範囲には、湿った煉瓦の壁と地面が続いていた。まるで洞窟の中だった。

「ここは旧市街の地下道です。大戦中、戦場になった街の下に、避難所や軍事作戦の為に作られたものだそうです。

あの時、私達の周りに仕掛けられた爆弾が爆発して、地面が抜けてここに落ちたんです。トキさんの怪我也、その時に・・・」

そこまで聞いて、ようやくトキにも状況が見えてきた。ツヴァイに逃げられた事、マスカレイドの刺客に追われた事、そして、両脇の建物の爆発に巻き込まれ、足元が崩れた事。トキの記憶はそこで途切れていたが、どうやらその時に右腕を潰してしまったらしい。

「レイチェルさんは、怪我はありませんか？」

彼女は僅かに血の滲む自分の頬を擦って、

「トキさんのお陰で、掠り傷程度です。それよりも・・・」

ぼろぼろになったトキの右腕に目を落とす。トキは指先を動かそうとして力を入れるが、すぐに諦めた。トキは自分の右腕を、使えないガラクタでも見るかのような目つきで蔑視する。

「・・・邪魔ですね。ツヴァイとやり合うには、いっそ落としてしまった方が楽ですか」

「駄目です！！」

チャイムが来たら、このくらいの怪我、すぐに治してくれます！！」

「冗談ですよ」

半分以上本気で言った事だったが、トキはそう言って笑った。

しかし、この邪魔な右腕がツヴァイとの戦いで命取りとなっはたまらない。とはいえ、トキもレイチェルの前で自分の腕にナイフを突き立てるほど、割り切った人間でもなかった。

そうだ。今の自分は、マスカレイドの暗殺者などではない。休学期間を使って旅をしている、ただの大学生である。

トキはコートの内ポケットに仕舞った眼鏡を取り出そうとした。しかし、眼鏡のフレームはぐしゃぐしゃに曲がり、レンズもバラバラに割れていた。もともと度が入っていない伊達眼鏡である。無くても問題無いどころか、視界を遮る邪魔者でしかない。

しかしトキにとっては、この眼鏡はお気に入りの"仮面"であった。白いデスマスクという"仮面"を脱いでから、その代わりとしてずっとトキの素顔を隠し続けてきた、トキの今の"仮面"。

それに、こんな殺伐とした状況下では、レイチェルの前で不意に昔の素顔を見せてしまいそうで、怖かった。この眼鏡は、トキにとって、役に入るための小道具のようなものだ。それは白いデスマスクも同じであり、こんなモノで自我が左右されてしまう自分が滑稽に感じた。

「そういえば・・・レイチェルさんと一緒にいたのは・・・」

「ここに居ますよ」

少し離れた通路の向こうから、見覚えのある顔が覗いた。その男は、マスカレイド部隊の赤黒いマントを羽織り、大きなライフル銃を持って、曲がり角の向こうで立っていた。

トキはその顔を見て、その男がノキアの兄である事、そして、この男が自分やレイチェルの手助けに回ったおおよその理由を悟った。

「ああ・・・何処かで聞いた声だとは思っていたんですよ。・・・納得しました。

こんな事をしたのは、妹さんの為ですか？」

カインはトキに背を向けて、地下道の見張りをしながら答える。地下道には、トキ達の話し声と、何処かで水が流れている音しか聞こえてこない。反響する水音のお陰で、話し声が遠くへ聞こえてしまう事も無いだろう。

「ノキアがああなってしまったのは、あの山で組織が薬の栽培や誘拐をしている事を知っていたのに、何もしなかった僕の責任でもあります。

ノキアを助けると言ってくれたあなた方が、ルゴワールに手配されている人間だと知って焦りましたよ。ノキアの為に、あなた方を組織に渡す訳にはいきませんから。

・・・こうなっては、もう組織にも、街にも居られませんね」

カインは顎を撫ぜる。その表情は苦笑いと呼べなくもなかったが、それは何処か強張り、青ざめていた。ルゴワールを裏切り、組織を抜けるという事が、どれだけ大変な事かを知っているからだ。

「あなたは、ルゴワールの構成員・・・しかも、マスカレイド部隊の人間だったんですね」

「ルゴワール北バイアルス支部・マスカレイド05師団所属。カイン=ウェイカーです。

妹は私が組織の人間だという事は知りませんし、組織とは全く無関係です。

私は大戦中、兵役で戦場に居た頃に組織に関わって・・・お金の為に、終戦した今もそのまま組織に残ったクチです」

「・・・レイチェルさんを助けたのも、僕にあの狙撃を気付かせてくれたのも、あなですね。事情はどうあれ、礼を言わせてもらいますよ」

「いいえ。ノキアがお世話になっていますからね。

・・・さて、そろそろ移動をしましょう。私たちを探している兵達も、そろそろこの通路に気付く筈です」

レイチェルは手のひらに小さな魔導の灯りを灯し、前に行くトキとカインの足元を照らしていた。レイチェルがツヴァイに打たれた、魔導を使おうとすると体に痛みの走る薬は、カインの持っていた解毒剤で効力を失っていた。

何故こんなものを持っているのかとカインに訪ねると、私の本職は薬師ですよ？ と言って丸められたツールバックの中に納まった、多種多様の薬品と道具を見せてくれた。

3人は、カインを先頭に暗い地下道を進む。時折、遠くで人の声や足音が聞こえた。マスカレイドの兵達が地下道に降りて、3人を探しているようだが、結局一度も鉢合わせをする事は無かった。

不意にカインは歩みを止めると、ライフルのグリップで崩れかけた壁の煉瓦を崩し始める。トキとレイチェルが顔を見合わせ、何をしているのかと訪ねようとしたら、崩れた壁の向こうに鉄の扉が現れた。

「大戦中に使われていた通信室です。

鍵が掛かっていますね・・・。流石に銃を使う訳にもいきませんし・・・。音を立てずに、この鎖を斬る事は出来ますか？」

トキは利き腕とは逆の腕でナイフを握った。刃を鎖と鉄の扉に押し当て、その刃を素早く引き抜く。

ギュガ、という小さな耳障りな音と共に鎖は千切れ、湿った煉瓦の床に落ちた。カインは見事な切り口を見せる鎖を拾い上げ、

「こんな小さなナイフで鉄が斬れるものなんですね・・・。あなたの現役時代を見てみたかった気がします」

「・・・やめてください。もう、思い出したくもない事です」

トキは鉄扉を押して、暗い室内に入った。

隠し部屋となっていた空間には、機械式の通信機が部屋を囲む壁の半分を埋め尽くしていた。カインは、街の電話回線に繋がらないかと機器を操作してみたが、それは徒労に終わった。そもそも、電気が来ていない。この通信機が機械式でなく魔導式であったら、レイチェルの魔導で何とかになっていたであろう。

「まあ、期待はしていませんでしたがね」

「ここへ来たのは、この機械を調べる為ですか？」

期待していないと言いつつも、あからさまに落胆しているカインに、トキが訪ねた。

「いいえ。ここで、日が落ちるまで待ってしようと思います。この部屋は見つけられる事はまず

無いでしょうし、万一見つかったとしても、この部屋から出る為の通路や通風孔は幾つもあります」

話しながらカインは部屋に散乱するケースや棚を漁る。

「それに・・・ここなら水も食料もありますからね」

そう言って、埃まみれの保存食と水のボトルを取り出した。

「大戦が終結し、この通信室が破棄されたのは、2年程前です。このテの保存食は5年くらい持つ筈ですから、食べれない事は無いでしょう」

多分、と小さく付け加え、カインは銀紙に包まれていた保存食をかじる。微妙な表情を浮かべた後、やはり微妙な表情で笑って見せた。食べられない事は無いらしい。トキとレイチェルも、まともに食事を取っていなかったのも、ケースに仕舞われていた保存食を食べる事にする。保存食は、量だけは無駄に沢山あったが、味は全て同じだった。

カインはサビだらけの折り畳み椅子に座り、トキとレイチェルは埃を被った木箱に並んで腰を掛け、保存食と水を交互に口にする。黙々と味気ない塊を口に運ぶという、食事とも呼べないような"作業"に飽きたレイチェルが、カインに訊ねた。

「カインさんは、何でこの地下道の事、こんなに詳しいんですか？」

それはトキも聞いておきたい事だった。

「大戦中、私もこの地下道に潜って、戦っていたんですよ。この街を守る為に戦った人間は、誰でも知っています。

・・・この街が最後まで帝国の手に落ちなかったのは、この上の旧市街と、この地下道のお陰ですね」

この街の兵士達は、街の外ではなく、生活の場であった街の中で帝国ベクタの侵攻を迎え撃ち、"自分達の街"という地の利を最大限に利用し、勝利を収めたのだった。そして、カインも、街を帝国の侵攻から守る兵士の一人だった。

「なるほど、どおりで」

「因みに、今回派遣されてきたマスカレイドの兵達は皆余所者です。ツヴァイ隊長のクロス部隊と、東支部で動ける"マスク"達が、合わせて20人ほど駆りだされています」

カインの口にした男の名前に、レイチェルの体が震えた。

「・・・トキさん。お願いがあります」

レイチェルの、重く硬い声色に、トキは顔を上げる。

「ツヴァイと呼ばれているあの男は、私に倒させて下さい」

レイチェルは、鋭い視線で自分の足元を睨みながら言った。その様子と発言に、トキは驚くよりも、戸惑っていた。

「なぜ・・・ですか？」

ツヴァイと、何かあったんですか？」

レイチェルは、両手で掴んだ保存食料を握り潰し、顔を俯け震える声で叫ぶように言った。

「あの男は・・・っ、私の村を、襲った奴です！」



わたしの前で、お父さんを殺した奴ですッ！」

旅立ちの前、レイチェルの村が軍隊の襲撃を受けたという話を聞いた時、白いマスクに赤黒い戦闘服を着た集団と聞いて、すぐにルゴワールのマスカレイド部隊だという事は推測出来た。

しかしその部隊が、ツヴァイの指揮するものだったとは、トキは思いもしなかった。

いや、心の何処かで、ゼロではないその可能性も考えてはいた。しかし、襲撃者達の事を詳しく聞くのはレイチェルを傷つける事になるうえ、そのような事を知りたがるトキに対し、不信感を抱かせるだろう。それらの理由から、トキはその可能性を握り潰したのだ。

トキは言葉を無くし、全てを理解し、自分の額を手のひらで覆った。

「・・・知らなかったのですか？」

ツヴァイ隊長のクロス部隊は、3ヶ月ほど前に、エルカカという魔導士の隠れ里へ、かなりの人数と装備で派遣されています。

任務は村にある魔導鉱石の奪取と、住人を含め村を消し去る事・・・」

カインは知っている範囲での情報を伝える。

「あの男だけは、絶対に許せないんです・・・。

お父さんの、村のみんなの、仇だから・・・！」

レイチェルは怒りと悲しみの表情を浮かべ、声を震わせて言った。その様子を見て、真っ白になっていたトキの頭が、少しずつ動き始める。ああ、と、トキは声を漏らした。

「そういう事だったんですか。そういう、事だったんですか・・・」

天井を仰ぎ、うわ言のように呟く。

出来る事なら、最後までレイチェルに自分の素性を明かす事はしたくなかった。

嫌われるから。

恐れられるから。

こんな事になるのなら、ミルフリストでレイチェルの事情を聞いた時に、自分の全てを話しておくべきだった。

全てを打ち明けるには最悪のタイミングとなってしまったが、トキはこれ以上、自分の事をレイチェルに黙っている訳にはいかなかった。



トキは眼鏡が無いのに眼鏡のブリッジを押し上げる仕草をして、短い溜息を吐いてから普段の様子を取り戻す。

「・・・レイチェルさんには申し訳ありませんが、それは無理です」

レイチェルはトキの目を見ていた。それは、どのような理由であれ、これは譲れないという厳とした意思。

「こればかりは、誰にも譲るわけにはいきません。たとえ恩人のトキさんにも、エアニスさんにもです。

わたしの手で、やらなくてははいけないんです。

それとも、仇討ちなんて馬鹿けているとでも言いますか？

そんな事をして、お父さん達は喜ばないとでも言いますか！？」

張り詰めた空気を纏い、レイチェルがトキに詰め寄った。普段の彼女からは想像できない剣幕にトキは驚くが、彼は表情を崩さず、レイチェルの目を見据えた。

「・・・私だって、馬鹿けているし、間違っているという事は分かります。

でも、そうでもしないと、私の中の感情が、収まらないんです！！！」

これほどまでに、レイチェルが己を主張するのは初めてではないだろうか。そして、普段は優しく、敵と戦う時でも相手の身を案じるようなレイチェルにも、このような感情があるという事

にトキは驚いた。

トキはレイチェルの視線を受け止めながら、答えた。

「勘違いしないで下さい。僕はそんな、チャイムさんみたいな立派な事は言いませんよ。

僕がレイチェルさんを止めるのは、もっと利己的な理由です」

凜としたレイチェルの視線が、一瞬揺らいた。

トキの顔には、レイチェルが見た事の無い表情が浮んでいた。もちろん、眼鏡を外し、普段と印象が違う等というものではない。例えるならば、あの白いデスマスク達。トキの顔には、あの真っ白で、無表情の仮面が張り付いているように見えた。

「僕も唯一の家族を、ツヴァイに奪われました。

だから奴は、僕がこの手で殺します」

今度はレイチェルが驚き、呆然とする番だった。

トキは自分の頬を叩き、顔に張り付いていた"仮面"を叩き落とす。自嘲めいた笑みを見せてから、コートポケットに入っていた時計を取り出し、

「・・・まだ日没まで時間がありますね。

少し、お話をさせて貰っていいですか。

くだらない、昔話です・・・」

そう前置きし、トキは全てを話し始めた。

それは

人に造られた

二人の兄妹の昔話

「双子？」

「はい、このようなケースは今までに無く・・・生まれる直前まで気付かなかったそうです」

「アルバ値は期待通りのものが出ているのか？」

「女兒の方は想定値の112%ですが、男児の方は、86%に留まっています。それでも、常人に比べたら桁外れの数値です」

聞こえてくるのは、二人の男の声、それと、ラジオか蓄音機か、何処からか流れてくる静かな音楽。目は、まだ見えない。暗闇の中、聴覚だけが脳に情報を刻み込んでゆく。

「・・・"ガーデン"には女兒を入れる。両方のサンプルを育てる予算は、我々のチームには無いからな」

「男児の方はどうします？」

「兵器局に売りつけてやれ。レベルSの知能操作に、レベルBの身体強化も組み込んであるんだ。喜んで金を出すだろう」

「兵器局にですか？しかし、あそこは・・・」

「ならば、処分するか？お前が責任を持って育てるといふのなら許可するぞ？」

「いや、・・・はい・・・わかりました・・・」

この時、双子はまだ言葉というものを知らない。

双子がこの会話の意味を理解するのは約2年後、僅か2歳で一通りの言葉を覚え、自分が覚えている一番古い記憶を辿った時の事であった。



世界大戦前期。

ルゴワールと呼ばれた犯罪組織は、帝国ベクタを発祥の地とし、兵器と麻薬の売買によって急成長を遂げた。

次々と開発され、破壊力を増してゆく銃火器の他に、彼らが注目していた兵器は、"人間"であった。

優れた頭脳や身体能力を持った人間の遺伝子を組み合わせ、人工的に人間を造り出す。動植物の配合すらタブーとされていたこの世界で、ルゴワールは最大の禁忌を犯し、それを成功させていたのだ。



あちこちで煙がくすぶる古城の前、迷彩柄のマントを羽織った男が、魔導式の通信機を通して言った。

「敵の砦は完全に制圧。こちらの負傷者は無しです」

『・・・早かったな』

「しかし・・・信じられません。

まだ、年端もいかない子供ばかりの・・・たったの10人の少年兵が、敵の主要拠点を落としてしまうなんて・・・」

少年兵達は、小さな防弾服に身を包み、ベクタの兵士としては一般的なマシンガンとナイフだけを持って砦に忍び込んだ。彼らは全員がお互いの位置や状態を把握でもしているかのような完璧な連携を持っており、それが彼らの最大の武器であった。侵入した直後は、静かに侵食する様に。侵入が見つかったからは烈火の如く、敵の兵士達を倒してゆく。情報では60人が駐留している砦は、少年達は僅か30分で制圧した。それを見ていた監視兵は、まるで一つの意思に砦が飲み込まれたかのように見えた。

「彼らは・・・何者なんですか？」

『・・・あれは、存在しない人間だ。この作戦も、君達の部隊の成果だ。おめでとう』

「は？ そ、それは・・・！」

通信はそこで切られた。

"U-66"と呼ばれていた少年も、造られた人間の一人だった。

彼が知っているのは、多人数による効率の良い人間の殺し方。ただ、それのみ。余計な事は一切教えられる事は無く、その為だけの道具としてU-66は存在していた。

古城での任務が終わり、ルゴワールの施設へと運ばれ、戻る場所は鍵の掛かった四角い部屋。壁を白く塗られた部屋にある物は、白いシーツの掛けられたベッドと、質素な机と椅子のみ。机の上や棚には何も無かった。

任務の無い間、U-66は鍵の掛けられたこの部屋で一人で過ごしていた。生きるのに必要最低限の環境はあったものの、それは人間として生きているとは到底言えるものではなかった。しかし、U-66は自由や幸せという言葉の意味すらも知らないのだ。それが普通なのだから、それが苦痛と認識される事も無かった。



そんな彼らの生活は、突然終わった。

カシュン、と部屋の電子錠が鳴り、扉が開く。

任務だ。U-66は座っていたベッドから立ち上がり、外に出る。廊下にはU-66と同じ境遇の仲間達も居た。ほぼ全員が揃っている所を見ると、久しぶりの大規模作戦のようだ。

しかし、廊下で彼らを待っていたのは、いつもとは違う人間だった。

全てのUナンバーズ達が部屋から出て来たのを確認して、彼女は話し始めた。

「・・・私は中央研究所の、アリシア=スティンブルグです。今日から皆さんは私のチームの管理下に置かれます」

Uナンバーの少年達は、無表情の中にも何処か戸惑いの色を滲ませながら、その少女を見ていた。

そう、それは少女だった。Uナンバーズの少年達と同じ年頃の14、5歳の少女で、眼鏡と白衣を身に付け、いかにも研究者といった装いをしていた。

U-66は、その少女の姿を呆然と見つめる。

「まずは、前任のカーティス所長による、皆さんへの非人道的な扱いを、新たな責任者として謝罪させてください」

U-66の耳に、その少女の声は届かない。

「皆さんは、これまで一般的な社会から隔絶された環境で、人間としてではなく、兵器として育てられました。これからは任務は通常通りこなして頂きますが、これからは普通の人間として、街で暮らして頂きます」

少女はゆるいウエーブのかかった黒髪を頭の後ろでまとめていた。眼鏡の奥の大きな瞳には、金色の光が宿っている。

「これから暫く、街で暮らすための訓練・・・というか、普通の礼儀やマナー・・・ええっと、お金の使い方とかも・・・知らないんですよね？」

少女の後ろに控える初老の研究員が、少女の疑問に頷いた。

「・・・を、覚えて貰います。最初は戸惑う事もあるかもしれませんが・・・でも、」

少女は、U-66と良く似た顔の少女は、一度言葉を切ってから声を高らかにして言った。

「わたしは、皆さんには兵器としてではなく、人間として強くなって貰いたいのです！

まず、ここの扉を出で下さい。戦場以外の世界を知ってください！

外の世界で人として生きて、人としての幸せを見つけて貰いたいのです！！」



数日後。

U-66は、首都ベクタの郊外にあるアパートへ住む事になった。他のUナンバーズ達も、同じアパートや近くの建物に部屋をあてがわれた。もちろん、その建物はすべてルゴワールの息のかかったものである。

彼はこの数日間で、自分達がどれほどの自由を奪われていたのかを理解した。彼等にとって、外の世界は任務をこなす為の戦場でしかなかった。そんな世界に憧れる事など無かったが、外の世界はU-66が思っていた以上に広大だった。

8階の部屋の窓を開け、外の景色を眺める。この世界で最も機械技術の進んだベクタの街は、無数のビルが立ち並び、空にはビル同士を繋ぐ電線や水道管、魔導回線が、絡まりあう蔦のように張り巡らされていた。更にその向こうでは、工場から排出された煙が空を覆い、白く霞んだ空に太陽の光が鈍く滲んでいる。

突然広がった目の前の世界。

今まで自分の世界の全てだった、白くて四角い部屋に比べ、その世界はあまりににも広大で、

あまりにも自由で、彼には手に負えなかった。U-66は、新たに与えられたこの環境を、どうすればいいのか分からなかった。

コンコン、とドアが鳴った。U-66は慌てて振り返る。

そこに立っていたのは、新たにUナンバーズ達の管理責任者となった、あの黒髪の少女だった。その後には、スーツ姿の初老の男も居る。いつも少女に付き従っている白衣の研究者だ。

「どう？」

この部屋は、気に入ってもらえたかな？」

「・・・」

明るいい口調で訪ねるも、U-66は視線を落とし黙ってしまった。黒髪の少女、アリシアは、笑顔を残念そうに曇らせる。

「・・・少しお話してもいいかしら」

「・・・」

U-66は、アリシアの顔を見て、こくり、と頷く。

「ありがとう、座らせて貰うわね」

「・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・あー、えっと、ほら、あなたも座って！」

椅子に座ったアリシアは、いつまでも立ったままのU-66に、席を促した。

「わたしはね、ずっとあなたの事を探していたの」

アリシアは、U-66の顔を正面から見つめた。

「・・・私が誰か、分かる？」

U-66はアリシアの手元を見たまま、答えない。

「そう、よね・・・あなたは、何も教えられていないものね・・・」

その、あのね、私は・・・」

アリシアはどうやって話したのかと悩み、眠る時間を削って考えてきた説明を始めようとしたら、

「き・・・い、か」

「え？」

U-66が掠れた声で呟いた。声を出す事など滅多に無いので、思い通りに声が出なかったのだ。少しだけ咳をして、U-66は言い直した。

「兄妹、か？」

U-66の言った一言に、アリシアは驚き口元を覆う。後に控えた初老の男も、驚きの表情を浮かべていた。

「・・・自分を尋ねてくる人間の心当たりなんて、そのくらいしか無いから・・・」

双子、なんだろ？」

頭の中を弄られたお陰かな。生まれた時の事から、覚えてるんだ」

U-66の最も古い記憶は、生まれた時に自分の周りで交わされた男の会話だった。生まれたばかりで目が見えていなかったせいか、残っている記憶は男達の会話のみだが、一字一句違えずに覚えていた。生命の種子である頃から知能操作を施されているU-66は、覚えておこうと思った事柄は、まるで写真やボイスレコーダーのように、正確に記憶する事が出来た。

もちろん、その会話を聞いた時は言葉など知らない赤子だったのだが、U-66が一通りの言葉を覚えた2歳の頃、自分が生まれた時に交わされていた会話を思い出し、理解した。

自分には、双子の兄妹が居るという事を。

「君は、本当に、僕の兄妹なのか？」

U-66の問いに、アリシアは小声で、歌を歌い始めた。そのメロディーを聞き、U-66の顔に初めて表情の変化があった。

「あなたも覚えてるのね、わたし達が生まれた時に、研究室で流れていた歌・・・」

「・・・覚えてる」

U-66も、アリシアと同じように、そのメロディーをなぞりはじめた。お互いを確かめ合うように、名も知らぬ歌を静かに歌う。

不意にアリシアはU-66の手を取り、声を震わせて泣き出した。

「ずっと、ずっと探してたのよ。誰も、そうだとは言ってくれなかったけど、私には兄妹が居るって、ずっと信じてた！

たった一人の、血の繋がった家族が、何処かに、何処かに居るって信じてた！」

「・・・家族・・・」

「・・・そう、家族よ。もう、わたしたちは一人じゃないの！」

「・・・もう、一人じゃ、ない・・・」

確認するように、U-66は言葉を繰り返し、アリシアの手を握り返した。





◆

アリシアはルゴワールによって運営されていた、人間の頭脳を研究する"ガーデン"と呼ばれる施設で育った。彼女は恵まれた環境で育てられ、研究者達も驚くスピードで知識を吸収してゆき、12歳にして研究チームの班長を任されるようになっていた。頭の良さだけでなく、アリシアの性格は誰からも好かれ、大人の研究者達からは同僚でありながら子供のように可愛がられていた。

しかし、どこまで行っても自分自身ルゴワールの研究対象でしかない事。そして、実の親も誰だか分からない、人の手によって造られた命だという事が、アリシアを孤独にさせた。

孤独な心に唯一残された希望が、たった一人の兄妹の存在。普通の人間では持ち得ない、"生まれた時の記憶"という曖昧なものを頼りに、アリシアは唯一の家族を探し続けた。ルゴワールに与えられた頭脳を使い、アリシアは幾つもの功績を残し、大人に自分を認めさせる事によって、少しずつルゴワールの事を知る権利を得ていった。

そして、自分と一緒に生まれた兄妹は、まだルゴワールの組織内で生物兵器の研究サンプルとして生きている事を知った。アリシアは人体実験に反対する研究者達の協力と、自分の持つ全ての権限を行使し、兵器局が進めていた肉体と精神の完全管理による人間の生物兵器化実験を弾劾、それを解体に追い込んだ。

こうしてアリシアは、ようやく唯一の家族を救い出したのだった。

◆

生物兵器としての存在から開放されたUナンバーズ達は、新たな強さを求められた。

自由を得たとは言え、彼らの任務の内容には変わり無く、ルゴワールに仇なす敵対組織への強襲や、要人の暗殺等といった仕事をこなしていた。時には"理不尽"と思える仕事もあったが、全ては組織の仲間を守るための戦い。Uナンバーズ達は生物兵器として扱われていた時と同じように、戦い続けた。

しかし、Uナンバーズ達の何人かは、時折感じる"理不尽"が徐々に大きくなり、心に迷いが生まれるようになった。彼らの中には、それが原因で戦いの中命を落としたり、中には組織の制裁を受け殺されてしまった者も居た。

それは、"人の心"さえ持っていなければ、生物兵器として在り続けてさえいれば、起こりえない事だったのかも知れない。

アリシアが引き継いだ時には30人近く居たUナンバーズは、数年後にはたったの8人にまで減っていた。アリシアは、こうなってしまったのは自分が彼らに無理矢理人間としての生活や、心を押し付けてしまったからだだと自責の念に押し潰されそうになっていた。。

しかし、命を落としたUナンバーズ達は全員、アリシアに感謝の言葉を残して死んでいったのだ。

自分達を救い出してくれてありがとう、人間としての生活を与えてくれて、ありがとう、と。

彼女はこれ以上大切な仲間を失いたくないという思いから、アダマタイトという魔導鉱石を使った特殊な防弾服を作った。アダマタイトに魔導式を恒久的に記録する技術を作り出し、それに慣性干渉の魔導式を打ち込む。これにより、防弾服に触れた銃弾の慣性を殆どキャンセルする事ができ、防弾服を着ている者の身には、素手で叩かれた程度の衝撃しか伝わらないという、これまでに無い新たな身の守り方を作り出した。元々アダマタイトには魔力を遮断する性質もあったため、魔導で作られた炎や衝撃にも耐性があり、相手が魔導士でも戦えるようになった。

アリシアは、その技術を施したコートと顔を守るマスクを作り、Uナンバーズ達に与えた。

もちろん慣性をキャンセルできる限界もあり、無敵の防弾服という訳ではなかったが、その装備を支給されてからのUナンバーズ達は、たった8人という人数にも関わらず一気に組織の戦闘部隊のトップへと躍り出た。

全身を覆った赤黒い生地 of 戦闘服に、白いマスクという姿から、かつてUナンバーズと呼ばれていた少年達は、いつしか仮面舞踏会、"マスカレイド"と呼ばれるようになった。



更に月日は流れ、20年以上続いた世界大戦は突然の終結を迎えた。

世界が戦禍から脱したとはいえ、"マスカレイド"達には相変わらず頻繁に任務が舞い込んで来た。彼らにとって戦争の集結など関係の無い事だった。

「よう、トラキア。昼飯か？」

「もう済ませたよ、ワッツ。今はアリシアを待ってる」

アパートの一階に入っている食堂で、かつてU-102と呼ばれていた少年が、かつてU-66と呼ばれていた少年に、笑いながら話しかけた。

彼らはアリシアの下についてから、すぐに名前を与えられた。U-66の"トラキア"という名前は、元々彼の為に用意されていた名前だった。男だったらトラキア、女だったらアリシアと、彼らが生まれる前から決められていたのだという。

青年と呼べる風貌にまで成長したトラキアは、ベージュのジャケットにシワ一つ無いシャツを着て、ゆるい癖のついた黒髪を肩まで伸ばしていた。対してワッツと呼ばれたトラキアと同じ年頃の男は、短い赤毛で黒いスーツと白いシャツ、ネクタイまで締めており、マフィアさながらの服装だ。しかしその装いとは裏腹に、誰にでも馴れ馴れしく話しかけて楽しげに笑うような、気さくな男だった。

「姫を？ そうか、久し振りの兄妹水入らずを邪魔しちゃ悪いかな」

「気にしなくていい。それに久し振りじゃない。昨日も会ったし、おとついても会った」

カー、と、ワッツは喉を鳴らして呆れた。

「なーんか、お前ら兄妹を見てると恥ずかしくなってくるぜ・・・」

その時、店のドアに付いていたドアベルが鳴った。

「ごめんなさい、遅れて。あら、ワッツも来てたの？」

「どもー。ご機嫌うるわしゅー、姫様」

「ふふ、ありがと」

ワッツは気の抜けた挨拶とともに、舞踏会で女性に挨拶をするよう深々とこうべを垂れる。彼にとってアリシアは上官にあたるのだが、マスカレイドのメンバーとアリシアの間にはそういった意識は無く、皆同じ年頃の友達、あるいは家族と話すような感覚であった。その中でも、とりわけワッツの態度は砕けていたが。

「休暇にこんな所で話って・・・何かあったのか？」

トラキアは椅子にもたれ、やや心配そうにアリシアを見上げた。

「おっと、マジで俺は退散させてもらった方がいいかな？」

ワッツはカウンターから飛び降り、クルリと回ってから店の外に出ようとする。

「ううん、丁度いいわ。ワッツにも聞いてもらいたい話なの。仕事の、話よ」

マスカレイドにとっての仕事、それはもちろん、殺しの依頼である。

「まーたー？。戦争が終わったってのに、むしろ最近出番が増えてないか？」

喧嘩仕掛けてきたベルゼフへの報復も終わってないでしょー？」

不満そうなワッツの言葉にトラキアは肩を竦める。

「戦争が終わったから、だろ。終戦でお得意さんを失った組織が、生き残りをかけて無茶をするようになってんだ。組織間の抗争も日に日に激しくなっているしな。文句言うな」

トラキアが冷めた言葉を浴びせる。ブーブーとワッツは唇を鳴らした。

「でも、今回の標的は、組織の人間じゃないの。見て」

アリシアはテーブルに司令部から渡された標的の資料を広げた。店には自分達と馴染みの店主以外誰も居なかったもので、人目を気にする事は無い。無論、店主もルゴワールの構成員だ。

「こいつは・・・」

「わーお・・・大物じゃん♪」

資料には、標的の姿がぼやけて写った曖昧な写真や、曖昧な身体的特徴や、曖昧な経歴が記されていた。これらの資料にどれほどの信憑性があるかは分からないが、明確なのはターゲットの名前。

裏の世界に住む人間なら誰もが知っている、有名な男だった。

「これが、今回のターゲット？」

色々と迷惑な奴みたいだけど・・・なんでまたウチがこんな奴の相手を？」

「何で司令部が彼を狙うのかは分からないわ。でも、ルゴワールにも彼のせいで失敗した作戦や取引は、幾つもあるという話よ」

ふうん、とワッツは声を漏らす。気の抜けた口調は相変わらずだが、瞳には既に鋭い光が宿っていた。

「その大物が、もうじきこの辺りの町に姿を現す、と」

「確かな情報みたい。一度消息を断つとなかなか見つけれない人物だから、このチャンスを逃さずルゴワールの手で倒しておきたいのね」

「たしかに・・・俺達がこいつを倒せば、"マスカレイド"の名は一層広まるな」

ワッツがにやり、と微笑む。

「そんな事はいいの。私が聞きたいのは、みんなに、この相手を倒す自信があるかどうか、という事よ。」

今まで、これほど有名な相手と戦った事なんて、無いでしょ？

だから、心配になって・・・」

アリシアはそう言って目を伏せる。とても人の上に立つ者の言葉とは思えなかった。それよりも、人の命を奪う話をしながら、人の命を心配しているという事が、彼女の思考の異常さを示していた。しかし、人を殺める事については、彼女の住む世界ではごく普通の事である。異常なのはアリシアではなく、彼女の置かれた環境だった。しかし、彼女がトラキアやワッツを心配する優しさは、彼女自身が持つ本当の感情である。

「どれだけ強いと言っても、相手はたった一人の人間だ。どんな手段でも構わないなら、どうにでも出来るよ」

「・・・本当に大丈夫？ 私の権限で、この指令は拒否する事も出来るわ」

「大一丈夫だよ姫。たった一人の人間に、俺達マスカレイドがやられるワケないって」

「ああ、やるよ。相手が一人だからって、油断するつもりも無いしな」

「あ。お前今俺に毒吐いた？」

アリシアは短く息を吐いて、椅子の背に身を預けた。

「・・・わかったわ。今回の作戦には、トラキア、ワッツ、ロキ、アイザック、アイン、ガッシュ、ジェイガンの7人で当たって貰うわ。素性も良く分からない相手だから、こちらも全力で事に当たります」

トラキアは、8人のマスカレイドの中で中で唯一名前を呼ばれなかった仲間の事が気になった。

「ツヴァイは来ないのか？」

「彼は来月までカーティス班長の所にレンタル中なの。多分、どんな理由があってもそれまでは彼を返してくれないでしょうね。・・・わたしの事を嫌ってるみたいだし」

カーティスとは、アリシアの前にUナンバーズ達の管理をしていた兵器局の所長だった男だ。アリシアは、トラキア達を救い出すために、カーティスの非人道的な実験を糾弾し、彼の研究成果を奪ったのだ。

その禍根は、今も残っていた。



「アリシアの部隊は、例の仕事を引き受けたそうだ」

カーティスは、自分の研究室に戻り、そこで待っていた金髪の男にそう告げた。

「第一関門突破、ですね。まあ、大丈夫だとは思っていましたが・・・。

あとは、このターゲットが上手く使えれば文句は無いのですが」  
金髪の男、ツヴァイは、ターゲットの男の資料を叩いて言った。

「・・・上手く行くと思うか？」

「行きますよ。チャンスじゃないですか。

アリシアと、マスカレイド部隊をまとめて処分するには、絶好の、ね」

ツヴァイは座っていたソファから立ち上がり、カーティスと向き合った。

「・・・マスカレイド部隊の一人として、俺はあなたの意見に賛成です。

ここは犯罪組織だ。家族ごっこをする場所じゃない。現に、あなたからあの女に管理者権限が移ってから、何人もの仲間を失いました。すべて、あの女が組織に持ち込んだ"家族ごっこ"のお陰だ」

ツヴァイの瞳は暗く濁る。

「俺達は兵器だ。兵器に心なんて必要ない。

人の心なんてものを押し付けられなければ、こんな事にはならなかったッ・・・！」

それなのに、死んでいった仲間達は、皆アリシアに感謝の言葉を残していった。ツヴァイにはそれが理解出来なかった。アリシアの下につき、自由と人の心を得てからは、ツヴァイにとって辛い事ばかりだった。カーティスの下で、何も考える事無く、兵器として戦っていた時の方が、ずっと良かった。

戦果は高いとは言え、組織の統制を乱すアリシアの方針に否定的な意見を持つ者は少なくなかった。その中の一人、過去にUナンバーズを奪われ、最もアリシアに恨みを抱いているであろうカーティスに、ツヴァイは話を持ちかけた。

復讐するつもりはないか、と。

「アリシアの研究をあなたが引き継ぎ、マスカレイド部隊を再編成する・・・あなたなら、もっと強い部隊を作り上げる事ができると思いますよ」

ツヴァイの言葉にカーティスの目の色が変わった。やや弱気に見えた表情も一変、少女への憎悪を隠そうともしない。

「当然だ。あの小娘の兵より、私の兵器達の方が優れている事を、今回の件ではっきりさせてみせよう。"コピー"達の準備は出来ている」

「期待してますよ。微力ながら、俺も協力させていただきます」

そう言い残して、ツヴァイはカーティスの研究室を後にした。アリシアから授けられた赤いコートで綻ぶ口元を覆う。

「ククッ、・・・さてと。

まずは例のターゲットが、どれだけ暴れてくれるかだな」



トラキア達は監視係からの情報をを頼りに、ターゲットが野営をしているという森へ辿り着

いた。近くに人の住む場所はなく、旅人が稀に通る小さな街道沿いから少し離れた森の奥だ。

今回の任務にはアリシアも同行する事となった。マスカレイドがぼぼフルメンバーで任務にあたる事は少なく、彼女にとって今回は貴重な実戦データの収集も兼ねていた。マスカレイドのメンバー達には、体の状態や現在地置を記録する魔導式の端末を持たされており、彼女は車から彼らの動きを把握し、必要であれば指示を飛ばせるように控えていた。

そして彼らはターゲットを発見し、気配を悟られぬようその場を取り囲んだ。

彼らは木々の上で待機し、少し離れた眼下のターゲットを見据える。ターゲットは月明かりも届かない暗い森の中で、焚き火の前で座っていた。暫く動かない所を見ると、眠っているのかもしれない。

アリシアは車の中で、7人のメンバーが作戦開始の予定位置に着いた事を確認すると、彼ら全員の魔導式通信機に指示を送った。

「・・・いいわよ。始めて」

バン、とターゲットの前の焚き火がはぜた。

飛び散った炎はすぐに散り散りになって消え、辺りは暗闇に包まれる。間髪いれず木の上からメンバーの4人が、マシンガンで焚き火の周りに向け一斉射撃を始めた。更に一呼吸置いて、トラキアを初めとする3人が、ナイフを構えターゲットの頭上に飛び掛かる。

「!!!」

しかし、そこにターゲットの姿は無かった。

一斉射撃によって泡立つように抉れた地面の周りに人影は無く、向こう側に自分と同じ格好をした仲間が二人、やはりトラキアと同じように戸惑い立ち尽くしていた。

消えた。そうとしか言いようが無い状況に、トラキアは周りを警戒する。

ベキベキ、と、突然樹木が裂ける音が響いた。トラキアが振り返ると、背後から背の高い杉の木がゆっくりと自分に向かい倒れてくる所だった。しかもそれには、木の上からマシンガンで一斉射撃を行っていた仲間が一人、しがみ付いている。

「なっ・・・うわっ！」

倒れてきた木よりも、それに仲間の姿がくっついていた事に驚き、トラキアは僅かに判断を鈍らせ、間一髪で倒木の直撃をかわす。木と共に地面に叩きつけられた仲間は、体を押さえながらも何とか身を起していた。

「何日も前からずーっと誰かに見られてる気はしてたけど・・・あんたたちか？」

少しだけ低い男の声が森に響く。

メンバーの誰の物でもない、ターゲットの声だ。

ガサガサと草の音を立て、彼は堂々とマスカレイド達の前に姿を見せた。

雲の隙間から月明かりが漏れた。

月明かりに照らされたその男は、ゆったりした青いローブを身に纏い、鈍く光る銀の髪を腰まで伸ばしていた。赤い薄刃の剣を肩に掛け、自分を取り囲む異形の姿を気だるそうに見回す。

「木の上の奴も含めて7人、か。誰だか知らねーが・・・やる気なら相手してやるぞ」

左手に剣を持ち、右手を腰に吊るした散弾銃に手を掛ける。

その物腰は、戦い慣れした者の態度だった。戦いに慣れ過ぎて、命を軽んじている者のそれだ

。

戦場に突然現れ、たった一人で数百、数千という人間を斬り倒して行く。そのような眉唾ものの噂にまわりつかれながらも、事実として史上類を見ない高額な賞金を掛けられた賞金首。

「"月の光を纏う者"・・・ザード=ウォルサムだな？」

「ああ」

トラキアが訪ねると、銀の髪の男は小さく頷いた。

驚異的な一足飛びで跳ねるように飛んだザードは、茂みの中に飛び込み闇と同化する。マシンガンを持っていた4人のマスカレイドは、ザードが動いた瞬間から射撃を行ったが銃弾の雨は掠った様子も無い。

ガザザザザザザザ

マスカレイド達の周りで、森の木々がざわめく。まるで獣が獲物を狙い、森の中を駆け巡っているようだった。

「何処から来る・・・？」

誰かが呟いた。不意に、木々の擦れる音が止んだ。

「ワッツ！後だ！」

トラキアが叫ぶのと、ザードが茂みから飛び出すのは同時だった。宙を舞ったザードは、抜き身の剣をワッツの肩口に叩きつける。ボスン、と、ザードの手元に鈍い手応えが伝わる。ザードの剣に叩き飛ばされたワッツは背中から倒れ込み、後ろ頭を打ちつける。

「ああ！？」

大木をも両断する筈の斬撃は、ワッツの着るアダマンタイトの防弾服によって防がれた。ザードは手元に伝わるあり得ない程の鈍い感触に顔をしかめた。一度地に足を着けたザードは、再び低い姿勢で茂みの中に飛び込む。その間に、マスカレイドの一人が持つマシンガンをすれ違いざまに両断して行った。

「は、速えええ！！ヤバイぞあいつ！！」

ザード=ウォルサムが強さの一端を垣間見て、マスカレイドのメンバーに緊張が走る。再び彼らの周りでは、木々のざわめきが彼らを囲む様に走り回っている。

「狩られる側の気分だな・・・」

トラキアがそう呟いた時、次の攻撃が来た。茂みから銃の発砲音が響き、木々の枝を吹き飛ばした。ザードの撃った散弾は、マシンガンを持つひとりに降り注いだ。しかし、男には散弾によるダメージは無く、その手に持つマシンガンだけがひしゃげて飛んだ。続いて打ち込まれた散弾も、もう一人のマシンガンを狙って放たれた。トラキアの表情に焦りが浮んだ。

「狙いは銃だ！」

最後の1丁を持っていた男の前に、ザードが茂みから踊り出る。縦に振り下ろされた剣は、男の腕を引っ掻きながらマシンガンを両断する。男を斬り付けた時の手応えに、彼は彼らが特殊な防護で身を包んでいる事を確信した。

トラキアを先頭に、ナイフを手にしたマスカレイド達がザードに襲い掛かる。

「うおおっ！？」

思いのほか鋭いナイフさばきに、ザードは思わず後ずさる。長剣で3人のナイフを捌くという離れ業を見せながら、更に右手の散弾銃を至近距離で撃つ。しかし散弾を全身に浴びた男達は僅かに仰け反っただけで、再びザードにナイフを向ける。ザードの剣はナイフを弾きながらも、何度が彼らの腕や脇腹を薙いでいる。しかし、剣の柄にはまるで粘土でも叩いているかのような鈍



い感触が伝わるばかりで、彼らにダメージを与えられている様子は無い。ザードは舌打ちをした。

「噂ほどでもないな！！」

剣の一振りです数十という人間を斬り殺すんじゃないのか！？」

敵の言葉に、ザードの目が獰猛に輝く。

「ああ、・・・そんなに見たいなら見せてやるよ！！」

ザードは剣を振り抜いて、背後に大きく飛んだ。そして懐に手を伸ばす。

取り出したのは、大きな赤い石。僅かな月明かりに輝くそれは、ガラス玉カルビーか、見ただけでは何か分からない。それをザードは、自分の握る剣の鏢に押し込んだ。赤い石は飾りのように鏢へ綺麗に収まった。

ザードは剣を大きく振りかぶる。それは、マスカレイド達から随分と離れた、剣など全然届かない場所。トラキアはその時、ザードの剣に赤い光がまとわり付いているのを見た。猛烈に嫌な予感が背筋を駆け抜ける。

「飛べ！！」

トラキアの叫びと同時に、ザードの剣が真一文字に振り抜かれた。瞬間、マスカレイド達の間を一陣の赤い風が吹き抜けた。不吉な何かを乗せた風はマスカレイド達の間を過ぎ去る。

しかし、それだけだった。マスカレイド達は自分の体や周りの様子を伺うが、何も変化は無かった。本当に、ただの風だった。

「・・・くそ。

やっぱ街で吊るし売りしてる魔導石じゃ"石"の代わりにはならんか・・・」

バツが悪そうに、鏢に収まる赤い石を睨んだ。

ザードは数日前まで、強力な魔力増幅器を持っていた。それを彼の剣に納めていれば、マスカレイドの男が言った噂の通り、剣の一振りがかまいたち状の魔力衝撃波を生み出し、何人もの人間を同時に斬り裂く事も出来たのだ。そんなでたらめな力を持っていたザードだが、今はその魔力増幅器は無い。彼の戦いは数ヶ月前、世界大戦の終結と共に終わり、必要無くなった魔力増幅器は、本来在るべき場所に返してしまったからだ。

月の光を纏う者は、今では特別な力など持たない、ただの剣士でしかなかった。

「ハッターだ！

このまま畳み掛けてやれ！」

ナイフを持ったマスカレイド達は再びザードとの間合いを詰める。ただ一人、今だ嫌な予感が拭えないトラキアを除いて。

そして、トラキアの予感の的中する。ザードの剣は、飛び掛ったマスカレイド達のコートを斬り裂き、その下の胸を、足を薙いだ。

致命傷には至らないものの、たまたまザードの足元に二人のマスカレイドが倒れ伏す。慌てて距離を取ろうとしたもう1人のコートを斬り裂くが、剣は体に届かなかった。

「魔法剣か・・・！」

「ふうん。・・・安物の魔導石でも、お前らの防弾服を斬るくらいの力は引き出せそうだな」

赤い宝石を納めた剣を掲げ、ザード=ウォルサムは満足そうに笑った。

形勢は逆転した。

常識を逸した動きでマスカレイドたちを翻弄するザードは、彼らの手足の腱を、アダマンタイトのコートごと切り裂いていった。攻撃を受け止める事を前提とした戦いをするマスカレイドにとって、ザードの持つ剣は彼らの戦い方の根底を覆すものであった。しかし、それはマスカレイド達がアダマンタイトのコートに身を包む事によって生まれた慢心によるものでは無い。マスカレイド達は、アダマンタイトのコートが無くても強かった。しかし、ザードはその強さの遙か上に居た。

たった数十秒で、動けるマスカレイドたちはトラキアとワッツだけになってしまった。それ以外のメンバーは体の自由を奪われ、地面に倒れ伏している。死んでいる者も、致命傷を負っている者も居ない。意図的に殺さないような戦いをしているのだ。敵と戦う上で、相手を殺さないようにして勝つという事は、相手より遥かに強くないでは出来ない芸当である。

格が違う。

トラキアは、月明かりに照らされるザード=ウォルサムを見て、僅かに足を竦ませた。



「命まではとらねーよ。

これに懲りたら、もう俺に手を出そうなんて考えるな。分かったら消えろ」

面倒そうに言うザードを無視し、トラキアは身に纏っていたコートを脱ぎ捨てる。

「お、おい、何を・・・」

ワッツが慌てて声を掛けた。マスカレイドの兵士が素顔を晒すのはタブーである。

「動きにくい。この服を着ていても、こいつ相手じゃ邪魔なだけだ」

トラキアは顔を覆うデスマスクも外し、黒く塗られたナイフを片手に向かい合う。ザードの表情から余裕の笑みが消える。

「お前は他の奴等に比べて冴えてるな・・・あまりふざけると怪我をしそうだ」

腰を落とし、ザードは低く剣を構えた。

「ワッツ、手を出さないでくれ。・・・一発で決めてやる」

その時、耳元の魔導式通信機からアリシアの声が届いた。

『トラキア！ すぐにそこから逃げて！！』

トラキアたちの身に付けている端末を通し、アリシアにもこの有様が見えているのだろう。ト

ラキアは片手で耳元を押さえながら返事をする。

「・・・大丈夫だ。すぐに片付けて、そっちに戻るから」

『違うの！ ザード=ウォルサムのことじゃなくて、今その森にあなた達以外の何かが居るわ！

気をつけて、かなりの数よ！！』

「・・・！？」

アリシアの警告に、トラキアは言葉を失う。対峙するザードに注意を向けながらも、思わず周りの暗闇を見回す。

「・・・なんだ。周りの奴らはお前らの仲間じゃないのかよ？」

既にトラキア達以外の存在に気付いていたザードが呆れるように言った。その言葉がさらに二人の不安を掻き立てる。

何が起きている？ トラキアとワッツの胸がざわめいた。

次の瞬間、立ち尽くす3人の耳を、轟音がつんざいた。

それは一斉に打ち出された大口徑ライフルの発砲音。太い幹が吹き飛び、地面の土が水柱のように吹き上がる。トラキアは慌ててコートを被り、身を伏せる。ワッツもトラキアと同じように、身を伏せ茂に隠れた。アダマタイトのコートでも、このような銃弾を受けたら無事では済まない。成す術もなく、ただ地面に伏せて銃撃が止むのを待った。



「何よ・・・これ・・・」

森の外れに止められたトレーラーで、マスカレイド達の動きをモニタリングしていたアリシアが声を震わせた。

唐突に、トラキアとワッツ以外の信号が消えたのだ。



一斉射撃が止み、トラキアは探るように回りを見回してから照明弾を一つ、放り投げた。暗闇に生まれた強烈な光が、ズタズタに裂けた木々や、めくれ上がって煙をあげる地面を照らす。ザードも、トラキア達と同じように、土と木屑にまみれて身を起こした。そして、

「・・・・・・・・ッ！」

トラキアと、ワッツはその光景を目にし、唇を噛む。湧き上がる怒りを必死で抑え、震える手を握った。

そこには、ザードに手傷を負わされ、動けなくなっていたマスカレイドの仲間達が、アダマタイトのコートに無数の穴を穿たれ、事切れていた。

「貴様らあああああああっ！！」

ワッツは森の奥に蠢く闇に向かい叫ぶ。トラキアも、気を緩めるとすぐにでも敵に飛び掛って

行きそうになる身を必死で押さえる。まだ相手が何者か、どれだけの人数が居るのかも分からないのだ。

「残っているのは・・・トラキアとワッツだな？」

照明弾の照らす光の輪に、マント姿の人間が一人、歩み出た。その姿に、トラキアとワッツは目を見開く。

フードの付いたシンプルな赤黒いマント。そしてフードから覗く真っ白なデスマスク。それは、マスカレイド部隊の装備によく似ているが、細部のデザインが違う。トラキアの装備よりも洗礼されたシャープさがあった。そして、その声。

「ツヴァイか・・・？」

「そうだ、トラキア。

そこから動くなよ。ルゴワールの意思により、これからお前達を処分する」

トラキアとワッツ、そしてザードは、ツヴァイと同じ装備に身を固めた兵士達に囲まれる。その数、20人弱。

「なんだ、こいつらは・・・！？」

ワッツが彼らを見渡し、呟く。

「お前達から採ったデータをフィードバックした、新しいマスカレイド部隊だ。マスカレイドの名は、今日をもって我々の物となる。アリシア=スティンブルグの創設したマスカレイドは、今日でお終いだ」

「お前・・・ッ！！アリシアを裏切る気か！？

誰のお陰で、俺達がここまで来れたと思ってやがる！！」

激昂するワッツを、ツヴァイは冷ややかな目で見ると見る。

「そう、ここまでだ。アリシアについて行っても、行けるところはここまでだ。

だから俺は、次に行く。カーティスと一緒に」

カーティスの名が出た事で、トラキアとワッツは事の成行きに見当がついた。アリシアは、カーティスの下で人間兵器として扱われていたトラキア達を解放するため、カーティスを弾劾し、彼の研究を凍結に追い込んだ。カーティスがアリシアを恨んでいるという事は前々から知っていたが、このように思い切った行動に出る男だとは知らなかった。

それほどまでに、アリシアを恨んでいたのか。

「・・・何故こんな事をする必要がある？

先に行きたいなら好きにすればいい。なんで、今まで一緒に戦ってきた仲間を殺す必要がある？」

トラキアは感情を殺した声で、ツヴァイに問いかける。

「アリシアを崇拝しているお前達が、カーティスに付く気があると思えなかったからな。

それに、これは組織の総意だ。

お前達の家族ごっこは組織を蝕む害悪として認識されているのを知らないわけじゃないだろう。現にアリシアの影響を受けて"良心"とやらを疼かせた研究者どもが何人も組織を裏切っている。

その根源がとうとう制裁対象になってしまったという事だ。

・・・もっとも、それを上に提言したのはカーティスだがな。

小娘相手に嫉妬する大人気ないジジイだ。単純にアリシアの全てを奪い、復讐をしたいんだろう。

お前達をザード=ウォルサムとぶつけて、上手くいけば返り討ち、もしくは消耗しきった所で、俺達とどめを刺す、という段取りだ。7人のうち5人を戦闘不能にまで追い込んだザードウォルサムは思いの他役に立ってくれたよ」

ツヴァイに見下ろされ、土にまみれたザードは肩をすくめる。

「俺は当て馬かよ・・・。馬鹿馬鹿しい」

ザードは一步後に下がると、次は大きく跳んで照明弾の灯りが届かない森の奥へと消えた。こじれ始めた事態が面倒になって逃げ出したのだ。数人のマント姿がザードの後を追おうとするが、

「構わん。放っておけ。今はこいつらの相手が先だ」

ツヴァイがそう言い、僅かにトラキアから目を放した時。

たったの数歩で、トラキアはツヴァイとの間合いををナイフが届く範囲にまで詰めた。ワッツもトラキアと同じタイミングで、頭上の木々の枝を伝い、頭上から襲い掛かった。

トラキアのナイフはツヴァイの首をマントのフード越しに捕らえる。しかし、ナイフに伝わったのは肉を裂く感触ではなく、粘土を叩くかのように鈍い手応え。それは、トラキアの良く知るものだった。一呼吸置いて、真上から落ちてきたワッツがツヴァイの真後ろに着地する。そして、持っていた小銃をツヴァイの背に押し付け、全弾打ち込んだ。突き飛ばされるように地面に倒れるツヴァイ。しかし、トラキアとワッツは警戒してすぐさま倒れたツヴァイから距離を取る。そして、彼らの予感通り、ツヴァイはゆっくりと身を起こす。

「流石のコンビネーションだな・・・このマントじゃなければ死んでいる所だ」

平然とした様子のツヴァイに、ワッツは舌打ちをする。

「あのマント、本当にアダマタイトだぞ！！」

現在、マスカレイドの任務に就いていないツヴァイのマントはアリシアが保管している筈である。しかし、ツヴァイはアリシアの作った物とは違うアダマタイトのマントを纏っている。マントの製造技術は彼女しか知らない筈だ。その情報が、何処からか漏れてしまったのだ。

「よくもこれだけ量産できたな・・・」

森を囲むマント姿達も、全員同じ物を着ているのだとしたら、状況は芳しくない。トラキアとワッツには、ザード=ウォルサムの魔法剣や、ツヴァイの大口径ライフルのような、アダマタイトに対抗する手段が無いのだ。

「・・・俺達も逃げるぞ。森の外のアリシアも心配だ」

「・・・仕方ねえな」

トラキアは、手持ちの照明弾をありったけ、足元に転がした。



アリシアはトラキアのデスマスクに取り付けられていた端末を通し、全ての事情を把握していた。組織の中で唯一心を許しあえる仲間の裏切り、そして5人の仲間の死。

「と・・・とにかく・・・トラキア達を、助けに行かなきゃ・・・」

頭の中が真っ白になったまま、アリシアは震える手で車のハンドルを握ろうとする。

バン、と音を立て、トラックの扉が乱暴に開かれた。

「悪いね、アリシア。君にもマスカレイド達にも、ここで消えてもらう」

現れたのは、二人のマント姿と、それを従える憎悪に歪んだ顔の男。アリシアと同じ、ガーデンの研究者であるカーティスだった。



「あー、やっぱ引き返して連中全員しばいてやろうかな・・・」

心の隅にわだかまるムカムカに後ろ髪をひかれながら、ザードは森の中を走る。相手は追ってくる様子も無く、どうやら本当に自分はその連中のいざこざに巻き込まれただけのようなのだ。

茂みをひとつ飛び越えると、唐突に視界が開けた。森を抜けたのだ。そして最初に目に映ったのは、黒塗りの大型トレーラーだった。

「奴らの車か・・・ツイてるな。こいつを頂く事で仕返しとさせて貰うか」

自動車のような足はこの国ではなかなか手に入らない。森の中での一件はひどく気分を害するものであったが、それを全てチャラに出来るほどの収穫である。剣を抜き、ザードはトラックへ駆け寄る。トラックの反対側には、赤黒いマントを着た男が二人・・・服装からして、後で大人数で現れたグループの一味だろう。

「何だ、きさ、がっ！」

男はお決まりの台詞を言い終えるよりも早く、両腿を真一文字に切り裂かれた。そしてザードはバランスを崩して倒れ込む男の頭が地に着くよりも早く、硬いブーツで蹴飛ばして昏倒させる。硬直して動けなくなっていたもう一人には、胸元に散弾を打ち込んでやった。あの奇妙な防弾服に守られてはいても至近距離からの発砲に耐えられなかったか、衝撃に体を浮かして倒れこんだ。

「雑魚！」

一言吐き捨て、ザードは勢い良くトラックの扉を開ける。

「・・・あっ！」

そして、トラックの中で予想外の光景を目の当たりにする。トラックの中に居たのは二人。一人はそこそこ歳を重ねた髪薄い初老の男。そして、ザードと歳の近い少女が口を塞がれ、その男に押し倒されていた。

少女に覆いかぶさる初老の男が叫ぶ。

「お前が心配する事は無い！！ マスカレイドの研究は、私が引き継ぎ、ルゴワール最強の、いや、世界最強の軍隊に育て上げてみせるわ！！」

引きつった笑みを浮かべ、初老の男は心が壊れているかのような裏返った笑い声を上げる。あまりのイカレっぷりにザードがポカンとその男を眺めていると、襲われていた少女がザードの存在に気が付いた。少女は自分の口を塞ぐ男の手に噛み付き、その手を押し退けた。

「助けて！！」

少女のその一言でザードの目には、この二人の関係が強姦といたいけな少女という有り体なものとして映る。程度の低い"悪"に対して極端に沸点の低いザードが一瞬にしてキレた。

「なあにしてんだこのゲロハゲッ！！死ねっ！！」

「げふぁっ！！」

ザード自慢の鉄板入りブーツで顔面を蹴り飛ばされた強姦は、トラックのフロントガラスを突き破り、トラックの外に上半身だけをダランと伸ばした。

「ああ、クソ！！気分悪い！！嫌なモノ見たぜ！！」

ゴシゴシと目を擦ってから失神した男に唾を吐きかけ、ザードは蹴りをもう2、3発。砕けたフロントガラスごとカーティスを車外に蹴り出した。

森の中での戦いですら息を切らさなかったザードが肩で息をし、強姦に襲われていた少女に目をやる。

「その、大丈夫か？ えっと・・・すけべな事とか・・・」

「いえ！！別にそういうのではなかったのですが・・・とりあえず、ありがとうございますまし・・・」

少女の、アリシアの表情が固まる。強姦・・・ではなく、カーティスに襲われた事で動転していたせいか、自分を助けてくれた男が、組織のターゲットであるザード=ウォルサムだという事に今になって気付いたのだ。

「あ・・・えっと・・・」

自分はこの男に、立場上どう接すれば良いのか分からなくなり、アリシアはジリジリとザードから距離を取る。アリシアの奇妙なリアクションに首を傾げながらも、ザードは勝手に運転席のシートに座る。

「・・・？ まあいいや。

悪いけど、このトレーラーを頂くぞ。

って、いやいや。ひょっとしてコレあんたの？

だとしたら近くの大きな街まで乗せてってくれないかな？」

問答無用で車を頂くとも言い切れず、ザードは少女と一緒にいくという選択肢を示した。この少女が敵の仲間である可能性は高かったが、少女はどうみても戦いの素人だ。運転中に襲われたとしても軽くあしらう自信があつての発言だった。

ザードがトラックのエンジンを掛けると。再びトラックの後部ドアがバンと勢い良く開かれる。

「アリシア！！」

「今すぐ車を出せ！！」

現れたのはトラキアとワッツだった。ツヴァイ達の追撃を振り切り、ここまで逃げてきたのだ



。　　トラキアはアリシアの無事な姿を見て胸を撫で下ろし、アリシアの隣で運転席に座っている男を見て、背筋を凍らせた。

「ザ、ガード=ウォルサム！！？」

「げっ！！」

「うおっ！ しつこいなてめえら！！」

トラキアとワッツ、そしてガードが飛び上がり、各自のエモノに手を伸ばす。

「待って！！ トラキアも、ワッツも！！ ナイフを下ろして！！ あなたも、剣を・・・！！」

アリシアは3人の間に割って入り、自分自身もどうすれば良いか分からぬまま、武器を納めるように促す。マスカレイドの二人とガードはナイフと長剣を向け合ったまま戸惑い、動けずにいる。

「彼女から離れろ！！ 剣も捨てろ！！」

「何だよ、まだ俺に勝てるとでも思ってるのか？」

「こっちは二人がかりだぜ・・・！」

「おーやってみろよ。ほら、かかってこい」

トラックの中で限界まで張り詰めた空気が今にも破裂しそうになっていた時、

ドン、と、トラックが揺さぶられた。その衝撃に、武器を向け合う3人も、警戒を緩めぬまま外の様子を伺う。森の中から飛来した銃弾が、防弾仕様のトレーラーを叩いたのだ。

「奴ら、もう来やがった！！」

ワッツとトラキア、アリシアは思わずトラックの外に視線を向ける。赤黒いマントを羽織った男達がバラバラと森の中から現れた。

アリシアはガードの前に身を乗り出し、

「車を出して！！」

「ちょっ・・・あ痛えっ！！」

彼女はガードのブーツごと、トラックのアクセルを思い切り踏み込んだ。急発進したトラックは、トラックの前に倒れていたカーティスを轢いて土を掻きながら走り出す。

少し遅れて姿を現したツヴァイが、遠くへ走り去るトラックを見た。

「逃がしたか」

「森の中の車を回せ！！ 追うぞ！！！」

「無駄だ、今から追っても間に合わん。それより、この先のセトの街に居る監視兵に連絡を取れ」

勢いばかりで動こうとする部下に、ツヴァイは溜息混じりに吐き捨てた。ツヴァイは、この新たなマスカレイド達が兵士としてあまり良い質であると思っていなかった。落ちぶれた研究者が寄せ集められる人材などこの程度のものだ。

ツヴァイは足元に散乱していた資料の束や小さな鞆を拾い上げる。トラックから落ちた荷物のようだった。その中の小さな鞆に、ひと束の薬袋がある事に気付いた。それを見たツヴァイは口

元を歪める。

「アリシアは・・・放っておいても死ぬかもしれんな」



「おい・・・なんで俺がお前らの運転手をしていなきゃならんだ・・・」

「・・・」

「・・・別に頼んでねーよ・・・」

「なんだとこの野郎・・・」

ハンドルを握るザードと、アリシアに怪我の手当てを受けているワッツの空気が険悪になる。

黒塗りのトラックは夜明け前の街道を結構なスピードで走っていた。このペースなら、日が昇る頃にはセトという大きな街に到着出来る筈だった。

「・・・あんたも足が欲しかったんだろう。このトラックは自由にしてもいい。だから、このまま追っ手を振り切って遠くの町まで俺達を連れて行って欲しい」

ザードの座るシートのすぐ後で、黒髪を伸ばした男、トラキアが言った。

「お前ら、俺を狙っていたんじゃないのか？」

「ああ。でも・・・もうあんたを狙う理由は無くなった」

「そいつは・・・勝手な事で」

「全くだ。すまなかった」

そう言って、ザードの後でトラキアが頭を下げた気配がした。

ち、と、ザードは舌を鳴らす。この男と話していると調子が狂うようだ。

「これから、どうすればいいかな・・・？」

「私たち、ルゴワールに見捨てられたのよね・・・？」

ワッツの腕に包帯を巻きながら、アリシアが言う。その声色は軽く、あまり困っていないような印象を受けるが、その表情は虚ろで見るものを悲痛な気持ちにさせた。

「とりあえず、金には困らないだろう。組織の情報網が使えないのは厳しいが、一度この国を出よう。そして、組織の手の出しにくい国で身を隠す」

「それで？」

「ほとぼりが冷めた頃に、ツヴァイに接触する。真意を確かめて、もしそれでも俺達の敵に回るようなら・・・」

「あいつはロキやアイザック達を、俺達以外のマスカレイド全員を殺したんだぞ・・・ッ！」

「何考えているか確かめる必要なんかねえ！ 奴は殺す！！」

ワッツは傷だらけの拳を握り締め、床を殴りつけた。アリシアを裏切り、仲間を殺したツヴァイへの怒りは勿論の事、今のワッツはトラキアの冷静さにすら苛立ちを感じていた。

震えるワッツの腕を、アリシアが握り締めた。

「なんで・・・っ、どうしてこんな事に・・・」

声を殺して鳴き始める。ワッツの表情は曇り、怒りの感情は一旦なりを潜める。無言でアリシ

アの頭に手を置いて、髪を撫でた。

辛気臭くなってゆく空気に、ハンドルを握るザードはわざとらしく溜息をついた。

びくん、と、ワッツが握るアリシアの手が震えた。

「・・・アリシア？」

「・・・っあ・・・」

胸を押さえ、苦しげな表情でアリシアはワッツを見上げる。その間もアリシアは呼吸を乱し、2度、肩を震わせた。

「薬だ！！」

アリシア、薬はどこに仕舞った！？」

トラキアが飛び起きる。アリシアはトラックの荷台で中身をぶちまけていたた鞆をたぐりよせ、その中身をまさぐる。

「トラキアっ、どうしよ、薬が無いよ・・・！！」

トラキアはアリシアの鞆を取り上げ、乱暴に中身を探す、同じようにシートの下などに薬が転がり込んでいないか探し回るが、見つからなかった。鞆がトラックの扉の近くでひっくり返っていた事を考えると、トラックの外に落としてしまった可能性もある。

トラキアとワッツが顔色を変えて薬を探し回る間も、アリシアの意識は朦朧となり、呼吸が浅くなってゆく。

その様子に流石に心配になったザードが車のスピードを緩めながら後を振り向く。

「おい、その娘大丈夫なのか？」

一度車を・・・」

「止めるな！！ 街の医者まで走らせろ、急げ！！！」

その剣幕にザードはやや腰を引く。言いなりになるのは癪だったが、目の前で衰弱してゆく少女を見捨てるのも目覚めが悪かった。ザードは今日何度目になるか分からない溜息をつき、トラックのギアを一つ落とすと、横手の丘にトレーラーを突っ込ませた。

「丘を駆け上るから、その娘、しっかり抱いてシートに座ってろ。」

それと・・・水とタオル。これぐらいしか無いが使え」

ザードは荷物から水筒と、旅人の持ち物とは思えない妙に真っ白なタオルをトラキアに放って渡した。

「・・・すまない」

ジグザグに丘を登る街道を無視し、ザードの運転するトラックは一直線にセトの街へ向けて走り出す。

医者は暫くアリシアの脈を計り、顔をしかめてその腕をベッドの端に置いた。

「今は落ち着いているが、意識が戻ったらまた体調も情緒も不安定になるだろう。寝かせっ放しというワケにもいかんから、何とかせなきゃならんな・・・」

ボルトと名乗った町医者は早朝に叩き起こされたにも関わらず、トラキア達が転がり込んだ宿へ出向き、アリシアへ治療を施してくれた。がっしりとした体格で、顔に大きな刀傷がある。右目も見えないのか、眼帯をしていた。そのような風体にも関わらず、小さな子供達にも好かれている名医だと言うのだから、世の中は分からない。

「アリシアは、体が普通の人間とは違うんだ。毎日、薬を飲まないでと体調を崩してしまう。でも、その薬は特別製で、普通では手に入らないんです」

トラキアは、アリシアがルゴワールによつて人工的に生み出された人間である事、薬はルゴワールの研究施設に行かないと手に入らない事を曖昧に言い換え、ボルトに説明をする。

しかし、ボルトにはそれが言い訳や誤魔化しにしか聞こえなかった。彼はトキの目を真っ直ぐ見つめ、言葉を濁さず問い掛けた。

「この娘さん・・・クスリをやっているだろう？」

「クスリ？」

トラキアは、ボルトの言うクスリが、何を意味するのか一瞬分からなかった。

「症状が、麻薬中毒者の禁断症状にそっくりだよ」

「ふざけんなよ！！アリシアが麻薬なんてやるワケねーだろ！！」

ワッツがボルトに喰ってかかり、トラキアは何か気付いたかのように、ハッと息を呑む。二人を見て、ザードが呆れたように溜息をついた。

「・・・クスリ漬けにして、組織を裏切れないようにする。

組織が飼い犬を逃がさないようにするための常套手段だ。その娘が毎日飲んでいた薬がソレなんだろ？」

「そんな事にも気付けなかったのか？」

トラキアとワッツの心に、ザードの絶望的で素っ気無い言葉がじわりと染みた。

確かに、自分の居る犯罪組織という世界は、人の欲望や敵意、裏切りや嫉妬など、負の感情を食物物にしている世界である。しかし、組織に育てられ、組織の中で戦ってきたトラキア達にとって、ルゴワールは唯一の居場所であり、全てだった。犯罪組織である以上、ルゴワールの全てを肯定するつもりは無いが、大本の所には自分の産みの親としての信頼があった。その思いが揺らぐ。

アリシアの体調を管理している医師の顔が浮んだ。人当りの良い、優しい男だった。彼がアリシアに与えていた薬は、彼女を組織に縛り付けておく為のものだったというのか。

そしてアリシアを、マスカレイドの仲間を裏切ったツヴァイ。Uナンバーズと呼ばれていた頃から一緒に戦ってきた5人の仲間を、ツヴァイはあっさりと殺した。

トラキアの中で、自分の信じていた世界が崩れ始めた。

顔色を無くし立ち尽くしているトラキアとワッツを横目に、ボルトは広げていた治療道具を片付け始める。

「とにかく、この娘が飲んでた薬が何か分からない以上、正しい治療は出来ない。俺の方でも出来るだけ症状を和らげる方法を探してみるが・・・期待はせんでくれ。アンタらもこの子が飲んでたクスリの手がかりが分かったら、すぐに俺の治療院まで連絡をくれ。また夕方頃に来る」

ボルトの言葉は、トラキアの耳に入っている様子は無い。ボルトはトラキアの正面に立ち、トラキアの胸を叩いた。

「しっかりしろ。この娘の頼りはアンタらしか居ないんだろ？」

ボケッと突っ立ってる間に、てめえで出来る事を考えろ」

「・・・ああ、そう、だな」

覇気の無い声で、トラキアはボルトの叱咤には応える。ボルトはフンと鼻を鳴らすと、トラキアを押しつけるように部屋から出て行った。

ボルトが去ってからたっぷり5分以上、誰も言葉を発しず、動こうとすらしなかった。

一連のやりとりを傍観していたザードが、痺れを切らして立ち上がる。

「・・・約束どおり、車は頂いていくぞ。これ以上付き合う義理も無いからな」

そう言うと、ザードは自分の荷物をまとめ始める。トラキアとワッツは何も言う事が出来ずに、その姿を見送る。

そしてザードは、じゃあな、と一声軽く手を振り部屋の扉を開いた。

すると扉の隙間に挟まっていたのか、封筒がハラリと床に落ちる。

「なんだこれ？」

ザードは封筒の裏表を見て、無造作に封筒を破り、中身を確認する。中身の便箋に書かれていた文章を、そのままトラキア達にも聞かせた。

「旧街道の先、アルセスタの森で待つ。

だとよ。もうココ連中に見つかってるみたいだぞ？」

ワッツはザードの手から便箋と封筒をひったくる。封筒には、便箋の他に、折り目の付いた茶色い小さな薄い紙が入っていた。ザードとワッツはそれを見て首を傾げるが、トラキアはひと目でそれが何か分かった。

「アリシアの薬の包み紙だ・・・！」

トラキアとワッツの瞳に、ようやく光が戻る。

「薬が欲しかったらココに来たってか・・・まだ手紙を置いていった奴、近くにいるかもしれないぞ！」

「いや、追っても無駄だろう。全く気配を感じなかった・・・」

トラキアはこの手紙の意図を読み取ろうと、思考を巡らせる。既に自分達の場所がツヴァイ達

に割れているなら、ここに直接刺客を送り込めばいいのに、何故このような真似をしたのか。考えるまでも無い。アリシアの薬を餌に、トラキアとワッツを確実に殺す為の罠に誘い込んでいるのだ。ツヴァイにとって、恐らくこれは余興だ。

「ガード=ウォルサム。あんたに頼みがある」

「断る。犯罪組織、ましてヤルゴワールにこれ以上関わるのは御免だ」

するとトラキアは、自分の荷物から分厚い札束を抜き出し、テーブルに放った。

「ならば、正式な仕事の依頼として頼みたい。傭兵なんだろう？」

札束の厚みは尋常ではなかった。旅の資金に不自由はしていないガードだったが、それでもこの金額には驚いた。そして、これだけの金額を積んで自分に何を頼もうとしているのか、興味が湧いた。

「・・・一応聞くだけ聞いてやるよ。何だ？」

「俺達が居ない間、アリシアを守って欲しい」

トラキアの依頼は、シンプルなものだった。ここまでは。

「・・・そして、もし俺達が奴らに殺されるような事があったら、アリシアの事を・・・」

「ああ、そこまでは面倒見切れねーよ」

トラキアの言葉は溜息混じりの声で遮ぎられた。

「この娘の面倒を見るのはアンタらの仕事だろ。」

そいつに関してはいくら金積まれても引き受けるつもりはねえ。俺には荷が重過ぎる」

そう言うと、ガードは札束の中から紙幣を一枚、抜き取った。

「でも、今日一日くらいの護衛なら引き受けてやる。護衛の仕事なら、これだけで十分だ」

一般的な護衛の仕事の日当分の紙幣を揺らして、ガードは言った。もっとも、ガード程の腕の剣士を護衛として雇うには安すぎる金額ではあったが。

ガードは手にしていた荷物を再び部屋の隅に放り投げ、剣を抱えて椅子に座り込んだ。アリシアを護るように。

「・・・すまない。ありがとう」

トラキアはそう礼の言葉を告げると、封筒に入れられていた薬をアリシアに飲ませた。薬はほんの少しだけ残し、包みの中に戻した。ボルトの治療院へ持って行き、成分を調べて貰うのだ。二人はその足で呼び出し場所へ向かうのだろう。装備一式の詰まった大きな鞆を背負い、宿を出て行ってしまった。

「・・・ホントに頼むぜ。この娘残して逝っちゃったりするなよ・・・本当に後の面倒なんて見ないからな・・・」

また面倒な事を頼まれてしまったな、と、部屋に残されたガードは心配そうにベッドに寝かされた少女の顔を覗き見る。心なしか、薬を飲む前より表情が穏やかになっていた。

ふと思いつき、札束から抜き取った一枚の紙幣を見た。そしてまた、大きく溜息をつく。

「・・・偽札じゃねえか。さすが犯罪組織・・・」



15年前。戦争に戦車等の重兵器が導入されるようになった頃から、街の東を流れる川に鉄筋コンクリート製の橋が架けられた。それ以降、昔から使われていた吊り橋に続く街道は旧街道という扱いとなった。廃道となった訳ではないので、今でも時折整備がなされ、吊橋も数年に一度、ワイヤーの張り替えが行われている。とはいえ、この旧道の先にあるのは大戦後期に見捨てられた小さな廃村のみである。今は人の住まない村に続く道に人気など無かった。

その道を、トラキアとワッツはマスカレイド部隊のコートを羽織り、大きな荷物を持って歩いていた。フードとデスマスクは脱いでいたので、その姿は特に異質なものではない。手にした大きな鞆の中には、装甲車をも打ち抜くライフルが入っていた。アダマンタイトの防弾服には、これくらい大型の銃器でなければ通用しない。

「あいつ、何だかんだ言っている奴だな・・・」

ワッツがライフルの鞆を背負い直し、呟いた。あいつとはもちろん、ザードの事である。

「戻ったら・・・ちゃんと礼をしなきゃな」

「・・・戻ったら、ね」

どこか自嘲気味の笑みを浮かべて、ワッツはトラキアの言葉を繰り返した。

「勝算はあるのか？」

こっちは二人で、向こうは少なくとも20人近くだ。ただの兵隊ならともかく、奴らは俺達と同じアダマンタイトの防弾服を着ている。

「とてもじゃないが・・・」

「いいや、勝てる。昨日連中の動きを見て分かったが、奴らの装備は一流でも、使い手の質は大したものじゃなかった。こっちにはアダマンタイトにも貫通する大型ライフルもある。アダマンタイトの防弾服を着ていても関係ない。正面から当たれば、決して勝てない相手じゃない」

自信なさげなワッツを励ますというより、トラキアはどこか自分に言い聞かせるように言った。

ワッツも、トラキアと同じ意見の所はある。確かに、個々の兵達にはあまり脅威を感じなかった。20人という人数は脅威だが、例えばその戦力を分断して戦う事が出来れば、戦いの流れをこちらに向けることは出来るかもしれない。

ただし、それらを束ねるツヴァイは別である。射撃の腕はトラキアに及ばないものの、ナイフの扱いに関してはマスカレイドの中で1、2を争う程の使い手だ。そしてツヴァイの一番恐ろしい所は、その狡猾さである。目的の為なら、手段を選ばないという性格。

手紙によるツヴァイからの呼び出し。ワッツには、あのツヴァイが指定の場所で律儀に待ち構えているとは到底思えなかった。

森の木々が途切れ、目の前に深い崖と、吊橋が現れた。

旧道となってから利用する人間が居なくなったと言われる吊橋だが、ワイヤーも床板もそれほど傷んでいる様子は無い。崖の下を流れる川は、流れはそれほど速くないようだが川幅は広く、深さもそれなりにありそうだ。トラキアとワッツは、吊橋を渡る前に、念の為橋に細工がされて

いないか調べから渡り始めた。

橋を4分の1ほど渡った所で、トラキアは一度後を振り向いた。周りにおかしな様子は無い。再び前を向いて歩き出した時、その足どりは振り返る前よりも少し早かった。ワッツも周りを警戒しながら、早足で吊橋の上を歩く。

トラキアは歩調を更に早めながら、背中に跳ね上げていたフードを被り鞆の中のライフルを取り出した。

嫌な予感が消えない。

ワッツがライフルのベルトをを肩に掛けた所で、二人の歩みは全力疾走に変わる。吊橋が激しくたわむが、二人はバランスを崩す事無く橋の真ん中まで駆け抜ける。

バガン！

と、突然目の床板がバラバラに割れて散らばった。3枚分の床板と、それを支えていた金網が抜け落ちた。トラキアの走るスピードに合わせた、絶妙なタイミングでの銃撃だ。普通なら抜け落ちた足場に突っ込んでしまう所だが、トラキアは勢いを付けて床板を蹴り、それを飛び越えた。揺れる足場で、かつ無理のあるタイミングで跳んだため、トラキアは着地に失敗し、吊橋の上で転んだ。

「クソッ！ 約束の場所はここじゃねーだろうが！！」

「まあ、こんなおあつらえ向きの場所でツヴァイが手を出さない訳がないよな」

穴の手前で足を止めたワッツが、ライフルを構え周りを見回す。ゆっくりと、吊橋の前と後の森から、10人前後のマント姿が現れた。その手には、トラキアとワッツが持つライフルと同じものが握られている。

「やっぱりあの野郎、まともに戦うつもりはねーみたいだぞ・・・」

抜けた足場の向こう側で、ワッツが言う。トラキアは身を起こすと、普段のもの静かな様子から一変した。

「ツヴァイ、出て来い！！」

沸き立つ怒りを抑えきれず、トラキアは叫んだ。

ツヴァイは、トラキア達からは見えない森の奥から二人を見ていた。

トラキアが自分の名前を叫んだのを聞いたが、その叫びはツヴァイの心を上滑りする。無論、それに応える気など無かった。

通信機のボタンを押し、それを口元に当て、18人の部下へ指示を下す。

「やれ」

トラキアの叫びに応えたのは、アダマンタイトをも貫く弾丸の雨だった。

ライフル弾がトラキアの右肩に当たった。激しい衝撃にトラキアの肩は外れ、弾き飛ばされた体は吊橋のワイヤーに叩きつけられる。狙撃手と距離がある事と、吊橋が揺れる事が幸いし、銃弾の直撃でもマントが貫かれる事は無かった。

「っ・・・ツヴァイーー！！」



ワッツがライフルを振り上げる。しかしその銃身は、飛び来た敵の銃弾によって、砕けた。

銃弾の雨は、吊橋のワイヤーと床板を削る。ついに吊橋のメインケーブルが千切れ、吊橋はひっくり返るように垂れ下がった。宙に投げ出されるトラキアとワッツ。伸ばした手に、吊橋のワイヤーは僅かに届かなかった。

川の水面に叩き付けられるまでの時間は異様に長く感じられた。自分の周りの時間の流れが遅くなったような感覚。

「・・・クソッ！」

何も抗う事が出来ぬまま、トラキアは深い川に落ちる。出来た事と言えば、崖の下、自分が落ちた川の周りにも、ライフルを構えたマント姿が身を隠しているのを確認出来た事だけだった。

トラキアが水面に浮かび上がるよりも早く、今度は川の中に次々と銃弾が撃ち込まれる。目の前に、幾筋もの空気を纏った銃弾の軌跡が上から下へと突き抜ける。トラキアとワッツが落ちた川面に向って、崖の下で待ち構えていたマント姿達がライフル弾を撃ち込んでいるのだ。

ドン、と、

水中で、体が川の流れとは逆方向に弾き飛ばされた。

途端に赤い靄がトラキアの視界を塞いだ。その靄はトラキアの腹から湧き出す血だ。今度こそ、対戦車ライフル弾はアダマタイトの防弾服と、トラキアを貫いていた。



夕刻。

ザードとアリシアが待つ部屋に、ボルトが診察へやって来た。

ボルトは眠り続けるアリシアに声を掛け、アリシアはようやく目を覚ました。しかし、目を覚ましたアリシアはこれまで与えられていた薬が切れた事による禁断症状が起こり、ベッドの中で悲鳴を上げた。

麻薬の禁断症状によって、全身の関節が砕けたかのような激痛が走り、体温調節機能に狂いが生じた体は、寒さに震えていた。

痛みに苦しみ暴れるアリシアを、ボルトがベッドに押し付け、必死に落ち着かせようとしているのをザードは何も出来ずにただ見ている。

いや、見ている事すら出来なかった。

その様子にボルトが気付くと、お前が居ても仕方ないから出て行け、とザードを部屋から追い出した。ボルトにとっては気遣いのつもりだったが、ザードは自分の無力さに奥歯を噛み締める事になる。

廊下に立ち、壁に背を預け溜息を吐く。ふと気付くと、ザードは隣の部屋や奥の部屋の宿泊客から、何かと不安や好奇の目を集めていた。アリシアの声はこの小さな宿の全ての部屋に聞こえているだろう。

「・・・っ、見世物じゃねえぞ！！」

手近に立てかけてあったモップを、廊下を覗き込んでいた野次馬に向けて投げつける。ガシ

ヤン、と激しい音を立てモップは廊下を跳ね、野次馬達は驚いて自分達の部屋へ引っ込んだ。

八つ当たり以外何者でもない自分の素行に、益々ザードは自分が嫌になる。

「エアニス=ブルーゲイルさんだね？」

ザードは不意に見知らぬ男に声を掛けられた。エアニス=ブルーゲイルとは、ザードが1年前まで一緒に旅をしていた情報屋の名前である。ゲイルと呼ばれていたその男は既にこの世には居らず、ザードは彼の持つ名前と、情報網を受け継ぐ事となった。ザードは今、ザード=ウォルサムと、エアニス=ブルーゲイルの二つの名を持っているのだ。

「言伝を預かっているよ」

男はザードに封筒を手渡すと、それ以上何も言わずに立ち去ってしまった。ザードは午前中、ゲイルの情報網を使い、この街でトラブルなどが起きたらすぐに自分の元に情報が届くように手を回していた。今の男は、ザードが依頼した情報屋の運び屋である。

ザードは封筒の中身を取り出し、目を通す。そこには、正午過ぎに旧街道の吊橋が落ちた事、また吊橋の周りで銃撃戦の痕跡があったという事が記されていた。

時刻は夕方である。トラキアとワッツが未だに帰ってこないのは、未だ戦っているからか、返り討ちにあったか。前者は時間的に在り得ないだろう。

「・・・残念。ゲームオーバー、か」

ザードは便箋を握り潰して天井を仰ぐ。こうなる事も十分予想していた。もしかしたら、と彼らに期待する気持ちはあったが、まあ普通はこんなものだろう。

前金は貰っているが、雇い主が死んだ以上、あの少女の護衛を続ける意味は無い。大体、その前金は偽札である。

こっそり部屋に戻り、隅に置いてある荷物を持ってさっさと街を出よう。ザードはそう思い部屋のドアを開ける。

そして、部屋に入ってザードの目に映ったものは、体の痛みにも身をよじり、苦悶の表情を浮かべる少女の姿。耳にしたのは、苦しそうな呻き声の混じる、泣き声。

それは、エアニスの目と耳に一瞬にして焼きついた。

「くそっ・・・」

結局、ザードは荷物を持って旧街道の吊橋へ向かう事にした。自分に彼女を救う事は出来ないだろうが、それでもまだ自分に出来る事がある筈だ。

別に少女の為や、あの二人の男の為ではない。このまま見過ごしてしまうと、後々の寝覚めが悪くなるような気がするだけだ。彼等のためではない。あくまでこれは自分の為の行動だ。

抱え込んだ面倒事が転がる雪玉のように大きくなってゆくのを自覚しながらも、ザードは自分にそう言い聞かせる。

◆  
「まだトラキア達の死体は上がらないのか？」

「はい、ですが、川に落ちてからの一斉射撃で、水面に大量の血が広がったのを確認しています

。そのまま沈んでしまったのでは・・・」

「・・・滝の下の連中に捜索範囲を広げろと伝えろ」

「はっ」

ツヴァイは川の下流を眺める。トラキアとワッツが川に落ちてから数時間が経過していた。

この川の下流には大きな滝がある。吊橋での狙撃と、川に落としてからの一斉射撃で仕留められなかった場合でも、最後はこの先で滝壺に叩きつけられる。アダマタイトの防弾服は水中ではかなりの重荷となる上、川面に血痕が浮んだというのであれば、銃弾を幾らかは受けているだろう。このような状況で生き延びているとは到底思えなかったが、ツヴァイはトラキアとワッツの死体をこの目で確認しなければ安心出来なかった。

苛立ちを隠さずにいるツヴァイへ、通信機を手にした兵士がおずおずと声を掛けた。

「隊長、本部から・・・その、帰還命令が出ています」

「帰還命令だと？」

「はい、今回の作戦は組織内でも正式な任務として扱われていますが、ガーデンから作戦に対する抗議があったそうです。直ちに作戦を中止し、帰還するようにとの事です」

「・・・くそっ、ガーデンの研究者どもか」

ツヴァイ達は、アリシア=スティンブルグと、マスカレイド部隊がルゴワールからの技術の強奪と離反を企てている、という情報を捏造し、正式な組織の制裁として今回の襲撃を行った。その嘘に綻びがうまれたか、とにかくこの時点で作戦の中止を言い渡されるという事は、ツヴァイ達の組織内でのポジションはかなり悪くなっていると考えた方が良い。

「今回の作戦で後ろ盾となって下さったカーティス様も亡くなられています。これ以上は、我々の立場が悪くなる一方かと・・・」

「潮時か・・・」

ツヴァイは最後に一度、トラキアとワッツが落ちた川に視線を送った。

たとえ、あの二人が生きていたとしても大した事は出来ないだろう。アリシアに至っては、ガーデンに戻り薬を手に入れなければ、数日と持たずに薬の禁断症状で死ぬ。作戦は9割方遂行したといっても良かった。

「・・・撤収だ。情報部の連中に、ガーデンと上の連中を黙らせる用意をしておけと伝えろ。

お前達は念のため、隠れ家に身を隠しておけ。ルゴワール本部には俺一人で行く」

その命令を聞いた新生マスカレイド部隊の面々は、外したデスマスクを胸に当て、ツヴァイに頭を垂れた。



ザードがトラキア達の足取りを追っていると、唐突にその道は途絶えた。情報屋の手紙通り、川に掛かる吊橋が落ちていたのだ。

辺りを探ってみたが、あのマント姿の一団やトラキア達の痕跡を残す物は何も無い。対岸に渡り、街道をの先へ進むのは困難である。それよりザードは、谷の底を流れる川に意識が向いて

いた。谷に垂れ下がった吊橋のワイヤーを掴み、ザードは崖を跳ねるように降りてゆく。常人なら足の竦むような高い崖を一瞬で下り、身を低くして辺りの様子を伺う。人の気配は無いが、川の周りには新しい人の足跡が無数に残されている。そして、

「・・・血の匂い・・・」

普通の人間に比べ、遥かに鋭い五感を持つザードは、川下から吹いてくる風に、濃い血の匂いが混じっている事に気が付いた。ザードは迷わず川下に向かい走り出す。

更に時は経ち、日は山の稜線に隠れ周りが薄暗くなってきた頃。

ザードが探していた二人は、川辺に転がる大岩の影で見つかった。ワッツがトラキアを川から引き上げようとし、そのまま力尽きたような姿だった。

「・・・ひどくやられたな」

二人の体から流れる血は、川に注ぎ赤い帯を作っていた。川の水で広がったそれのお陰でザードは血の匂いに気付いたのだ。

「・・・ザード、ウォルサムか？」

ワッツが僅かに首を動かしながら言った。まだ息があった事に驚き、ザードは駆け寄りその身を起こすが、ワッツはその手を払いのけた。

「俺はもういい・・・。それより、コイツは生きてるか？」

ワッツは目を閉じたまま、唇だけを動かす。すぐ横に倒れているトラキアの様子すら分からないのか。ザードはトラキアの怪我の様子を確認する。トラキアの意識は無く、あちらこちら傷を負い、骨も数箇所折れていそうだった。そして、右の胸と脇腹の間くらいで銃弾が貫通していた。まだ息はあるが、このまま放っておけば死ぬだろう。

「ザード=ウォルサム・・・トラキアを、助けてやってくれ・・・」

ワッツの願いに、ザードは溜息交じりで答えた。

「この怪我じゃ街まで持つか微妙だな・・・お前はどうするんだ？」

「俺は・・・駄目だな・・・もう目は見えていないし、全身の感覚も無え・・・」

「・・・そうか」

ワッツの怪我は、ひと目見るだけでもトラキアより酷かった。

「・・・トラキアを・・・頼めるか？」

「ずるい奴だな。こんな状況で頼み事されて断れるかよ」

ワッツの言葉が途切れる。ザードには、ワッツが笑ったように見えた。

「"月の光を纏う者"か・・・噂なんて信用ならねーな・・・あんた、いい奴だなあ」

「俺の噂は8割方本当の事だがな。それに、割り増し料金はちゃんと頂くさ。偽札以外でな」

ワッツから、再び笑ったような気配を感じた。

「・・・もう一つ、頼まれてくれ」

「なんだ」

「そいつの意識が戻ったら、生きろと伝えてくれ。俺達に分まで生きろって・・・。

姫には・・・アリシアには、守れなくてごめん、って・・・」

「分かった。伝える」

「じゃあ、後は頼む・・・」

ワッツは僅かに右手を浮かして手を振った。トラキアを背負ったザードは立ち上がり、ワッツに背を向け歩き出す。ふと、その場を立ち去ろうとした足が止まった。

「・・・とどめは要るか？」

「そこまで手を煩わせちゃ悪いよ。自分でやるさ」

「・・・分かった」

その会話を最後に、ザードは駆け出しセトの街へ向けて走り出した。

暫く走ると、谷の間に乾いた銃声が響き渡った。

その音は岩の断崖に反響し、音の余韻はいつまでも鳴り響いているようだった。しかし、ザードはトラキアを一秒でも早く街に連れて行く為、足を止める事無く崖を駆け登って行った。



「寝すぎだ」

トラキアの意識が戻って、最初に聞いた言葉はそれだった。

見慣れない部屋のベッド。声は自分の横に立つ銀髪の男。記憶が混濁しているというよりは、何も考えられない状態だった。

「寝ぼけているのか？俺の事が分かるか？」

「・・・ザード・・・ウォルサっ、ゲホッ、がっ・・・！」

声を出しただけで全身に響く激痛。痛みがトラキアの意識を覚醒させてゆく。

「骨折6箇所、アバラと右肩は特に酷い。腹を特大の弾丸で撃たれてる。重体だ。寝てろ」

ザードは水場に行こうとベッドから離れようとしたが、その腕をトラキアが掴んだ。大怪我をしている人間の力とは思えなかった。少しでも身を動かすだけで激痛が走る筈だ。現にトラキアの表情は苦痛に歪み、額には汗が滲んでいる。

「あれから何日経った!？」

死にかけていた人間とは思えない声だった。これだけ元気があれば大丈夫だな、とは思いつつも、これからトラキアに話さなくてはいけない事を考えると憂鬱な気分になる。

「15日だ」

トラキアの目が見開かれる。口を空けたまま、声を出せずにいるようだ。

「じ・・・そん、なに・・・!？」

「このまま死にじまうと思ったぞ」

「ワッツは？ツヴァイはどうした!？」

「ツヴァイとかいう奴は知らん。

お前の相方は死んだ」

途端にトラキアの表情が抜け落ち、掴んでいたザードの腕を放した。

「奴に感謝しろよ。お前は奴に助けられたから、死なずに済んだんだ」

「アリシアは・・・？」

「・・・隣の部屋だ」

トラキアはベッドから身を起こし、立ち上がろうとする。痛みには耐えられるものの、足に力が入らないようで、あっさり膝が折れた。その体をザードが支える。

「会うか？」

「ああ・・・」

トラキアは氣力を振り絞り、自分の足で歩き出す。

部屋には薬と生活臭の混じった、病んだ空気が満ちていた。

「アリシア・・・」

ベッドで寝ていたアリシアは、目を開けて天井を見つめていた。その顔に表情は無い。トラキアの胸がざわめいた。

「どう、した？ アリシア？」

トラキアは虚ろな表情のアリシアの肩を掴んで揺さぶる。その拍子に、閉じていた唇が、かば、と開き、僅かに反った白い喉がコクンと鳴った。アリシアの首は枕から少しずれて、その視線は天井から窓の外の青空に移っている。

様子がおかしい。

「この子が飲まされていた薬の正体が分からないんだ」

部屋の隅の椅子に、医師のボルトが座っていた。ボルトは疲れきった表情で手元の資料をめくりながら、

「薬の解析をするにしても、解毒剤の精製をするにしても、時間がかかる。この娘の体力が尽きる方が、ずっと早い・・・」

トラキアは立ち尽くしたまま、ボルトの声を聞く。

「もう、その娘の体は限界だ。いつ死んでしまっても、おかしくない。

例え彼女を助ける手段が見つかったとしても、もう間に合わないだろう・・・」

不意に、窓の外を見ていたアリシアの視線がトラキアに向いた。

「あ、アリシア・・・」

しかし、アリシアの視線は、トラキアの姿に何かを感じた様子も無く、再び天井で固定される

。

その瞬間、トラキアは全てを失った事を理解した。



トラキアの握り締めた拳から血が溢れた。爪が手のひらに喰い込んでいるのだ。血の滴る両の拳を額に押し付け、トラキアはアリシアのベッドの前で崩れ落ちた。

「お、あ、あああああああ！！！」

トラキアは咆哮を上げる。目からは涙があふれ出した。

それは初めて体験する感情だった。

感情の無い兵器として育てられたトラキアはアリシアと出会い、人としてのあらゆる感情を教えられた。その中でも、この感情だけはいまひとつ理解が出来なかった。しかし、ようやくそれが理解出来た。

"悲しみ"が、アリシアがトラキアに教えた最後の感情となった。

後から思えば、彼女ははボロボロの体になりながらも、トラキアの目覚めを待っていたのかもしれない。

その日の夜、アリシアはトラキアに看取られながら静かに息を引取った。



2日後。

トラキアとザードは、セトの街の共同墓地に立っていた。

彼らの目の前には、7つの墓標が並ぶ。

アリシアと、ツヴァイ達に殺されたマスカレイドメンバーの墓標だった。

マスカレイド達の遺体は、ザードの手配によって、全員を連れて来る事が出来た。しかし、アリシアを始め、彼らの墓標に刻まれた名前は全て偽名だった。全員が、科学と魔導の力で人工的

に作られた人間である。その遺体は、組織の研究者達にとっては喉から手が出るほど欲しい研究サンプルだ。組織の人間に墓暴きなどをされないよう、ザードは出来る限りの偽装を施していた。

そして、たった今。アリシアの埋葬が終わり全ての事後処理が終わった。

ザードは隣に立つトラキアを見た。襟のある白いシャツと黒いズボンという特徴の無い服装だった。そして、長かった髪は固まった血が絡みついて切らざるをえない状態だったため、今は耳が覗く位の長さで切り揃えられていた。髪型と服装を変えただけで、トラキアはこれとって特徴の無い、どこにでもいるような青年になってしまった。唯一の特徴といえば、左手に杖を持っているという所だろうか。

トラキアの怪我は、ザードが遠くの町から呼び寄せた魔法医に殆ど治して貰っていた。傷は塞がり、骨は繋がっても、まだ怪我をした所に痛みは残っているし、動かす事もままならない。定期的に魔法医の治療を受ければ完治まで2ヶ月、自然治癒を待つならば6ヶ月という診断だった。それが昨日の話である。

「何もしてやれなかったな・・・すまない」

ザードは俯き気味に、トラキアに謝った。

「いいや・・・。十分だ。

本当に、ありがとう・・・」

ザードには傭兵時代に集めた金が、十二分とあった。金と力があれば、大概の事は何とかなるものだ。ザードはそう思っていたが、どうにもならない時もある事を身をもって知った。

「何もかも・・・失ってしまったな・・・」

トラキアは淡い溜息をつき、空を仰いだ。今の気分にそぐわない、雲ひとつ無い青空である。ザードはその横顔を見て、目を伏せる。

トラキアの目は、全てを諦めた者の目だった。生きる意味を見失い、カラッポになった人間のそれである。

「このまま生きていて・・・何の意味があるんだろうな・・・」

トラキアという言葉に危うい色が浮び始める。事実、トラキアは、自分の命を絶つことも考えていた。

ワッツは「俺達に分まで生きろ」などという遺言を残してくれたそうだが、随分勝手な事を言ってくれたものだ。人の気持ちを考えずに物を言うのが、ワッツの悪い癖だった。

トラキアの様子に、ザードは呆れたように首を振る。面倒くさい奴だ。そう思いながらも、ザードはトラキアという言葉に答える。

「何も無い事は無いだろう。大事な仕事を忘れてるぞ」

「・・・何を？」

「復讐」

穏やかでないその言葉に、虚ろだったトラキアの瞳に光が灯った。

ザードは頭を掻く。あまり人の心に立ち入るような事を言いたくはないのだが、今のトラキア



にこれだけは言うておきたかった。

「今はそれしか生きる意味が無いかもしれないけど・・・とりあえず生きていれば、そのうち嫌でもくっついて来るもんだ。

お前が生きる事の意味が、な」

「・・・そういうものか」

「ああ。少なくとも、俺はそうだったよ」

ザードは、トラキアをかつての自分の姿と重ねていた。

長い間一緒に戦場を共に渡り歩いてきた、軽薄けど誰よりも信頼できた男。

初めて自分の剣を捧げても構わないと思った、あまりにも優しすぎる少女。

ザードはそのふたりの仲間を同時に失い、たった1人で復讐の戦いを続けた。ザードはその時の気持ちを思い出していた。人の温もりを知ってしまった彼にとって、その世界はあまりにも色褪せていた。

そして、一人が当たり前だと思っていたのに、それが耐えられなくなっていた。

誰でもいいから、傍に居て欲しい。そう思うようになった。

それを思い出した時、ザードは自分でも意外と思える言葉を口にしていた。

「・・・俺と一緒に行くか？」

「え？」

予想外の言葉に、トラキアは間の抜けた声を漏らす。

「その体じゃまともに歩く事もでないだろ。暫くは組織から身を隠す必要もあるだろうし。

俺は情報屋に少しコネがあつてな、国によっては市民証を偽造できる。傷が癒えるまで、少し立ち止まってみるのもいいかもしれないぞ」

軽い口調で言うザードに、トラキアは戸惑っていた。

「何故だ？俺達はあるを殺そうとしたんだぞ」

「もう俺を狙う理由は無いんだろ？それに、お前くらい強い奴なら一緒に組むのも悪くない」

がちやり、と、ザードは腰に吊った剣に手をかける。そんなザードをトラキアは不思議そうに見つめ、ふと、緊張が解けたように笑った。

「そうだな・・・一人よりは楽しそうだな・・・」

トラキアはそう呟き、ザードに自分の右手を差し出した。

お節介だったであろうか。しかし、トラキアは何処か救われたような表情を浮かべていた。やはり、トラキアもかつてのザードと同じ事を感じていたのだろうか。ザードは差し出されたトラキアの手をとり、

「宜しくな。えっと、トラキアだったな」

「ああ」

「その名前も、もう使えねーな・・・市民証を偽造するまでに自分の新しい名前を考えておけよ」

「それは出来ない・・・」

「なんで？」

「アリシアとの繋がり、もう、この名にしか無い。この名は捨てたくない・・・」

「・・・そうかい。」

「じゃあ、トキでどうだ。ニックネームって奴だ」

トラキアは肩を竦めて笑った。好きにしてくれ、というニュアンスのようだ。

「宜しく頼む・・・ザード=ウォルサム」

「いや、俺の名前はエアニス=ブルーゲイルだ」

「え？」

「ザード=ウォルサムの名は、もう捨てたんだ。この名前で、色々やりすぎたからな。

今向っている国で使う新しい名前は、エアニスだ。トラキア・・・いや、トキにはもうその名前前で呼んでもらいたい」

「・・・分かった、エアニス」

ザードは足元の荷物を肩に掛け、トラキアに背を向ける。

「先に街を出てるよ。西の門で待ってる」

一緒に行こうと話していたばかりなのに、ザードはいきなり一人で行ってしまった。彼はトラキアに、一人の時間を与えたつもりだった。

仲間との別れの時間を。

トラキアは並んだ7つの墓標の前に膝をつき、その真ん中の墓標、今は偽の名が刻まれているアリシアの墓石に触れて、目を閉じた。

心を持たない兵器として育てられた自分達に、人としての感情を与えてくれたアリシア。この世界でたった一人の家族である自分を探し出してくれた。

ワッツをはじめとするマスカレイド部隊の仲間達。トラキアと全く同じ境遇に生まれ、数日前まで同じ道を歩んでいた。血は繋がっておらずとも、家族と呼べる仲間達だった。

トラキアの頬を涙が伝った。彼らの事を少しでも考えると、今まで泣いた事など無かった分、いくらでも涙が溢れてきた。トラキアは乱暴に涙を拭い、自分の胸を叩く。人としての感情を知っても、そのせいで心が弱くなってしまふでは駄目だ。これはきっと、トラキアが更に強くなる為に必要な感情なのだ。アリシアがトラキアを弱くする物を与える筈が無い。だから、この感情を乗り越えた時、自分は更に強くなれる。

そうだろ？ アリシア。

トキは彼女の墓標を撫でる。

「・・・全て終わったら、また来るよ。それまで、おやすみ」

トラキアは立ち上がり、荷物からコートを取り出す。

旧マスカレイド部隊の赤黒いロングコートを羽織い、トラキアは家族の眠る地を後にした。



その後、トラキアとザードは、ミルフリストという大きな街に流れ着いた。

ザードはエアニス=ブルーゲイルと名を変え、目立つ銀の髪を魔導で琥珀色に染めた。

トラキアは元々特徴の無い容姿を活かし、髪を切り眼鏡をかけるだけという簡単な変装と、言葉遣いを変える事で自分の正体を街の中へと隠した。

数ヶ月後、トラキアの怪我が完治し、戦いのカンを取り戻し始めていた頃、ザードはルゴワールに追われていた二人の少女を助けた。

その日からザードとトラキアの運命は再び動き出す事となるが、

それはまた別のお話である。

山沿いに広がるエルバーク・シティの日没は早い。

旧市街に立ち並ぶ朽ちた街並みが、不気味な輪郭を見せ始めた頃。トキを探すツヴァイ達、マスカレイド部隊の動きが慌しくなった。

「予備隊の集合に、弾薬の補充、全て終わりました。動ける者は15人です。戦えないほどの負傷兵は9人、全員このエリアから退避させています」

ツヴァイの元へ、一人の兵士が報告に来る。その兵士も、赤黒いマントを纏い、首元に白いデスマスクを下げています。

場所は旧市街に立ち並ぶ廃屋の一つ。元々倉庫か工場だったのか、かなりの広さがある。そこを拠点として、ツヴァイは部隊の指揮をとっていた。

「15人もいれば十分だ。"お姫様"の調子はどうだ？」

「稼働率は70%を維持。先ほどの再起動後はエラーも無く、安定しています。

現状からシミュレートしたターゲットの潜伏場所も、4候補に絞られています。現在、調査隊が・・・」

その時、報告をしていた兵士の通信機へ、話に上がった調査隊から連絡が入った。兵士は通信機越しに相手と短く言葉を交わし、口元を笑みの形に歪めた。

「調査隊がターゲットを発見したそうです。場所は第1候補の地下通信室、誤差は5以内だそうです」

ツヴァイも会心の笑みを浮かべる。

「今日はお姫さん、いつに無く調子がいいじゃないか。・・・やはり、"会いたがっている"のかもな」

ツヴァイは廃屋にあった古びたソファから立ち上がり、立て掛けていた身の丈程もある巨大なライフルを手取る。

数時間前、そのライフルに体を吹き飛ばされた筈のツヴァイだったが、何処にも怪我を負っているようには見えなかった。魔族の術によって生ける屍となったツヴァイは、不死身に近い体を持っている。剣を突き立てられようが腕をもがれようが、彼は死ぬことは無い。

朽ちない体に妄執を宿した男は、フードを被り、デスマスクを顔に当てて歩き出す。

「"アリシア"の稼働率を100%まで上げろ。全員で出るぞ」



トキ達が身を隠した地下通信室は沈黙に支配されていた。その沈黙をもたらしたのは、トキが語った彼の生い立ちと、唯一の家族との離別の話である。そしてトキは今、その唯一の家族を奪った仇、ツヴァイに追われている。

「・・・ミルフィストでの暮らしは、平和なものでしたよ。エアニスとは名前と髪の色を変えただけで、僕は髪を切って眼鏡をかけて、言葉遣いなどの物腰を変えただけで、誰にも気づかれず半

年近く過ごす事が出来ました。

マスカレードに居た時の仕事でスパイの真似事ををする事がありましてね。この言葉遣いは、その中の役作りの一つだったんです。最初のうちは演技だったのかもしれませんが・・・今となつては、こちらが僕の本当の顔です」

蛇足だとは思いつつも、トキは沈黙に耐えかねて後日談を継ぎ足した。

レイチェルは湿って腐った板敷きの床に視線を落としている。トキの座る位置からでは、その表情は見えない。

「トキさんがノキアさんの為にこの町に留まっているのは・・・アリシアさんの事があったから・・・だったんですね・・・」

予想外の方面から突っかれ、トキは鼻じろむ。

「・・・そうですね。少なからず、ノキアさんとアリシアの姿を、重ねていたのかもしれませんが」

いつもの薄い笑みを浮かべたまま、暗い天上を仰ぎ見るようにして言った。

この話で、レイチェルはトキが吐いた嘘に気づく事が出来た。

今日の朝、トキはノキアを助けるために街に残った理由を、自分の研究成果を試す為の人体実験が出来るからだ、と語った。それは全てが嘘ではなかったかもしれないが、トキがノキアを救おうとした本当の理由は、もっと優しいものであったようだ。

それは、自分の妹と同じ境遇の人間を、見捨てる事が出来なかったから。

「そして、私を助けてくれた理由は・・・」

私とすれば、あの男がきっと現れると思ったから・・・」

トキは目を伏せる。レイチェルにそのつもりは無くても、トキは責められている気分だった。レイチェルに隠し事をし、彼女を餌として利用していた事は事実だ。

「その通りです。今まで黙っていて、申し訳ありません。

ですが僕は、アリシアの仇をとる為なら、どんな手段でも使います。利用できるものは、全て使います。今の僕は、その為だけに生きていようなものですからね。

だから・・・もう一度言います。ツヴァイは、僕がこの手で倒します。レイチェルさんにも思う所はあるでしょうが、手出しはさせません」

レイチェルは言葉を失ったまま、ただトキを非難のこもった眼差しで睨む。トキは肩を竦める。

「なら、レイチェルさんはどうしたいんですか？

ツヴァイの心臓にナイフを突き立てたい？ それとも、簡単に殺さず、指先から五分刻みにでもしますか？」

「それは・・・っ！」

そのような言われ方をすると、言葉を返せなかった。レイチェルの目的は、そういうものではない。

ならば、レイチェルは何故ツヴァイを自らの手で倒そうとするのか。ツヴァイへの憎しみを消

し去る為か。父の、故郷の村人達の無念を晴らす為か。

どちらでもない。ツヴァイを倒しても、レイチェルの中の憎しみは消える事は無いであろうし、レイチェルの父や村人達が、敵討ちを望んでいるとも思えない。

それはレイチェルが今まで考え続け、未だに答えを出せていない事だった。ただ、そうでもしないと、自分の気が収まらないという理由だけで今まで旅をしてきた。今の所、動機はそれだけだ。

レイチェルは唇を噛んでトキから顔を背ける。

「・・・それでいいんです。

亡くなった方達への責任感や、消える事の無い憎しみの為に、自分の手を汚す事はありません。

それに、こんな言い方はずるいのでしょうか・・・僕はレイチェルさんのような優しい人が、そんな目をしている所を見たくないんですよ」

最後の言葉は、普段なら茶化すような言い方をするトキだが、今日は違った。目を伏せて、辛そうに言った。その表情が意外で、どう答えてよいか分からなかったレイチェルは、トキの言葉の後半には触れずに反論する。

「じゃあ、トキさんは、違うんですか？ 意味の無い責任感や、消えない私怨の為に、あの男を倒そうとしているんじゃないんですか？」

「少なからず、そういった思いもありますけど・・・どう言うべきでしょうかね・・・。

そう、昔の自分を終わらせる為、とでも言いましょうか」

レイチェルは眉をひそめる。トキの言葉の意味が、分からない。

「こんな事を言っても、信じて貰えないと思っているので、誰にも・・・エアニスにも話した事は無いのですが・・・」

トキは笑って、大きく溜息を吐いた。何かを諦めたといった表情だった。

「僕の真面目臭い言葉遣いは、あの日から身を隠すための変装として演じていたものですが、今となっては別に演じているつもりも、自分を偽っているつもりもありません。物腰は変わっても、僕は僕です。ま、仮面にツラの皮だけ乗っ取られたようなものですね」

そう言って笑った。それは、レイチェルも分かっている。トキの昔の話を聞く限り、昔のトキと今のトキは、別人のようにその振る舞いが違う。しかし、その本質は何も変わってはいないのだろう。レイチェルは、これまでトキと一緒に旅をして、トキの穏やかな物腰とは裏腹な部分を、何度か垣間見ている。ノキアを救い出した時の一件が、その最たるものだ。

トキは少しだけ言葉を切ってから、話を続ける。

「ですが、こう考えてしまう事もあるんです。

今の僕は、全てを失った現実から逃げる為に作られた、もう一つの人格なんじゃないか、と」

二重人格。

レイチェルはすぐにその言葉を連想した。その考えを読んだかのように、トキは首を横に振って話を続ける。

「別に、二重人格みたいな大層なモノではありませんが・・・

時々、夢の中で昔の僕が言うんですよ。『ツヴァイを殺せ、いつまで逃げ回るつもりだ』ってね。

だから、僕の中に居る、昔の僕を終わらせる為にも・・・また、今の僕がこの先に進む為にも、あの日の清算は自分の手でしなくてはならないんです」

それ以上話す事は無いと言うように、トキの言葉はここで途絶える。暗い地下室を再び沈黙が支配した。

「・・・この話は終わりにしましょう。別に、レイチェルさんに復讐を止めるように説得している訳ではありません。その資格もありません。

ただ、僕とツヴァイの事を知って貰いたかっただけです。それと、今までこの事を黙っていた事を、謝りたかった。

一年半前のあの日、僕がツヴァイの謀略を退けていたら、レイチェルさんも故郷を失う事は無かったのかも・・・」

「それは・・・どうでしょうか」

レイチェルがトキの言葉を遮る。

「もし、一年半前、トキさんがツヴァイを倒し、そのままルゴワールに留まっていたら・・・ひょっとしたら、私の村を襲う任務は、あの男じゃなく、トキさんが受けていたかもしれません」

トキは言葉を詰まらせる。

十分、あり得る話だった。

「もしそうなら、私はツヴァイではなく、トキさんを皆の仇として追っていたかもしれません」

あり得たかもしれない違う結末の未来を、トキは想像してみる。

「僕が、ルゴワールから追われる事無く、マスカレイドの仲間やアリシアを失っていなかったら・・・あり得たかもしれませんね。

逆に考えると、それらを失ったから、僕はエアニスやレイチェルさん、チャイムさんと出会えた事になりますか。

今という時間に"もしも"なんてありませんが・・・さて、どれが誰にとっても幸せな未来だったんでしょうね」

トキは笑い、そして、大きく、大きく溜息を吐いた。

「手を出すつもりなら、覚悟をしておいて下さい。

ツヴァイは、強いだけではなく、僕が知る上で最も汚い下衆野郎です。後味の悪い戦になる事は保障しますよ」

レイチェルは、真剣な眼差しで頷く。

結局、折れたのはトキの方だった。

正直。ツヴァイとの戦いに水を差されたくないというのは口実で、トキの本心は、これ以上薄汚

い戦にレイチェルを巻き込みたくないという所にあった。しかし、レイチェルはのんびりしているように見えて、実は頑固な性格だという事は、今まで一緒に旅をして来て良く分かっていた事だ。

それに、これだけ言ったのだ。レイチェルの性格上、トキを出し抜いてツヴァイに戦を挑むような真似もしないだう。

トキは、レイチェルと共に、ツヴァイに、マスカレイド部隊に挑むことにした。



トキが時計を見る。

日没までもう少しだった。

「少し、いいですか・・・？」

トキとレイチェルの話が終わるまで待っていたのだろう。カインは、ふたりの込み入った話が始まったあたりで、声が届かない程の距離を開けて座っていた。話が終わったのを見計らい、カインは二人に近づく。その顔色を見て、トキは僅かに驚く。

「・・・どうしました？ 酷い顔色ですよ？」

「先ほどの・・・1年半前の話の中で、聞いておきたい事があります」

カインは、言い出しにくそうにしていたが、意を決したかのように話を切り出した。

「あなたの・・・双子の妹の名前は、アリシア=スティンブルクで・・・間違いないのですね？」

トキは眉を寄せる。カインは、自分とアリシアが兄妹だという事を知らなかったのだろうか。いや、今のマスカレイドメンバー達には創設メンバーである自分達の事など伝えられていないのかもしれない。必然的に、組織内の内紛という不名誉に行き着く話だ。情報統制が敷かれ、伏せられていても不思議ではない。

「ええ、アリシアには通り名も偽名もありません。僕の知る限り、組織内で同一の名前の者も居ない筈です」

カインは目を閉じ、眉間にしわを寄せる。どう話すべきか、そもそも、話すべき事なのか、迷っていた。

「これは・・・私の思い過ごし・・・いや、想像でしかないのですが・・・」

ドドン・・・

遠くで地鳴りがした。その地鳴りに続くように、細かな振動が暫く続き、トキ達が身を隠す地下室の石壁を軋ませた。爆薬などで地下道の何処かが崩されたのだろう。空気の流れが変わったのを感じた。

「先手を打たれましたか。カインさん、今の話は、後からでも大丈夫ですか？」

「・・・ええ」

カインはその言葉を最後に表情を切り替え、立てかけていたライフルを背負う。そして通信機の脇にオマケのように備え付けられた伝声管の口を順に空けてゆく。伝声管から伝わるのは風の



音と、遠くで聞こえる人間の足音。電源が死んでいる通信室で、唯一この地下道の状態を把握できる設備だった。

「3つある全ての退路から同時に敵が来ています。これは・・・この地下道の構造を把握していないと出来ない事ですね・・・」

もうここに身を隠すメリットはありません。少し早いですが、地上に出ましょう」

カインは通信室の端にある木箱に上り、天井からハシゴを引き出した。

「ここを登ると、民家の倉庫に出ます」

「抜かり無いですね・・・この町の人々は・・・」

関心しながら、トキはハシゴを登る。次にカイン、レイチェルの順に続く。ハシゴは長く、2階建ての建物ほどの高さを登り地上に出る。

ハシゴの出口はカインの言う通り、何処かの民家の倉庫に繋がっていた。大戦中は、普通の民家を装いつつも防衛の重要な拠点として扱われていたのだろう。倉庫に散らばる埃を被った木箱は、殆ど銃器を仕舞う為のものだった。

「行きましょう。隊長の・・・ツヴァイの居る場所には見当が付きます」

カインは二人を先導するように歩き、民家の裏口から路地裏に出るために移動を始める。

ドカン！

と、カインの目の前のドアが砕け散った。飛び散った散弾と木屑はカインに降り注ぐも、アダマタイトのマスクとフードを着込んでいた為、ダメージは無かった。

同時に、三人のマスカレイド達が民家の中へ踏み込んできた。正面玄関から入り、廊下の脇の通路に身を隠し散発的に銃弾を撃ち込んでくる。

「この脱出口も把握されていたみたいですねっ！」

トキは身を乗り出して廊下の先の刺客にライフルを撃ち込む。銃弾は派手に壁を打ち抜き、その向こうにいた刺客を打ち倒した。しかし刺客はすぐに立ち上がり、さらに奥の壁に身を隠す。

「ここで足止めを食らうわけにはいきません、この先の裏口まで走って下さい！」

「え、でも！！」

裏路地への扉へ行き着くには、この銃弾が行き交う廊下を通らなければならない。チャイムが顔を引きつらせていると、トキが自分のコートを、アダマタイトの防弾服をレイチェルに羽織らせた。

「少しの辛抱ですよ」

「え、でも、トキさんは！？」

「行きますよ！！」

カインは掛け声とともに廊下に飛び出した。その場に立ち止まり、正面玄関の周りにいる刺客へマシンガンの掃射を始める。その背に隠れるように、トキがコートを羽織ったレイチェルの手を引いて駆け出した。カインを盾にし、直線的な廊下を二人は駆け抜ける。



短い距離を走りきり、トキは裏路地への扉を蹴破ろうと身構えた時。

その扉から、さらに二人の刺客が姿を現した。もちろんその姿は赤黒いマントと、白いデスマスク。そしてその手には、アダマンタイトの防弾服をも打ち抜く対戦車ライフル。その銃口が、トキに向けられる。

「くっ！」

トキは銃口から身を隠すでもなく、むしろ一足飛びで刺客の懐に飛び込むと、その太い銃身を驚づかみにした。

ズドン！

対戦車ライフルの銃口が火を噴く。熱を持った銃身がトキの手のひらを焼いたが、その銃口は彼に捻り上げられ、天井に大きな穴を穿つのみだった。刺客はあまりにも大胆なトキの行動に驚き、隙を見せる。その手元をトキに蹴り飛ばされ、掴んでいたライフルは二人の前で180度回転、銃口は刺客自身に向けられる。

ドォン！

トキはためらう事無く自分の手元にやって来た引き金を引いて、目の前の刺客の腹を撃ち抜いた。アダマンタイトの防弾服を突き破り、金属繊維と血飛沫が舞う。もう一人の刺客は、トキ

に距離を詰められた瞬間、迷う事無く退いていた。その姿はもう見えない。

「その階段を上！！」

その身を盾にトキとレイチェルを敵の銃弾から守っていたカインが叫ぶ。トキのすぐ横には地下と2階へ続く階段があった。二人はその階段を駆け上る。カインも玄関の刺客を牽制しながら身を引き、階段までやって来た。

「裏路地にも敵が居ます。一人逃がしてしまったので、外に出たら挟み撃ちですよ！」

ズドオオンッ！！

建物が大きく揺れ、階段の下から爆風が吹き抜けた。耳の奥を膨らんだ空気が圧迫し、吹き飛んだ木屑や小石が体を叩く。爆発力を抑えた手榴弾が炸裂したのだ。煉瓦と木材で作られた廃屋が傾き、ギゴゴゴと悲鳴を上げる。建物が崩れると思い、レイチェルはそれが何の意味も無い事だとは思いつつも、手近な柱にしがみついた。天井から降り注ぐ土くれと、建物の揺れが収まってから、三人は埃まみれの顔を上げる。

「ぶはっ！まるで戦争ですね・・・昔を思い出しますよ」

建物の下からは刺客たちの足音と、牽制の為の発砲が散発的に続く。

その時、レイチェルは急にこの場に居る事が怖くなった。トキが毒づいたように、まさにこの場は戦場だった。そして、これと良く似た空気を、かつてレイチェルは感じた事がある。

あの日、故郷の村がマスカレイド部隊に襲われた時だ。

カインは階段の上から下階に向かって、敵から奪ったグレネード弾を無造作に撃ち込む。それは硫酸弾だった。当たればマントに染み込み、酸が皮膚を焼く。対衝、耐熱、に関しては右に出るものの無いアダマタイトの防弾服だが、酸への耐性はいまひとつなのだ。これはアダマタイトの問題ではなく、マントの構造による問題だ。液体を通す程度の間隙まで埋めてしまっただけでは動き易さに支障が出るため、そこまでの対策は施されていないのだ。グレネード弾の中身に気付き、刺客達は追撃を躊躇する。

「まだ退路はあります！2階から隣の家に飛び移りましょう。屋根伝いに上手く逃げられるように、このあたりの家は建てられています！！下の連中の足を止めますから、先に行っていて下さい！！」

「どの家も凄い傷んでますが、屋根抜けないですかね？踏み抜いて落ちても笑わないで下さいよ！」

トキの軽口に笑いかけるとカインは階段の踊り場まで戻り、下階の刺客に銃弾の雨を降らせる。

カインに言われた通り、廊下の先にある窓に向かいトキはレイチェルの手を引く。が、不意にレイチェルの足が止まる。彼女の身は恐怖で竦みあがり、動けなくなっていた。

「レイチェルさん！」

トキはレイチェルの表情でそれを悟ると、彼女の肩を掴み、その名を呼んだ。トキの顔にはさっき撃ち殺した刺客の返り血が散っている。レイチェルは、トキの声にすら恐怖を覚え、その目を、耳を塞ぐ。

「ここまで来て、目を閉じるんですか！？」

その程度の覚悟で、ここまで来た訳じゃないでしょう！！」

トキの一喝にレイチェルは目を開く。

これでは村を襲われたあの日と変わらないではないか。いや、むしろ恐怖を覚えてしまった今、きっと自分はその日の自分より、弱い。

ついさっきまで、村の皆の仇はこの手で討つと息巻いていた自分が情けなくなった。

(そうだ、トキさんが言う通り、私の覚悟はこんなものじゃない！)

全身を縛る、恐怖という鎖を引き千切るように、レイチェルは顔を上げる。

その視線の先、トキの肩の向こうに、窓の外で銃を構えた刺客が居た。上の階からロープで降りてきたのだろう。彼女がそれに気付いた瞬間、二人にマシンガンの銃弾が降り注ぐ。

「トキさん！！」

トキはレイチェルに自分のアダマンタイトのマントを羽織らせており、銃撃に対し無防備な状態だった。レイチェルはトキの腕を引いてその場に押し倒すと、マントを羽織った自分の身を盾に、彼に覆い被さる様にして伏せた。レイチェルの背中に何発もの銃弾が打ち込まれる。マントをしっかりと着込んでいなかったせいか防弾マント越しに伝わる銃弾の衝撃は思ったより強く、レイチェルは息を詰まらせた。刺客の一人が慌てた様子で仲間の目の前に左手を差し出し、発砲をやめるように促した。今撃っている相手が捕縛命令の出ている少女だと気づいたのだ。

トキは銃弾の雨が止んだ隙を突き、レイチェルの頭を庇いながらライフルを突き出して窓の向こうの刺客を撃った。弾丸は狙い違わず刺客のぶら下がるロープを打ち抜き、刺客は裏路地の瓦礫の山へと落下した。銃を構えるトキの無事を確認し、レイチェルは深く安堵の息をつく。すると、自分が押し掛かっているトキに肩を強く掴まれた。

「なんて無茶をするんだ！」

トキが普段の様子からは想像も出来ないような声で、レイチェルに言った。驚き、ぽかんとするレイチェルを見て、彼はハッとしたように口元に手を当てる。

「いや、すみません・・・助けてもらっておいて、この言い草はありませんよね」

トキは俯くようにしてレイチェルに頭を下げる。そして、苦笑するように、

「全く、こういう時の覚悟は人一倍なんですから・・・見ていただけません」

「ご、ごめんなさい、余計な事でしたよね・・・」

そう言って、レイチェルは覆いかぶさっていたままのトキの胸元に、こつんと額をぶつける。頭を下げて謝ったつもりだった。その時彼の胸から感じた鼓動は、早鐘のように打ち鳴らされていた。やはり、心配させてしまったのだろうか。

しゅんとしてしまうレイチェルにトキは手を振る。

「いいえ、今のは助かりました。

僕のほうこそ、謝ります。先程の、『その程度の覚悟で・・・』とは、失言でした」

「・・・そ・・・そうですよ！ さっきは別に怖かった訳じゃなくて、ちょっと立ち眩みしただけだったんですから！！ もう大丈夫ですっ！！！」

レイチェルはピースサインと共に、勇ましい口調でうそぶく。嘘だったが、もう大丈夫という

言葉は嘘ではなかった。恐怖で身が竦み、動けなくなっていたのが嘘のように今は体が軽い。トキと話しているうちに緊張が無くなったか。あるいは、銃弾に自ら身を晒した事で頭のネジが飛んでしまったのか。

珍しくおどけて見せるレイチェルに、トキは笑いかける。その笑顔を見て、レイチェルも微笑んだ。

「人が必死で敵の足止めしてるのに何イチャついてるんですか！！！」

必死の形相のカインが二人の元に追いついた。

彼にはレイチェルが半身を起こして座るトキに、しなだれかかる様に顔を寄せ、語り合っている様に見えたのだ。その構図に気づいたトキとレイチェルは慌てて飛び退く。

三人は隣の建物の屋根に飛び移り、刺客を振り切る為走る。その間、トキとレイチェルは、必死にカインの誤解を解くため、あの場で起こった事を刺客の相手そっちのけで説明し続けた。



トキ達は、カインの案内でツヴァイ達が拠点としている倉庫へ移動をしていた。しかし、マスカレイド達の散発的な攻撃に遭い、目的の場所になかなか近付けないでいた。

刺客の追撃を逃れ、3人は路地の影に隠れる。そこで突然、トキの体が傾き、レイチェルの肩にぶつかった。

「トキさん!？」

「・・・おっと、失礼」

トキはふらりとした足取りで身を起こし、背中を壁に預けた。その顔色は青白く、額には汗が滲んでいる。

「右腕の出血のせいですね・・・」

カインが追っ手を牽制しながらほぞを噛む。

トキは地下道に落とされた時、右腕を瓦礫に挟まれ、使い物にならなくしていた。今は添え木をし、首から下げた三角巾で腕を胸元で吊っている状態だ。一度は止まった出血だが、走り回っているうちに再び傷口から血が滲み始めていた。

「まずいですね・・・さっさと決着を付けてしまうつもりでしたが・・・思い通りに行かないものです」

レイチェルは自分のスカートの裾を破り、それをトキの脇に硬く縛り付けた。しかし、既に同じ様な止血処置を行っているので、それは気休めにしかないだろう。

「それにしても・・・連中の動き、格段に良くなりましたね」

トキの呟きに、レイチェルはハッと顔を上げた。

「私もそう感じました！ さっきから、まるでこちらの動きが全て読まれているような感じで・・・」

トキもレイチェルも、再開されたマスカレイドの攻撃をそう評した。昼間のマスカレイド部隊も攻撃的で脅威だったが、その人数はトキ一人や、この三人を相手にするには多過ぎ、戦力の無

駄があった。しかし、今は部隊を分断することで戦力の無駄を無くし、相手を倒す事以上に、追い詰める事を目的とした戦い方になっている。

カインも、トキやレイチェルと同じ感想を抱いていた。そして、トキとレイチェルは知らない、この変化の原因について彼は予想が出来ていた。

恐らく、ツヴァイは"あれ"を使っている。

カインはその予想をトキに告げるべきか、迷っていた。徐々に膨らむ焦りの感情を押し殺し、カインは空になったライフルに弾丸を装てんする。

その時、トキが何気なく、緊張感の無い声で言った。

「ツヴァイも随分と冷静な作戦を立てられるようになったじゃないですか・・・まるで、」

そこで一度黙り込むと、感情のこもらない声色で、こう続けた。

「まるで、アリシアが指揮しているようですよ」

「・・・！！」

その言葉に、カインの表情が凍りつく。ライフルに込めようとしていた弾丸が零れ落ち、石畳の上でカチン、カチン、と冷たい音を鳴らす。

カインは、トキの言葉に異常なまでの反応を見せていた。

「どうされました？」

眉を寄せるトキに、カインは青い顔を向ける。

「あなたは・・・この布陣が・・・あなたの妹、アリシアさんが考えたものに、似ていると感じるのですか？」

カインは落とした弾を拾おうともせず、一言一言言葉を選ぶように質問する。

「あくまでも何となく、ですが・・・似ていると思います。」

本当の危険を見極め、それでいてギリギリの所まで自信を持って踏み込んでくる。自分の仲間の事を第一に考えた戦い方が、ね」

トキの回答に、カインは黙り込む。追っ手の攻撃など眼中に無いといった様子だ。

「先ほど、地下道を出る直前に私が言いかけた事ですが・・・やはり、今のうちに言話しておこうと思います・・・」

「今ですか？ とりあえずココを切り抜けてからじゃ駄目ですか？」

攻撃の手を止めてしまったカインの代わりに、トキが追っ手の潜む路地に銃弾を撃ち込み、牽制する。失血の為か力が入らず、ライフルの標準が定まらない。トキは柄にも無く舌打ちをした。

そんなトキに構わず、カインは話を始める。

「半年前から、マスカレード部隊に人工知能技術を応用した"仮想戦術号令機"という兵器が導入され、現在テスト運用をしている所です」

「人工知能？ アレですか、人間の思考を再現する魔導式の・・・？」

「人工知能の殆どが魔導式の機械ですが、仮想戦術号令機は違います。」

人工知能についてはご存知ですか？」

「魔導式で人間の思考を模倣する、アレですよ。ですが、今の技術では単純な思考しか再現できない為、子供のオモチャや単純作業を繰り返す機械に組み込まれる程度のモノと聞いていますが」

「その使い物にならない単純な思考を、戦術という高度な計算が出来るレベルまで引き上げる方法が見つかったんです」

「どんなです？」

トキは何処か、カインの話を聞き流している節がある。あまり興味の沸く話ではなかったのだ。それより目前の敵の足止めが重要だった。

「人工知能のエンジンとなっていた核の部分を、従来の魔導式ではなく、人間の脳に置き換えたのです」

カインの話に対して、トキはようやく興味を持つ。レイチェルと共に、その表情は険悪な物へと変わった。

「悪趣味・・・」

嫌悪の色を帯びた声で、レイチェルが呟く。

「一番のネックだった、知能というエンジン部分を作る必要が無くなったのです。あとは、それを操作するためのインターフェースさえあればいい。その技術は、魔導式の人工知能を操作するものから、簡単に転用が出来たそうです。

これをもはや、人工知能と呼んでいいか微妙な所ですが、私が気にしているのは、マスカレイド部隊が使っている仮想戦術号令機のシステムネームです」

「勿体ぶりますね。何なんですか？」

カインは、なるべく、何も感じていないような口調で告げる。

「"アリシア"、です」

トキの引き金を引く指が止まった。

「従来の魔導式を核とした人工知能は、その思考のコピー元となった人間の名前を取る事が多いのです」

トキの耳から、カインの言葉以外の音が消える。耳元で弾けた銃弾の音でさえ、その耳には届かない。

「・・・これは、僕の考え過ぎなのかも知れませんが、

この場合、もしかしたら、"アリシア"の核となっているものは・・・」

カインの言わんとしている事を理解し、トキの全身が総毛立つ。

その兵器には

あの日、セトの共同墓地へ埋葬した

アリシアの脳が、使われているかもしれない。

突如、3人の後ろの廃屋に巨大な大穴が開き、さらに隣の廃屋が爆発するように崩落した。途端に砂埃に包まれる視界。

「っ、！ 砲撃！？」

まさに戦車砲を打ち込まれたような爆発だった。カインとレイチェルは、身を伏せて荒れ狂う爆風と細かな瓦礫から身を守る。しかし、トキはそんな爆発など無かったかのように、その場で立ち尽くしていた。煉瓦の欠片が額当たり、頬を血が伝う。

ふと、トキが横を向く。続いて、その方角から聞き覚えのある声が響いた。

「トラキア！！」

ツヴァイの声だった。名を呼ばれたトキは、声の聞こえた方に向かい、無造作に歩み出す。確信でもあったのか、その様子に銃撃を警戒する様子は無い。レイチェルとカインが止める暇も無く、トキは大通りの真ん中に身を晒した。

「・・・ツヴァイ・・・！」

身の丈程もある巨大なライフルを携え、ツヴァイが旧市街の中央広場に立っていた。



しゃがみながら壁に背を預けたエアニスは、懐から煙草を取り出し火を点ける。煙を大きく吸い込み、気だるげに吐き出した。ずるずると壁に当てた背がずり下がり、座っているのか寝ているのか良く分からない、なだらしのない姿勢で落ち着いた。

「あゝ・・・これからどーするかなー・・・」

「こんな所でだらけてる暇なんかないでしょうが！！」

放っておくと眠ってしまいそうなエアニスを、チャイムが襟首掴んで乱暴に引き起こした。

「だってよ・・・」

エアニスは煙草の入っていた空箱を無造作に放り投げた。煙草の箱は一度地面を跳ねて転がると突然はぜ割れた。それを見たチャイムが息を呑む。

一拍遅れて、タン、と銃声が響く。

「お見事。これだけ暗くなっても一発で当ててきやがったな」

エアニスとチャイムは、旧市街の狭い路地裏に居た。

ノキアの店で旧市街での爆発を目にし、すぐにこの場へ駆けつけた二人だったが、借り物のバイクで旧市街を走っている途中、突然遠距離から狙撃を受けた。慌てて二人は銃弾の届かない路地裏に駆け込んだものの、そのまま動けなくなってしまったのだ。

狙撃手は恐らく二人。この路地裏から出て行けば撃たれる。エアニスの武器は、マスカレイドの防弾服すらも切り裂く魔法剣オブスキュアと、小ぶりの拳銃。チャイムは刃を潰した剣とも呼べない剣、ボーンクラッシャーのみで、今の二人には狙撃手と戦えるだけの武器も防具も無い。銃弾を斬り飛ばす事も出来るエアニスだったが、流石に夜闇から飛来する銃弾を見切る事は不可能だ。相手の銃口と、視線が見えていてこそ出来る技だった。

「俺達がこのこのこ出て行けば狙撃手に撃たれて終了。奴らが俺達を仕留めに近づいて来たら、俺が斬り倒す。今は動いた方の負けだ」

「でも、トキとレイチェルが消えてから、もう随分経つよ・・・。旧市街で起こってた爆発や銃声も今じゃ全く聞こえないし・・・。二人が無事か心配だわ・・・」

「トキとレイチェルだぞ？」

手加減を知らない世間知らずの天然ボケが二人だぞ？

最強じゃねーか」

「・・・うん、まあ、そうかもね・・・」

全く心配していないように笑ったエアニスの言い草を、チャイムは微妙な表情で肯定する。もちろん、エアニスも本当に心配していない訳ではないのだろうが。

「それに、あまりこの件には関わるべきじゃ無いかもしれんしな。

・・・多分これは、トキの"しがらみ"だ。あいつがカタをつけるべき事なんだろうよ」

「なによ、ソレ。どういう事？」

「俺の口からは言えないよ。片付いた後にトキに直接聞け」

肩を竦めて答えるエアニスを、チャイムは不満そうに睨んだ。エアニスは短くなってしまった煙草を摘み、最後の一口の煙を吐き出す。

「まあ、ここに張り付いてるのもそろそろ飽きて来た事は確かだ。それに・・・」

「・・・それに？」

「・・・煙草、これが最後の一本だからな」

ガクリと膝を折って脱力するチャイム。本当にこの男はふざけてばかりで、図太い。すこしはその度胸を分けて貰いたいと思うチャイムだが、エアニスのようにはなりたくないという思いもある。頭のネジと一緒に命まで落としたくは無い。

エアニスは火の点いた吸殻を放り投げる。吸殻は空中で弧を描き、ぽとりと地面に落ちた。薄暗い闇夜の中、赤い光が目印のように地面で燃えていた。

「撃ってこないな・・・」

エアニスは眉を寄せる。

今までは、エアニス達が路地から出ようとする度、またはゴミや煙草の箱をフェイクのつもりで放り投げる度、狙撃手は自分の存在を示すかのように正確に銃弾を送り込んできた。

エアニスは路地裏に転がっていた木箱を持ち上げ、通りに放り投げた。腐りかけた木箱は石畳に落ちると派手に壊れてバラバラと散らばる。銃弾は飛んでこない。

試しにエアニスは路地裏からローブの裾や長い髪をチラつかせてみたり、調子に乗って手や足を出したりする。やはり、銃弾は飛んでこない。

「・・・」

「・・・」

エアニスは、行っちゃう？みたいな顔でチャイムを見る。

「いやいやいや！！ゼツタイ罨だって！！調子に乗って表に出て行った所をズドンって奴よ！！！」

「でも、さっきから敵の視線を感じなくなったような気も・・・あ、いや駄目だ。遠すぎて分かんね・・・」

「ちょっと見てくる」

「だめ——！！！」

路地裏でエアニスとチャイムが押し合いへし合いを始めると、突然視界の端で光が弾けた。そして、一瞬遅れて夜闇を引き裂くような爆音が二人の耳を劈いた。

「爆発！？」

「おお・・・ようやく第二ラウンドか。早く行かないとまた見逃しちゃうぞ」

「ええっ！！行くの！？ホントに大丈夫なのココ出ても！？」

「そんなもん、分かるワケないだろう」

「だ、だよね！！うええええ——・・・」

結局、チャイムの心の準備が出来るまで、それからもう暫くの時間を要した。



広場で対峙するトキとツヴァイは、互いに銃を向け合っていた。

トキの銃は大口径の拳銃。ツヴァイは肩から吊った大型のライフル。互いにアダマンタイトのマントを着ていたが、フードと仮面は外し、素顔を晒していた。

互いに、相手の頭を打ち抜ける距離だ。しかし、二人にはその気が無かった。言いたい事や聞きたい事があるからだ。

「随分と優秀な軍師を雇ったそうですね、ツヴァイ」

トキの問いかけに、ツヴァイはその後ろに控える裏切り者の顔を見た。

「カインから聞いたのか？」

全く、余計な事をしてくれたな。痛かったぞ、塔での一撃は」

レイチェルと共に瓦礫に身を隠していたカインは、額に冷や汗を浮かべている。数時間前まで自分の上官だった男を前にし、組織を裏切ったという事実が、より深い現実味を伴いカインの心に染みてゆく。しかしツヴァイはカインの事など眼中に無いといった様子でトキに向き直った。

「兵士の全員が一つの思考へ接続する事によって、軍隊が一つの生き物へと変わる・・・。

分かるか？ 一人が見たものは全員が見た事になり、全員が一つの思考の元に動く。

俺達がUナンバーと呼ばれていた頃から求められていた究極の形が、今の我々の姿だ」

兵士が完璧なまでの連携と意思疎通を行う事で、郡は個となって敵を殲滅する。まるで一つの巨大な生き物のように。それは、トキがルゴワールの兵士だった頃からの戦い方だった。かつては部隊内で決められていたルールやサイン、そして互いの信頼と繰り返された訓練によって成立させていた連携を、ツヴァイは魔導と科学技術で容易に成立させたのだ。

「そして、その思考となるものが・・・お前がカインから聞いた通り、アリシアだ」

ツヴァイは、トキの心を揺さぶるつもりか、焦らす様に話を進める。その効果は覷面のようで、トキの心には既に余裕が無い。

「アリシアは・・・生きていますか？」

ありもしない望みにすぎる様に、トキがそう問いかけると、ツヴァイは声を上げて笑った。

「お前は、アリシアの死を看取ったんだろう！？」

ここにあるのは、墓の下にあった科学者の死体から取り出した脳だけだ」

銃を持ったトキの左腕が震える。すぐさまトキを取り囲むマスカレイド兵達が、対戦車ライフルを構えた。

憎悪。

トキの顔には、レイチェルもツヴァイも見ただことの無い激しい憎悪の表情が浮かぶ。しかし、その影は一瞬で消える。

「相変わらずですね」

トキの声は冷め切っていた。表情は乏しかったが、相手を見下し嘲る様な色を帯びていた。それがツヴァイの癢に障る。

「自分じゃ大した事が出来ないくせに、他人の力を利用するのが本当に上手い。全く、上手に立ち回っていますよ」

ツヴァイの目がすう、と細くなり、トキを見据えた。トキは更に言葉を続ける。

「アリシアを裏切り、マスカレイドを自分のものとしたにも関わらず、結局アリシアの力に頼っているんですからね。出来損ないのマスカレイドを率いて、アリシアの言いなりに兵士を動かして・・・ツヴァイ、あなたはこんな事が楽しいのですか？」

「楽しいさ、下らない家族ごっこよりはな」

「・・・家族ごっこなんかじゃない。俺達は、家族だった」

ツヴァイの軽口にトキは反射的に言い返していた。普段の口調を忘れ、一人称を"俺"と口走ってしまう程度に、トキはこの瞬間冷静さを欠いた。ツヴァイはトキの言葉に驚き、トキ自身も自分の吐いた言葉に驚いていた。二人の間に沈黙が落ちる。

「・・・もういい」

興が冷めたといった様子でツヴァイは呟くと、おもむろにアダマンタイトのコートを脱ぎ捨てた。マントの下のツヴァイの体は作り物のように歪だった。胴体の三分の一が抉られた異様なシルエット。エルカカの村で受けた空間転移の傷だろう。人間が生きていられる体ではなかった。

レイチェルから聞いていた話は本当の様だった。ツヴァイも、魔族の手によって生ける屍と化していた。ツヴァイは抉られ極端に細くなってしまった腰から大振りのナイフを抜く。

「サシで勝負だ。互いに得意のエモノなら文句は無いだろう？ 持っているな？」

トキもツヴァイと同じように、アダマンタイトのコートを脱ぎ捨て、腰の後ろに挿していた黒塗りのナイフを抜く。

「どちらかといえば、僕はナイフより銃の方が得意なんですけどね。それに銃を持たせた部下に取り囲ませておいて、よくもまあそんな正々堂々と勝負だみたいな事が言えますね」

「心配するな。お前との勝負がつくまで、部下に手出しはさせない」

「自分が不利になったら、部下に僕を撃たせるつもりでしょう？」

「俺にそのつもりは無いが、部下が勝手にやってしまったら許せよ」

「ああ、でも、あなた人望なさそうですからその心配は無用かもしれませんね」

どの道、トキに勝負を拒否するという選択肢は無い。勝負を拒めば、自分達を取り囲むマスカレイド兵達の一斉射撃が始まる。そうなった場合、自分とはもかく、やや後ろで事の成り行きを見守っているレイチェルとカインがこの場を切り抜けられるかどうか分からない。仕方が無いといった顔で、自分のナイフを弄びながら、トラキアは無造作にツヴァイとの間合いを詰め始める。

互いの間合いが触れ合う直前、トキが再び口を開いた。思わずこぼれた、本音。そして、加速的に膨らむ憎悪。

「この機会を与えてくれた事に感謝します。

正直、貴方の事は、銃など使わず、この手で！ ナイフを使って！！ 殺してやりたいと思っていましたッ！！！」

トキの豹変に歓喜の笑み浮かべるツヴァイ。

「俺もだ！！」

二人のナイフが火花を散らして噛み合った。互いに刃を振り抜く事を許さず、その動きが止まる。二人の足はその場で止まるが、噛み合ったナイフが小刻みに震えながら、互いの上体を押し合う。今、トキがマスカレイド達に銃で狙われたら身をかかわず術は無いが、ツヴァイの言葉に嘘は無かったようでその心配は無さそうだった。

ナイフの鏢迫り合いで力負けしたのはトキの方だった。片腕が使えないうえ、力勝負では勝てないと悟ったトキは自ら身をひねる様にして後ろへ飛び、ツヴァイのナイフから逃れる。しかし身を引く瞬間にツヴァイのナイフが左肩を裂いていった。執拗にトキの懐に潜り込もうとするツヴァイに、トキは体を捻った反動を利用して、ツヴァイの鳩尾に踵を叩き込む。肺から殆どの空気を押し出され、体の軸を狂わせながらも、ツヴァイはトキから離れようとしめない。互いのナイフはいつでも届く距離。反射的にトキはナイフを突き出す。

トキのナイフがツヴァイの胸を突いた。まるで、土に刃を突き立てたような感触がトキの手に伝わる。それは、人間を刺した時の手応えではなかった。

目の前で、ツヴァイが笑っていた。

トキの右即頭部に硬い衝撃が走る。一瞬ナイフの柄で殴られたのかと思ったが、そんな生易しいものではなかった。ツヴァイのナイフはトキの即頭部を切り裂き、刃が頭蓋を引っ掻いていったのだ。

「うあっ！！！」

思わず頭を抱えてしまうトキ。ぼたっ、と右目の横からからおびただしい量の血が流れ落ちた。脱力感と吐き気に襲われ、思わず膝をつくトキ。

「トキさんッ！！」

レイチェルが悲痛な声でトキの名を呼んだ。

「ひははははははっ！！腕が落ちたな！？トラキア！！」

一年以上もぬるま湯に漬かっていたようじゃ当然か！！」

「・・・何が？僕のナイフがあなたの胸を突いたのが先でしょう？

あなたがそんな体じゃなかったら、勝っていたのは僕の方ですよ？」

「しかし、今立っているのは俺の方だ」

トキは俯き唾を吐く。暗い瞳でツヴァイを見上げ、

「下衆野郎・・・」

「はっ、言葉遣いが昔に戻ってるぜ」

ツヴァイはうづくまるトキの顎を蹴り上げた。斬られた頭を庇いながら、トキは仰向けに倒れる。そして倒れたトキの上に仁王立ちになり、ナイフを握る右腕を踏みつけ、その動きを封じた。

「貴様が死ねば、旧マスカレイド部隊の殲滅作戦はようやく完了だ。新生マスカレイドの本当の始まりは、今日この日になるのさ・・・」

そう宣言するツヴァイを、トキは血に塗れ、仰向けに倒れたまま見上げた。

一欠片も戦意を失わない、一欠片も恐れを知らない、その目で。

その眼差しに神経を逆撫でされたツヴァイは、奥歯を軋ませナイフを振り上げる。

突然、ツヴァイの背後の地面が破裂した。

まるで水面に石を投げ込んだ時の波紋のように、石畳の下にある土が真上に吹き上がる。その衝撃に押され、ツヴァイとトキは地面に転がる。

「何だ！！？」

ツヴァイは辺りを見回し、耳元の通信機からアリシアネットにアクセスし、戦場の状況を確認しようとする。しかし、どういう訳かアリシアからの回答も、アリシアネットで繋がっている部下達からも、何も返事が無かった。

「あそこだ！」

兵の一人がが声を上げ、廃墟の一角を指差す。そこには背の高い建物の屋上から、巨大なライフルを撃ち下ろしている男が居た。

ライフルは、自分達が用意してきた超長距離用のロングレンジライフル。それを構えていたのはエアニスだった。

「ザード=ウォルサム・・・！！ちっ、こんな時に・・・！」

ツヴァイは、エアニスを過去の名前を、吐き捨てるように呟く。エアニスとチャイムには選りすぐりの狙撃手に張り付かせ、動きを止めていた筈だった。その二人がここに居るという事は、狙撃手がエアニスに倒されたと考えるのが妥当だが、それならばアリシアネットから部下の消耗を知らせる通信が届く筈である。

ツヴァイが疑問を巡らせるうちに、エアニスはライフルから空薬莖を抜き、足元に転がした巨大な弾丸の一つを手早く銃身に詰める。

「チャイム、もっと踏ん張って貰わないと狙いが定まらねーよ」

「無理無理無理！！！！こんな大砲の反動を人間が支えきれないわけないでしょうが！！」

チャイムはエアニスの背中を肩で支えるようにして立っていた。本来なら地面にアンカーを打ち込んだ銃座に据え付けて使うような巨大ライフルを、エアニスは肩にぶら下げ、腰だめで撃っていた。発砲時の反動は自分の力と体重では支えきれないと判断し、エアニスはチャイムに背中を抑えて貰いながらライフルを撃っていた。

「次、あそこ撃つ」

「ちょっと待っ ぎや————っ！！」

チャイムの悲鳴と共に、エアニスのライフルが轟音と発射ガスを吐き出した。衝撃は空気を震わせ、周りの床に溜まった砂埃を舞い上げる。発射された弾丸はエアニスの狙い通り、道路の端に止められていた装甲車を貫通し、その中の燃料タンクに着弾した。

ゴボン、と装甲車は密閉したドラム缶が爆発したように身震いをした。少しの間を置き、火達磨になったマスカレイド兵が車外に転がり出てきた。

マスカレイド達の視線がトキからエアニスに変わった。一斉に向けられる銃口。するとエアニスは担いでいたライフルを放り投げ、足元のカバンから伸びるロープを引っ張った。キン、キン、キキキン、と軽い金属音が連続して響く。ロープを全て引き抜くと、エアニスはカバンの中身

を眼下の戦場へぶちまけた。それは、全てピンの抜けた手榴弾。安全ピンをひと繋ぎにして、全てのピンをほぼ同時に抜けるように細工をしておいたのだ。バラバラとまんべんなく地面に転がる手榴弾がマスカレイド達の逃げ場を八方から塞いだ。もちろん、それはトキの足元にも転がる。

「メチャクチャですね・・・！」

毒づきながらも、彼にはエアニスがかバンから何かを取り出した瞬間に、何となく展開が予想出来ていた。いかにもエアニスがやりそうな事だ。その為、トキの反応は冷静で早かった。

自分に向かい転がる手榴弾へトキは自ら歩み寄り、コツンと蹴飛ばしツヴァイの足元へ落とす。そして全力で路地裏に飛び込み、地面に伏せる。

次の瞬間、手榴弾は僅かな時間差で次々と爆発してゆく。時間にして5秒足らずの間に20を超える手榴弾が炸裂した。

殆どのマスカレイド兵はアダマタイトの防弾服を着ている為、爆発の直撃を受けたとしても精精打ち身程度の怪我だろう。爆発から離れていた者や、上手く爆風と共に飛んだ者は、軽く目を回しただけだった。つまり、エアニスの絨毯爆撃はマスカレイド達にとっては目くらましでしかなかった。無論、エアニスもそのつもりだ。

「いててて・・・危うくエアニスに殺される所でしたね・・・」

砂を払い、トキが身を起こす。爆発による煙で周りの視界はゼロである。

突然、後ろからトキの襟が掴まれた。

「居た！！トキさん！！大丈夫ですか！！？」

砂煙の中から現れたのは、トキとツヴァイの戦いを離れた場所で見っていたレイチェルだった。その後ろにはカインも居る。

「ここは一旦引きましょう！！その怪我ではもう戦えません！！」

トキはツヴァイに斬られた頭に手を当てる。まだ血は止まっていないし、心なしか傷に近い右目の視界がぼやけていた。傷を鏡で確認するのが怖い。

「引くといっても、囲まれているのには変わりありません。でたらめに逃げたら、僕はともかくカインさんとレイチェルさんは連中に撃たれますよ」

トキの言葉にカインは黙り込む。煙の向こうでは、マスカレイド兵達が近づいてくる気配を感じる。唇を噛むカインに、不意に声が掛けられた。

「ー後退、8時方向、東180メートルにてトラックを待機させました」

カインは驚き、その声を聞き取った自分の右耳に手を当てる。

声が聞こえてきたのは、カインが耳に付けていた通信機からである。機械的な女性の声。アリスアネットからの指令だった。

戸惑いながら辺りを見回すカイン。マスカレイドを裏切った時点で、カインの通信機はアリスアネットから切断されている。それ以降、耳元の通信機からは部隊内の通信も、アリスアネットからの指令も途絶えていたのに、今になって突然通信が送られて来たのだ。

何故、マスカレイドを敵に回した自分に、アリシアネットから利となる情報が送られてくるのか。真っ先に罠の可能性を考えたが、トキとアリシアの関係を知ったカインの本能はその声に従えと言った。

「・・・っ、こっちです！！」

カインはトキに肩を貸し、聞こえてきた声に従いマスカレイド達から逃げるように走り出した。

「ー後方よりターゲット2、エアニス＝ブルーゲイル、チャイム＝ブラスハート」

再び通信機から聞こえるアリシアネットの声。カインが振り向くのと同時に、煙の中からエアニスとチャイムが飛び出してきた。

「待て待て！俺達は敵じゃない・・・って、あんた、ノキアの兄貴じゃないか！！？」

「え！？ウソ！？どういう事！！？」

騒がしく追いかけてきた二人組は、ひと目でカインの事に気付き、警戒の眼差しを向ける。

「カインさんは味方です！それより、今はこの場を離れましょう！！」

「レイチェルが言うなら信じるが・・・それより、逃げ込む宛はあるのか？」

「ええ・・・この先に・・・トラックが・・・」

カインは走りながら自信無さげに言うと、目前に路地裏に放置された軍用のトラックが姿を現した

本当にあった・・・そう小さく眩き、カインはトラックに乗り込む。レイチェルとチャイムは意識が朦朧とし始めたトキをゆっくりとトラックに乗せ、エアニスは追っ手を警戒し銃を構える。砂煙の向こうからマスカレイド達が姿を現すよりも早く、トラックは日が暮れようとしている旧市街を走り出した。



「ご無事ですか！？」

トキと決闘まがいの事をしていた為、ツヴァイはアダマンタイトのマントを着ないまま、エアニスの絨毯爆撃に巻き込まれていた。ほぼ無傷の部下達に助け起こされ、顔を上げる。

「・・・ひ」

ツヴァイを助け起こした兵士は、彼の顔を見て息を呑んだ。顎が、ひしゃげていたのだ。

ツヴァイは部下の様子に気付き、自分の顎に手を当て外れた顎を無理矢理押し戻す。生ける屍となった体は、痛みに鈍感である。血流も遅く、出血は殆ど無かった。ツヴァイは懐に仕舞っていたデスマスクを被り、崩れかけた己の顔を隠す。

「奴らは何処に行った？」

「ふ、不明・・・です。先ほどの爆発から、アリシアネットの稼働率が著しく下がっています。現在、ネットワークによる戦場の状況把握が全く出来ていません」

「・・・何故ザード＝ウォルサムと、チャイム＝ブラスハートがここに居る。奴らとトラキアを



分断させるために、狙撃手を二人、奴らに張り付かせていたんだぞ？」

「それが・・・狙撃兵の二人は、任務を中断し、アリシアネットから本体へ合流するようにとの指示を受けたと言っています。どうも、アリシアネットの稼働率を上げた時からエラーによる不可解な異常動作が続き、部隊内で誤った指令が飛び交っていたようです・・・」

「くそ、こんな時に。役に立たない女・・・だ・・・」

立ち上がり溜息を吐いたツヴァイが、吐いた息を飲んで硬直する。

これは、本当にただのエラーか？

テスト運用中のアリシアネットが不可解な異常動作を起こす事は多々あるが、改良と最適化を重ねた今のアリシアネットはこのような異常動作が起こる事は無くなっていた。

それに、これはただの異常動作では無い。

マスカレイド部隊が、アリシアネットに陥れられた形になってはいないか？

ツヴァイは連続して発生した異常動作の中に、誰かの意思を感じた。

アリシアの、意思を感じた。

「まさかな・・・ありえない」

ツヴァイは軽く頭を振り、自分の中の馬鹿けた想像を否定する。

「全員、アリシアネットとの接続を切れ。無線も通常無線に切り替える。

それと・・・念の為だ。通信車に連絡を取り、アリシアを強制終了させろ」



カインの運転するトラックは追撃者をおろす為か、旧市街を不規則なルートで走り、最終的に崩れかけた廃屋の中へとその大きな車体を隠した。

「また・・・こっぴどくやられたわね。エアニスじゃないんだから無茶しないでよ。

頭の傷は剃り込みハゲ決定ね・・・」

トラックの荷台に据え付けられた長いシートに横たわり、トキはチャイムの魔導で治療を受けていた。瓦礫に潰された右腕と、ナイフで切られた頭の裂傷は特に酷かった。チャイムの小言に何も言い返す事無く手当てを受けるトキを、レイチェルは心配そうに見つめる。

その間、エアニスはトラックの中を物色する。今チャイムが使っている簡易救急セットの他に、ライフルが2丁と、多くは無いが銃弾があった。

「喜べ。夕食があるぞ」

エアニスがチャイムとトキに銀紙で包まれた携帯食料を放り投げた。

「うー・・・まあ、何も無いよりはマシか・・・。お昼も食べてないもんね」

チャイムはトキの手当てをしながら、携帯食料を齧る。トキとレイチェル、カインはその包みを見て溜息をついた。地下道の通信室で食べた携帯食料と同じメーカー、同じ味の物だったからだ。無いよりはマシと自分に言い聞かせ、銀紙を破いて中身を租借する。パサパサのクラッカーに口の中の水気が猛烈な勢いで吸い取られ、レイチェルがむせた。

「チャイムさん、モノ食べながら人の怪我の手当てするの止めて貰えませんか？」

「細かい事言うんじゃないわよ女々しいわね。どの道こんな所じゃ衛生的な治療なんて出来ないわよ」

「そんな環境でも良い治療が出来るようベストを尽くしましょうよ。

あ、今食べかす包帯に巻き込みましたよ？」

「うーるさいっわねー・・・」

いつも通りのトキのフラット・テンションにエアニスは口元を緩める。とりあず、傷も心も大丈夫そうだった。

携帯食料の入っていた箱を漁ると、小さな袋に密封された煙草を見つけた。煙草を切らしていたエアニスは喜んで火を点け、残念そうに煙を吐き出す。エアニスがいつも吸っているバニラの煙草とは違い、異国の御香のような酷い味だった。紫煙を溜息に乗せながら、エアニスは仏頂面で助手席に、カインの隣に座る。

「事情は大体聞いている。すまない、助かった。

上手く撒いたもんだな。ここなら、暫くは時間を稼げそうだ」

エアニスの礼にカインは言葉を返さなかった。ハンドルの上に両手を置いて、この状況の不可解さを、どう説明したものかと考える。

「・・・いえ・・・ここに逃げ込んだのは、私の判断ではありません・・・」

そう前置きし、カインはここに至った経緯の説明を始めた。突然、アリシアネットから退路の情報が伝えられた事。この廃屋に逃げ込むまでのルートも、全てアリシアネットからの指示であったこと。アリシアネットの事を知らないエアニスとチャイムには、それがどういう物かちゃんと説明した。

トキの双子の妹と、アリシアネットの存在を同時に知ったチャイムは、彼の辛い生い立ちと、あまりににも酷い現実言葉に言葉を失う。エアニスも、アリシアに直接会ったことのある身として虫唾の走る思いだった。

「・・・じゃあ、俺達はそのアリシアネットに助けられたのか？」

「まだ罨だった、という可能性は捨て切れませんが、現に私達が体制を立て直すだけの時間を稼ぐ事が出来ました。恐らく、そういう事・・・なのでしょう」

カインの言葉には自信の欠片もなかったが、状況と現実を見る限り、そう判断するしか無かった。

「でも・・・これじゃあまるで・・・」

そう言い掛けてレイチェルは、口をつぐむ。感じた事を言葉にするのを躊躇ったのは、トキに気を遣った為だったが、その続きは当のトキが引き継いだ。

「・・・まるで、アリシアが僕達を助けてくれたみたいですね」

全員が、その虚ろなつぶやきに黙り込んだ。

それは、喜ばしい事なのだろうか。

命を奪われただけではなく、その亡骸から脳だけを持ち去られてしまった少女。その少女は体を失い、機械の中で意識だけの存在となりながらも、自分の家族を、トキを守ろうとしたのだろ

うか。

カインが沈痛な面持ちで首を振った。

「あり得ない話・・・だとは思いますが。アリシアネットが人間の脳に求められているのは、あくまで"性能"であって、"記憶"ではありません。

優秀な人間のずば抜けた演算力と柔軟な応用力を必要とする事はあっても、その人間の経験や知識、思い出は、兵器にとって邪魔者でしかないからです。

脳の性能と記憶は別物、つまり、記憶を全て消去しても、性能には影響が無いという事です。人工知能に転用される人間の脳には、そうやって性能のみを利用するために、データを、記憶の処理をされている筈です」

トキに要らぬ希望を持って欲しくない。その思いから、カインはアリシアネットについて知っている知識を述べた。

「人間の脳の仕組みなんて、未だに分からない事ばかりだ。実際に、こういう事が起こったんだ。そういう可能性だって、あるんじゃないのか？」

余計な事を言うな、とカインはエアニスを目で制する。その視線には気付かず、エアニスは言葉が続けた。

「でも、そういう事があったとしても・・・どうすればいいんだって話だよな・・・。

どうする事が、あの子への救いになるっていうんだ・・・？」

突然、何処かで小さな電子音が鳴った。

同時に、ガチャガチャと連続的な機械音が鳴り始める。チャイムが自分のすぐ後ろ、音のする方を振り向くと、通信機の横に据え付けられた小さな印刷機から、次々と紙が吐き出されていた。チャイムが恐る恐るその紙を手に取り、紙面に目を通す。

「・・・これ、連中の布陣図に兵力のレポートよ！？」

吐き出された紙には、旧市街の俯瞰図に、マスカレイド部隊の拠点や、残存兵のリスト、各兵士が現在持っている銃器の種類、現時点の残弾数、そして通信記録など、事細かに記されていた。トキが印刷された資料を一枚手に取り、それに目を落としていた。その様子をチャイムは横目で伺う。

トキの瞳が、揺れていた。

トキ自身あり得ないと感じていた可能性が、現実味を帯びてゆく。アリシアネットは、間違いなくトキ達に味方をしている。

印刷機の駆動音に混じり、今度は無線機のチューニング音がトラックの中に響いた。

全員が反射的に、赤いランプの点灯する通信機に目を向ける。

耳障りな高音が伸び縮みを繰り返し、高音は次第にざらざらとした雑音に変わる。雑音はボツボツとスピーカーのコーンを叩き、ぼぼっ、と一際大きく空気を震わせると音声は突然クリアになった。

スピーカーから流れてきたのは、オルゴールのメロディー。

ゆっくりと、穏かに流れるその曲は、初めて聴く筈なのにとても良く耳に馴染む、心の安らかな曲だった。

エアニスは眉を潜め、チャイムを見た。彼女もエアニスと同じく怪訝な表情を浮かべ、首を傾げた。レイチェルもカインも同じ様なリアクションを返す中、トキだけは違う反応を見せていた。

その曲は、トキとアリシアが共有する生まれた日の思い出。

あの再会の日、互いが兄妹だという事を確信する鍵となった曲だった。



「・・・アリシア・・・」

トキは手にしていた資料を床に落とす。彼は呆然とした表情でスピーカーを見つめていたが、突然チャイムを押しつけるようにして通信機へ飛びついた。

「アリシア！！ アリシアなんだろ！！？ 俺の事が分かるんだな！！？」

通信機のマイクへ向かい、彼は大声で妹の名を呼ぶ。トキの中でとっくの昔に整理のついていた気持ちが、この瞬間に崩れた。儚い希望に、トキはすがりつく。

あまりに必死な形相を見せるトキに、エアニス達は息を呑む。トキがこれほどまでに取り乱している所など、見たことが無かった。

「俺だよ・・・トラキアだ！！ アリシア！！ アリシアっ！！！」

しかし、通信機から流れるメロディーは突然ぶつりと途絶えた。次々と紙を吐き出していた印刷機も、ぴたりとその動きを止める。

トラックの中に、耳が痛い程の静寂が訪れた。

「・・・は・・・」

乱れる息で僅かに喉を鳴らすと、トキは力なく崩れ落ち、トラックの床に両の膝を突いた。

カインは耳元の通信機を操作し、アリシアネットへの接続を試す。

「駄目です・・・。アリシアネットは物理的にネットワークから切断されてしまったか、動力供給を止められてしまったか・・・。アクセス出来ません」

トキは無線機の据え付けられた机に突っ伏し、自分の髪をぐしゃりと掴んだ。

「みっともない所を見せてしまいましたね。失礼しました・・・」

トキが薄い笑みを浮かべて、エアニス達に頭を下げた。その表情にはどっと疲れの色が現れていた。

「トキさん、今のは・・・？」

「・・・今の曲は、僕とアリシアを繋いでくれた思い出の曲なんです。

ほら、話したじゃないですか。僕とアリシアが、生まれた時に耳にした曲です」

「あ・・・」

レイチェルは、地下道でトキが語った話を思い出していた。トキとアリシアは生まれた時からの記憶を持っている事。それから別々に育てられ、十数年後に再会したあの日。トキとアリシアが互いに血の繋がった家族であると確信出来たのは、生まれた時に聞いたその曲を2人とも覚えていたからだという事。

「あの曲の事は、僕とアリシアしか知らない事なんです。だから・・・アリシアは本当に今も・・・」

トキはそう言って通信機を見下ろした。トラックの中に沈黙が落ちる。

死んだと思っていた妹が生きていた。しかし、この現実を決して喜ぶべき事ではない。その生の形は、あまりにもいびつで、痛ましかった。誰もが言うべき言葉を見つけられず、口をつぐむ。そして、視線を漂わせていたエアニスが偶然、一番最初にそれを目にした。印刷機から吐き出された最後の資料、いやメッセージを。

「トキ・・・。お前宛みたいだぞ・・・」

エアニスは印刷された資料の束からその紙を抜き取り、トキの目の前に差し出す。そこに印刷されていた文字は、一目で読めてしまうほど、短い物だった。

"私を壊して"

トキはエアニスから紙を受け取り、その短いメッセージを何度も繰り返して、読んでいたようだった。

このメッセージも、アリシアのものなのだろうか。何かの間違いか、それとも文面とは違う意

味が込められているのか。トキは様々な可能性を考えてみるが、アリシアの性格を考えると、やはりそうなのだろう。

一度は永遠の眠りについたにも関わらず、体を持たない意識だけの存在として、アリシアは今も生きている。しかし、それは生きていると呼べるものなのだろうか。脳だけの存在で体も持たず、断片的な意思しか感じられない所を見ると、明確な自我を持っているとも言い難い。

人間と呼べる存在ですら、無いのかもしれない。

生の定義は人や宗教によって様々だが、少なくともトキにとって今のアリシアは生きている存在だった。理由は、アリシアはトキの事を認識しているから。トキも断片的なメッセージから、アリシアの存在を感じ取る事が出来た。それは、トキにとって十分すぎる理由だった。

アリシアが何を思い、何を感じ今も生きているのか、トキには想像も出来ない。しかし最後に残されたメッセージを見る限り、そこにアリシアの生に対する望みを感じる事は出来なかった。

アリシアは、今の生から開放される事を望んでいる。

「カインさん、聞いてもいいですか？」

トキは手にした紙を折りたたみながらカインに問う。

「・・・なんでしょう？」

「アリシアネットは、この街にあるのですか？」

「・・・街の外れに、通信車両が待機しています。アリシアネットの本体も、そこに・・・」

カインは答えるべきか迷ったが、正直に教えた。トキがカインを見据える視線に、嘘が通じるとは思えなかったのだ。

「そうですか。やるべき事がまた増えてしまいましたね」

トキはそう呟くと印刷機から吐き出された資料を机に並べ、その情報を頭に叩き込んでゆく。アリシアの件は重要だが、それよりも差し迫った問題が目の前にはあった。はやる気持ちを抑え、まずは目前の問題を排除する為、思考を巡らせる。

「僕は戻ります。まずはツヴァイと決着をつけなければなりませんので。

皆さんはここで待っていて下さい。元々、今回の件は僕の問題です。これ以上巻き込んでしまうのも、忍びないですからね」

トキの口調は、わざとらしい程に素っ気無い。もうこれ以上、自分に関わらないでくれと心に蓋をしてしまった子供のようだ。

その様子を見て、エアニス面白くなさそうに、こう言った。

「一人で行って、あの野郎とフェアな勝負が出来るとは思えないけどな。

まだ暴れ足りないんだ、露払いくらいはさせろよ」

いつものようにふざけているような口調だったが、その目は笑っていない。

「彼等は、あの男は、村のみんなの仇でもあるんです。私も最後まで戦います」

レイチェルも、言われた通り大人しく待っているつもりなど無かった。

「怪我人のくせに無茶しないでよ。一人で行かせるわけないでしょ？」

チャイムは軽く、いつものように。それでいて、当然のように、言った。

「裏切り者になってしまった自分からすると、今のうちにマスカレイド部隊は叩いておきたいんですよ。報復が怖いのでね」

カインが肩を竦めて笑う。マスカレイドから離反したカインも、この戦いの後は大変だろう。少なくとも、もうこの街に居る事は出来ない。

トキは皆の言葉を聞き、自分はずるい事をしているなと自己嫌悪を覚えた。こんな言い方をすれば、彼らはそうしてくれるという事は分かっているというのに。

「・・・すみません」

それは、皆を巻き込んでしまったことに対する謝罪というより、皆の反応が分かっているながら、突き放すような言葉を吐いてしまった事に対する謝罪の言葉だった。始めから、こう言うべきだったのに。

トキは目を伏せ、エアニス達に向き直る。

「改めてお願いしますーアーリアと僕に、力を貸して下さい」

時刻は深夜を過ぎ、もう暫くすれば空が白じみだす頃。

生き残ったマスカレイド部隊の兵士達は、旧市街の外れにある廃工場に集まっていた。

工場の内側から漏れる明りは窓を塞ぐ暗幕によって遮られている。今や廃墟となった旧市街に当然明りは無く、夜に建物内で明りを灯しているだけですぐに見つかってしまうからだ。

工場の中にあるのは、真っ赤に錆びた古めかしいトラックのボディに、ひび割れた沢山のタイヤ、何に使うのか分からない様々な金属製の部品。大戦中に稼動していた軍用車の生産工場だった。

その一角の床が大きく開いていた。床に空いた穴は大型のトラックが通れるほどの大きさで、地下に続くスロープが架けられていた。

エルバークの旧市街に無数に張り巡らされた地下道の1つだ。この工場から地下道を抜ける事によって、一直線に街の外へ出る事が可能だった。大戦中には、ここで集めた兵力を街の外に送り敵の背後を突いたり、製造した大型車両の搬出に使われていた。

マスカレイド部隊がこの地下道の入り口に集まっている理由。それは撤退の為だった。

ツヴァイは唇を噛む。撤退の理由はマスカレイド部隊にとっても天敵であるエアニス=ブルーゲイルがトラキアと合流してしまったからである。

1ヶ月程前。エアニス=ブルーゲイルは知人の墓参りに訪れる為、数日間仲間と別行動をとった期間があった。その情報を得たルゴワールの幹部会は急遽、動けるだけのマスカレイド部隊を集め、その人間離れした強さ故に危険視されていたエアニス=ブルーゲイルを襲撃した。しかしそれは、最新の銃器を携えたルゴワールの精鋭20人余りがたった一人の剣士によって全滅させられたという信じ難い結果に終わった。アダマタイトの防弾服も易々と切り裂かれ、生存者は一人も居なかったと言う。

ルゴワールという世界最大の犯罪組織を驚かせたのはそれだけではなかった。襲撃の失敗を見届けた監視兵からの情報を元にエアニスブルーゲイルの素性を洗うと、その名は偽名である事が分かった。

彼の本当の名はザード=ウォルサム。あの"月の光を纏う者"だったのだ。

以来、一部の独断先行者は居たものの、ルゴワールは基本的にエアニスに対し正面から戦いを挑む事を止めた。

エアニスの強さが噂でも都市伝説でもないという事は、ツヴァイ自身、一年半前に"月の光を纏う者"としての彼と対峙した際目の当りにしている。エアニスの剣がアダマタイトを切り裂く場面も。

レイチェル=エルナースの身柄確保、そしてトラキアの殺害は、エアニスとの接触を回避した上で行わなくてはならなかった。その為策を巡らせ、戦力の分断にも成功した。

しかし、結局は失敗に終わった。原因は、ツヴァイがトラキアに向けていた執拗な敵意にあった。言うなれば、遊び過ぎたのだ。トラキアを殺し、レイチェル=エルナースを連れ去るチャンスは幾度もあった筈なのに。



しかし、原因の全てがツヴァイにある訳ではない。今の時点で彼自身気づいていなかったが、マスカレイド部隊を陥れた第三者の意識が、この戦場にはあった。

「撤退の準備が完了しました」

マスカレイド兵の一人が、ツヴァイの背中に声を掛ける。今やマスカレイド部隊が保有する自走可能な車両はこのトラックと、街外れに待機させた通信車両のみだ。人員や持ち込んだ装備など全てを運び出すには、地下道を2往復する必要があった。

「B班とC班は撤退を始めろ。A班と俺は次の便で・・・」

ツヴァイが部下に指示を出していると、兵士の数人が突然騒ぎ出した。何事かとツヴァイが振り向くと、地下道の入り口から、黒煙が噴出していた。

「地下道で火災です！！ くそっ、誰かが火をつけやがった！！！」

誰か。

考えるまでも無い。トラキア達だ。レイチェル=エルナーズと"石"の事を考えるなら、このままツヴァイを見逃す方がトラキア達にとっても楽な選択肢であろうに、彼らは自分達を逃がすつもりは無いようだ。

「面白い・・・！！」

本当に面白そうに、とても嬉しそうに、ツヴァイは凄絶な笑みを浮かべる。部隊の隊長として撤退を決めざるを得なくなり、すっかり興が冷めてしまっていた心が再びざわめきだす。

工場の外で銃声が響いた。銃声の中、何かが近づいてくる音――車の駆動音。

大して厚くもない工場の外壁を、金属のひしゃげる耳障りな音を上げ黒塗りのトラックが突き破った。

『うおあああああ！！！』

相手が誰か確認する事も無く、追い詰められ、疲労しきったマスカレイド兵達はありったけの銃弾をトラックへと撃ち込み始めた。

火花を上げるトラックの影から人影が飛び出す。トラックに向ける銃口がその影を追って揺らいだ瞬間、そのマスカレイド兵が吹き飛んだ。彼の胸に飛び込んで来たものは、トラックの中から発射された対戦車ライフル弾。トキはトラックの荷台に伏せて、対戦車ライフルを車体フレームに固定して撃っていた。目の前には即席で作った防弾壁があり、そこに開いた僅かな穴からマスカレイド兵達を見回す。

そしてトラックの陰から飛び出した影、エアニスが埃とガラスの散らばる床に音も無く降り立った。手にしている武器は赤黒く塗られた薄刃の長剣。マスカレイド達も聞かされている、アダマタイトをも切り裂く魔法剣、"オブスキュア"。しかし、銃を構えるマスカレイド兵達との距離はまだ開いている。絶対に戦ってはいけないと言われていた敵を前に、マスカレイド達はこの状況ならば勝てると確信し、引き金を絞る。

突然、エアニスの周りの地面が脈打ち、人の背丈程の岩壁が生えるようにして現れた。地面から一瞬にして現れた無数の岩壁はマスカレイド達の銃弾を遮り、エアニスの姿を隠す。レイチェルがエアニスの為に魔導で作り出した障害物だ。

マスカレイド兵の一人が背中から血を吹いて倒れる。岩壁の合間をすり抜けたエアニスは、既にマスカレイド部隊との距離を詰めていた。返す刃で真横に居た兵も切り伏せた。そしてエアニスをフォローするようにトラックの荷台からトキのライフル弾が正確に敵の胴体へと送り込まれる。

マスカレイド兵達の持つライフルは銃身が長く、弾道を見切りやすい。さらにエアニスには相手から向けられた殺意を明確に感じ取るという魔導とは毛色の違う特殊な能力がある。相手が殺意を向けてくるほどに死の導線を明確に感じ取る事ができ、エアニスの動きは鋭さを増してゆく。つまり相手の殺意が強い程、彼は強くなる。

「ザード=ウォルサム！！」

ツヴァイがエアニスを昔の名前で呼び、銃の引き金を引いた。エアニスは返り血を浴びながら敵の体から剣を引き抜振り返る。放たれた弾はライフル弾ではなく、白煙が尾を引くグレネード弾だった。エアニスの目ならば剣の腹で弾を打ち返す事すら可能であったが、その途端爆発されては敵わない。振り返った勢いでそのまま体を捻り、最小限の動きで弾をやりすごした。爆風に備えレイチェルの作り出した岩壁に身を隠すと、グレネード弾はブシューンと気の抜ける音と共に爆発した。それは爆炎やニードルを撒き散らす事もせず、ただ周囲に白煙だけを撒き散らしたただけだった。

「がっ！？」

エアニスが喉に手を当てて仰け反った。剣を取り落とし、背中を震わせ激しく咳き込む。

「エアニスさん！！？」

異変に気づき、トラックの中で身を隠していたレイチェルがエアニスの名を叫ぶ。

冷や汗を浮かべていたツヴァイに会心の笑みがこぼれた。

「何の策も無しに貴様を相手にするとでも思ったか！！」

エアニスは岩壁にしがみついた様な格好のまま、仰向けに倒れこんでしまった。それは今までのエアニスの戦いぶりからは想像もできないな弱々しい姿だった。

「毒ガス！！？」

トキが異変の原因に気づき、声を上げる。しかし、ツヴァイと、既にその数を3人にまで減らしたマスカレイド兵達にはエアニスのような異変は無かった。それは、エアニスと接近戦になった場合に用意された、エルフ族に対してのみ効果を表す毒ガスだった。

トキは荷台に固定していたライフルを外し、トラックから飛び出す。

「レイチェルさん！！風を！！！」

トキの短い言葉をレイチェルは瞬時に理解し、詠唱を短縮した風の術をエアニスの頭上で発動させる。倒れたエアニスを中心に空気が膨張し、爆ぜ割れる。それだけで、戦場に溜まった毒ガスは吹き散らされた。

ツヴァイは落ちていた鉄柱を拾い、倒れ伏すエアニスに向かって駆け出す。

「貴様さえ、貴様さえいなければッ！！！」

今やツヴァイにとってエアニスはトキと同じ位目障りな存在である。激昂したツヴァイは鉄柱を倒れたエアニスの頭へと振り下ろす。しかし鉄柱はエアニスの頭蓋を砕くより早く、火花を散

らしてツヴァイの手から弾き飛ばされた。トキがライフルで撃ったのだ。

「ツヴァイ！！どこまで汚い手を・・・！！」

トキは続けて対戦車ライフルでツヴァイを撃つ。一発、二発と弾丸はアダマンタイトのマントとその中の身体を貫いた。ツヴァイの上体は大きく仰け反るが、それだけだった。

「ひはっ！！」

不死の体となったツヴァイにとって銃創など取るに足りない傷だった。裏返った笑い声を上げ、ライフルを乱射する。しかし銃弾はトキの目の前に現れた岩壁に遮られる。

無数にそそり立つ岩壁の一つからレイチェルが姿を現した。その手には光を飲み込む黒い球体が揺らめきながら宿っている。

空間転移の術。

「ッ！！！！？」

ツヴァイの背筋が凍りついた。部隊を率いレイチェルの村を襲った時に、ツヴァイ自身も右腕と右脇腹をまるごとえぐりとられた忌まわしいあの術。

ツヴァイはレイチェルの魔導を封じるため、彼女を捕らえた際に魔力殺しの薬を打っている。魔力を操ると全身の血が逆流するような痛みが走る、大戦中に捕虜となった魔導師に対して投与されていた薬だ。実際にツヴァイは魔導を行使しようとしたレイチェルが薬の作用によって悲鳴を上げる姿を見ている。

薬を打ってから随分と時間が経っているので、その効力は弱まっているだろうとは思っていた。地面から岩壁を生やす程度の術なら、無理をすれば使えるのかもしれない。しかし、空間転移のような高位魔導が使えるとは思っていなかった。

この時の彼には、レイチェルに与えた薬がカインの手によって完全に抜かれているという事など知る由も無い。

レイチェルが手のひらの球を握り潰した。それは空間を渡り、ツヴァイの立つ座標に具現する。低い重低音と共に空気が吸い込まれる鋭い音が響き、虚空に黒い球体が唐突に現れて、そして一瞬で消える。

しかし球体がえぐり取ったのは、ツヴァイの持つライフルの銃身のみだった。ツヴァイが勘を頼りに身をかわしたのだ。ツヴァイの顔には安堵以上に、焦りの色が浮かぶ。

「・・・っ！！構わん！！女を殺せ！！！」

残りの3人の部下に指示を下すツヴァイ。元々彼らの任務は"石"とレイチェルの確保が目的であり、それは完全な命令違反だった。しかし、空間転移の術を使うレイチェルは、"オブスキュア"を持つエアニスと同等の脅威となる。殺さなければ、自分達が殺されてしまう。ツヴァイの部下達に僅かに残っていた遠慮や慎重さが消え、弾幕が苛烈になる。

レイチェルは既に次の術の詠唱を終えている。背にした石壁の向こうでライフルを撃つマスカレイド兵に向け、右手をなぎ払うように振り抜いた。

ツヴァイには一瞬、レイチェルの向こう側の景色がずれて見えた。そう感じた次の瞬間、その"ずれ"はゆっくりと大きくなってゆき、レイチェルの目前にあるもの全てが真横に両断されていた。

。

レイチェルが作り出した無数の岩壁も、工場を支える鉄骨も、目前に居た3人のマスカレイド兵も、全てがレイチェルの胸のあたりの高さで斬り裂かれていた。ツヴァイに対して放った、「点」を制御する空間転移ではなく、「面」に対して作用する空間制御。「点」に対する制御よりも膨大な魔力を必要とするが制御が簡単で、広大な有効範囲と無慈悲な殺傷力を持つ。

空間の断裂に巻き込まれた3人のマスカレイド兵は即死だった。普段は悪人であれ人の命を奪う事に抵抗を見せるレイチェルだったが、相手は自分の村の人間を皆殺しにした仇である。

レイチェルに容赦は無かった。

「くそっ！！」

遂に全ての部下を失い一人だけとなったツヴァイは倒れた部下の銃を拾い上げてトラックに向かい走った。

トキはその背中に、当てたところで大して意味の無い銃弾を打ち込むか、足元に倒れたエアニスを抱えるかで迷いが生まれた。その隙にツヴァイはトラックに乗り込みエンジンを始動させてしまった。レイチェルがトキの元へ駆け寄る。

「追ってください！！エアニスさんの手当ては私がやりますから！！」

エアニスはレイチェルに抱え起こされる。解毒など治療の術はチャイムしか使うことが出来ない。しかしチャイムはカインと共に地下道を先行し街外れにある筈の通信車両を押さえるため別行動を取っていた。地下道に放たれた炎も、その二人によるものだった。

エアニスは苦しそうに息を吐いたと思うと、地面を蹴り飛ばしながら大声で悪態をついた。痺れでろれつが回らないせいか何を言っているのか分からなかったが、思いのほか元気そうなエアニスを見て、トキは胸を撫で下ろす。

「分かりました、エアニスを頼みましたよ」

「・・・わたしの代わりにエルカカの村の皆の仇を・・・お願いします」

沈痛なレイチェルの言葉に、トキは口を引き結び頷く。

ツヴァイのトラックはトキ達が開けた壁の穴から既に外へ出て行ってしまった。トキは自分達が突入に使ったトラックに乗り込み、キーを回す。マスカレイド兵の一斉射撃を受けた車体だが、エンジンは何事も無かったかのように頼もしい唸り声を上げ始動する。トラックをバックさせて工場を出ると、トキは旧市街の地図を広げながら、ツヴァイのトラックを追った。



殺してやる！ 殺してやる！！ 殺してやる、！！！！

次こそは、必ず、殺す！ どんな手を使っても！！ 必ず、だ！！！！

ツヴァイはハンドルを握りながらも、ヒステリックに叫びシートの上で暴れる。

ザード=ウォルサムやレイチェル=エルナースの存在がある以上、正面から戦っても勝てない事は始めから分かっている。だからこそ、全ての計画を完璧に練り上げた。結果、戦力の分断に成功し、レイチェル=エルナースを攫い、トラキアを追い詰める事も出来た。

だというのに。

何処で狂い始めてしまったのか。

アリシアが誤作動を起こし始めた時からか。

カインというマスカレイド兵が裏切った所からか。

組織の命令でエルカカの村を襲い、"ヘヴンガレット"と関わってしまったからか。

アリシアを殺し、トラキアを逃がしてしまった時からか――。

記憶を遡るツヴァイは、そこでふと疑問を抱いた。

アリシアの顔が、思い出せない。

アリシアが死んで2年近く経っているとはいえ、何年も同じ環境で暮らし一緒に戦った、トラキアに言わせれば家族のような人間だ。顔を忘れるには早過ぎる。

しかし、どうしてもツヴァイはアリシアの顔を思い出せなかった。

顔だけではない、自分はアリシアをどのようにして殺した？

銃で撃ったのか、ナイフを突き立てたのか、それとも部下に殺させたのか。

そもそも、何故自分はアリシアを殺した？ あいつは、自分にとっても家族だったのではないか？

おかしい。

昔の事が思い出せない。記憶が混濁し、夢のように曖昧な輪郭しか思い出す事が出来ない。

自分の頭はどうしてしまったのか。

震える手を自分のこめかみに当てた。すると、膝にパラパラと乾いた土が落ちてきた。戦いの中で付いた泥だろうと思ったが、違う。こめかみを搔くほど、その土くれはボロボロと落ちてくる。そしてツヴァイは、こめかみを搔く指先が"眼球の裏側"に触れた所で、気が付いた。

土くれだと思っていた物は、自分の頭の破片だった。

ツヴァイはルームミラーを捻じ曲げ、自分の顔を写す。そこに写るのは、薄い土気色で、顎部から右側頭部にかけて無数のヒビが走る自分の顔。搔いていた右のこめかみから右目にかけて肉は削げ落ち、右の眼球が剥き出しになっていた。

今のツヴァイの体は致命傷を受けたとしても死ぬ事はないが、流石に肉体の損傷箇所が増え過ぎた。傷口から傷口へと、傷口が広がっている。銃弾に貫かれる事も厭わない、不死の体を過信した戦い方を続けてきた報いだった。

自分はまだ生きているのに、体が、脳が、朽ち始めている。

「は・・・」

ツヴァイは震える息を漏らす。そして、首に下げていたデスマスクで崩れかけた自分の顔を隠した。何の解決にもならないが、それだけである種の安心感を得る事が出来た。

ルームミラーから前方に視線を戻すと、ツヴァイの進路を塞ぐように、横手の路地からトキの運転するトラックが飛び出してきた。

「！！！！うおああああああっ！！」

猛スピードで走るツヴァイのトラックが、トキのトラックの荷台に突っ込んだ。ツヴァイの運転席は一瞬にしてスクラップとなり、爆発音にも似た衝突音は静寂の支配する旧市街中に響き渡る。

真横から衝突されたトキのトラックは、衝撃を受け止めきれず車体を真横に引きずられ、廃屋にぶつかって横倒しになる。

轟音の反響が聞こえなくなった頃、トラックの運転席の窓ガラスが、内側から蹴破られた。

「いてて・・・普通ノンブレーキで突っ込みますか・・・？」

トキはガラスまみれになって運転席から這い出した。大した怪我は無かったが、目を回すには十分な衝撃だった。そして、横倒しになった荷台に突き刺さるツヴァイのトラックに目を向ける。

「！・・・これは・・・死んだかもしれませんね・・・」

思わず絶句した。ツヴァイの乗ったトラックの運転席は原型を留めていなかったのだ。運転席のドアを開けツヴァイの姿を確認しようとしたものの、もはや何処がドアなのかも分からない。ガラスの無くなった窓枠が確認出来たので、そこに手をかけドアを力づくで引き剥がした。しかし、運転席は完全に潰れており、ここにツヴァイの死体が挟まっているのかどうかも分からない。これではスクラップの鉄屑を解体するのと同じ作業だ。

月明かりのみを頼りに鉄屑の隙間を覗き込んでいると、背後から首に何かか巻き付いてきた。

「がっ！？」

首を捻じ曲げ振り向くと、そこにはマスカレイドのデスマスクがフードの中の闇に浮かび上がっていた。トキはデスマスクの模様と首元からこぼれる金髪で、それがツヴァイである事を確認する。衝突の直前に車外へ飛び出したのだろう。

トキはツヴァイの体を背中で押して、人の背丈よりもやや高い位置にある運転席から飛び降りる。短い落下の間に体を捻り、ツヴァイを地面に叩きつけるよう組み伏せた。肩に下げているライフルを手にする暇すら無かったトキは、両手でツヴァイの首を、首の骨を折ろうとする。しかしその手は異様な怪力を持つツヴァイに掴まれ、マウントポジションに居たにも関わらずトキは地面に捻じ伏せられて腕を極められしまった。

純粋な力比でツヴァイに勝てないことは自覚していたが、それにしてもこの腕力は異常だ。見ると不自然なまでに膨張したツヴァイの左腕がパチパチとはぜていた。トキは目を見開く。収縮に耐え切れない筋肉繊維が千切れ、腕の皮を破っているのだ。

人間は、自分の体を傷つけない為に無意識に力の制御をしている。しかし限界を迎え壊れつつあるツヴァイの神経は、それらの制御を失っていた。

筋肉が千切れようが骨が砕けようが構う事無く、ツヴァイは人間の壁を越えた腕力を全力で振るう。

(折られる！)

次の瞬間に両腕を襲うであろう激痛に覚悟を固めたが、不意にツヴァイの腕から力が抜けた。腕の筋肉が自らの力によってズタズタに引き裂かれ、遂には腱まで引き千切ってしまったか。トキはその隙を逃さず、低い姿勢から力を失ったツヴァイの右腕を掴み、頭から落とすように背負

い投げをかける。

自分の背中に張り付いたデスマスクが、笑ったような気がした。数瞬後にはツヴァイの脳天を固い石畳に叩き付ける事が出来るというのに、トキは反射的に掴んでいたツヴァイの右腕を離れた。

トキの背中に焼けるような痛みが一閃する。

背中を、斬られていた。背中に背負ったライフルの銃身と、アダマンタイトの防弾服もろともトキの背中は縦に斬られていた。不吉を感じ体を離していた為、幸い傷は深くない。

転がりながら距離を取ったトキはよろめきながらも立ち上がり、ツヴァイに向き直る。

トキはその異様な姿を見て息を呑む。

ツヴァイの右腕は、肘から先が無くなっていた。

その代わり、そこには片刃の分厚いナイフが生えている。

ツヴァイの右腕は魔導で動く義手だったのだ。彼の右腕は、エルカカの村を襲った時にレイチエルの空間転移の術によってもぎ取られている。彼女からその話を聞いていたにも関わらず、再会したツヴァイに右腕があった事をトキは特別疑問に感じる事は無かった。金さえ積めば、魔導式の義手を作る事も可能だ。今では魔導と科学によって失った体の一部を再生させる事すら出来る。その辺りまで考えは及んでいたものの、このような仕掛けがある事まで想像していなかった。

義手の下に仕込まれていた片刃のナイフは、肘から先の腕と同じ長さのロングナイフ。その刃からは、羽虫の唸るような音が聞こえ、チリチリと火花を――空気との摩擦による静電気を散らせていた。

「振動刃・・・実用化出来たんですね・・・」

トキも、マスカレイドに居た時にその武器についての構想を耳にした事はある。しかし、論理的に可能というだけで、その機能を実現させたという話は遂に聞く事は無かった。

振動刃。

超硬度の刃に対象に合わせた特定の振動を与えることによって触れた物質を分解、切断する刀剣類を指す。大して力を入れずとも鋼を切り裂き、アダマンタイトの防弾服すらもその機能の前では無力と化す。

トキは背中と共に斬られたライフルを捨て、懐から手のひらに収まる小さなリボルバーを取り出した。トキが持っている最後の武器。込められた弾丸は、1発だけ。それはトキにとって"最後の切り札"だった。

残された最後の一手が最後の切り札となってしまったが、奇しくもトキにチャンスが巡っていた。ツヴァイのマントが、自らの振動刃に触れて裂けていた。

あそこからなら、この切り札を撃ち込む事が出来る。

トキは気持ちを落ち着かせるよう大きく息を吐き、リボルバーに収められた弾丸を確認する。これを外せば、後はもう無い。

「ツヴァイ、次で終わりにしましょう。お互い、もう疲れたでしょう？」

「グ・・・」

疲労感を滲ませたトキの言葉に、ツヴァイは身震いと共に獣じみた唸り声を上げる。トキの目に、僅かな哀れみの色が浮かぶ。

もう、トキ言葉は届いていないのかもしれない。



ツヴァイは右腕の振動刃を振り上げ、駆け出す。制御を失った脚力で蹴られた地面は爆発したように砂煙を上げた。

トキはリボルバーを両手で構える。ツヴァイは警戒する様子も見せず距離を詰めて来た。このような小銃の弾が当たった所で、生ける屍となったツヴァイには大した痛手ではない。そう思っ  
ての行動か、あるいはトキの無駄とも呼べる行動に疑問を感じるだけの思考すら巡らせる事が出来なくなっているのか。

しかし、このリボルバーに収められた弾丸はただの鉛弾ではない。

レイチェルによる特別製だった。

トキはツヴァイをぎりぎりまで引き寄せる。今にも振り下ろされそうな振動刃を一顧だにせず



、マントの裂け目を見据える。

死の匂いをこれほど間近に感じた事は無かった。しかし、トキは自分でも驚くほど落ち着いていた。自分の腕と、何よりもレイチェルを信頼していたから。

そして、リボルバーの引き金を、そっと引いた。

パン、と。

その銃身に見合った迫力の無い発砲音が廃墟に響いた。打ち出された小さな弾丸は、狙い違わずマントの裂け目からツヴァイの胸元へと飛び込む。

ツヴァイの体内で弾丸が砕けると、その体から青白い光がほど走り、焼けた鉄板に水を撒いたような音と水蒸気が立ち上った。血の焼ける匂いが広がる。

トキの左肩に振り下ろされた振動刃がピクンと跳ねて、そのまま止まった。

銃弾には、レイチェルの"浄化"の術の魔導式が細かくびっしりと刻まれ、弾頭には魔力を封じる事の出来る石、具体的にはレイチェルのヘヴンガレットを包み、その魔力を封じているブラックオニキスの欠片が使われていた。

この銃弾を使ってください。

私の魔導を組み込んだ銃弾で、村の皆の仇をとって下さい。

レイチェルがそんな言葉と共にトキに渡していたものだ。

トキはリボルバーの銃口を下ろす。

ツヴァイは剣を振り上げたままの姿で、動きを止めてしまった。ピクリとも、動こうとしない。フードから覗くデスマスクでは、その表情を伺うことも出来ない。

永遠とも感じられる時が過ぎ、その体から立ち上っていた蒸気が完全に消えた頃、ツヴァイの体は突然、岩の割れるような乾いた音と共に腰から二つに折れた。そしてその体は、服を着たまま壊れてしまった石像のように、歪な姿で地面に崩れ落ちた。

トキは横たわるツヴァイに近づき、その顔を覆うデスマスクを外した。

ツヴァイの顔は石膏像のように白く、無数の亀裂が走っている。それがただの石膏では無い事を証明するように、こぼこぼと、深いヒビ割れから赤黒い血が流れ出していた。

変わり果てたその姿に、僅かながら胸を抉られる。

殺してやりたいと思いつけた仇だが、元は何年も一緒に戦ってきた仲間である。

トキはその顔をデスマスクで隠すと、その骸の傍らに跪いて、短く目を閉じた。

遠くで低いエンジン音が響いている。ドトトと子気味良く響く、単気筒のエンジン音。音の方に目を向けると、サイドカーの付いたバイクが近づいてきた。トキは顔を照らすヘッドライトに目をすがめる。運転席にエアニスが、サイドカーにはレイチェルが乗っている。トキは座り込んだまま、軽く二人に手を振った。

「また派手にやったな」

エアニスはバイクから降りると、少し離れた場所で横転するトラックと、それに突っ込み大破したトラックに目をやる。毒ガスに当てられていた筈だが、既にエアニスは普段の調子を取り戻しているかのように見えた。

「いや、まだダメだ。痺れが残ってて剣も握れねーよ・・・」

エアニスは頭を叩きながら忌々しそうに呟く。そんな状態でバイクの運転してたんですね・・・と、サイドカーに乗っていたレイチェルは声を震わせた。

「・・・終わったんですね」

レイチェルは、トキの傍らに倒れた石像のような死体に視線を落とす。トキは握ったままだったリボルバーのシリンダーから空薬莖を抜き出す。薬莖にはレイチェルの刻んだ魔導式が刻まれている。

「・・・使わせて頂きましたよ」

生ける屍となったツヴァイにトキの攻撃は殆ど無力だった。レイチェルの作った"浄化"の魔導が込められたこの弾丸が無ければ勝つ事は出来なかったかもしれない。地下道での話し合いで、ツヴァイとの戦いに手出しはさせないと豪語していたトキだが、結局レイチェルの力に頼ってしまった事になる。

これなら、二人で仇を取ったと言えるのかもしれない。しかし――

「分かっていたつもりですが・・・思った以上に、虚しいものですね」

「・・・そう、ですね・・・」

トキとレイチェルは、ツヴァイの無残な亡骸に目を落とす。

複雑な思いだった。

ツヴァイを倒した所で、アリシアは帰ってこない。レイチェルの父親も、エルカカの村人も、アリシアを慕っていたマスカレイドの創設メンバーも、誰も帰っては来ない。

誰かに望まれた訳ではない。誰かの為になる訳でもない。ただ、自分の心に渦巻く負の感情を鎮める為に、トキとレイチェルはツヴァイを倒した。

まるで犯した罪を悔やむような顔をしている二人に、エアニスはかつての自分の姿を見た。

エアニスも大切な人を奪われ、復讐に狂った事がある。戦争を憎み、やがて世界を恨んだ。

「・・・深く考える事はねーさ。

俺は、人間として当たり前の感情だと思う。

仇を取った事で、お前らを縛る過去の呪縛が一つ消えたんだ。

・・・これで少しは、前を・・・未来を見る気になれるだろう」

エアニスが見た復讐の先にあるもの。それは未来だった。

復讐は、未来を見失う。過去に縛られた復讐者は、明日を見据える事をしないからだ。

しかし、未来はいつも当たり前のように目の前にある。見ていないだけで、見ようとしなければ、復讐を遂げても何も変わる事無く、存在するのだ。

「ええ・・・昔の事ばかり考えるのは、もうやめるべきなのかもしれませんね・・・」

心にわだかまる靄は、暫く晴れそうに無い。しかし過去を振り返り、立ち止まる理由は、これで無くなった。靄の中だろうが闇の中だろうが、もう前に向かって歩き出さなければならない。

トキは東の空を眺める。もう数時間したら日が昇るだろう。日の出など毎日繰り返される当たり前の事だと言うのに、今のトキにはそれがいつもと違うものを感じられた。

過去に縛られる者と、未来を見据える者とは、"明日"への価値観は全く違うものである。トキはようやく後者への仲間入りを果たしたのだ。

エアニスが言わんとしている事を感じ取りながら、トキは笑う。いつもの、彼の笑顔で。

「ありがとうございます。エアニス」

ざんっ、と。

砂を蹴る音に、トキは傾けていた首を起こす。

レイチェルの背後。砂を巻き上げ、ひび割れた死体が宙を飛んでいた。

トキの時間が静止する。

下半身を失い、上半身のみの体を腕の力だけで跳ね上げ、ツヴァイは右腕の振動刃をレイチェルに振りかざす。

レイチェルは、まだ気付いていない。

エアニスは、剣を鞘に収めたまま一番離れた位置にいる。

トキはリボルバーに手を掛けるが、そのシリンダーに銃弾が入っていない事を思い出した。

レイチェルが振り向き、その目の前に、岩すらも角砂糖のように削る刀身が迫る。

反射的に目を閉じる暇すらなく、振動刃はレイチェルの頭蓋を切り取って行く。

筈だった。

宙を飛んでいたツヴァイが、まるで強力な重力に吸い寄せられるように地面に叩き付けられた

。

その衝撃は、地響きと共にレイチェルのすぐ後で爆発のような砂煙を巻き上げる。

トキはレイチェルの腕を取り、エアニスはその二人を守るよう痺れて震える腕で剣を取る。

薄れ行く砂煙の中から現れたのは、背の高い男。短い銀の髪を撫で付けた、精悍な顔立ちをしている二十代半ばの青年だった。銀の縁取りの黒いロングコートを羽織り、その下には真っ白いシャツと紺色のベストを着ている。貴族のような服装にも見えるが、その纏う雰囲気は圧倒的な重さを伴っていた。強者が弱者を睥睨する目。しかし、そこに高慢の色は無い。

男は手にした身の丈ほどもある大剣で、ツヴァイを地面に縫い付けていた。

「お前っ・・・！」

エアニスとレイチェルには突然現れたその男に見覚えがあった。アスラムへ向かう船の上で遭遇した、二人組みの魔族の片割れ。

名前は、確かイビス。

「ア・・・ ャ ガ カアッ」

大剣で胸を地面に縫い付けられたツヴァイは、未だに息絶える事無く、声とも呼べない音を喉から漏らす。力なく振動刃を振り回しながら、イビスの足を掴んだ。

イビスは無造作に振動刃を踏みつけると、その反対の足でツヴァイの頭を踏み潰した。

石像のようにひび割れたツヴァイの頭は、地面に大きな雪の塊を叩きつける様な音を立て砕け散る。アダマントイトで出来たデスマスクも、割れて地面を跳ねた。

突然現れ、レイチェルの危機を救った魔族は、沈黙を守ったままエアニス達を見据える。

エアニスは、動く事が出来ない。この世界の理から外れた存在、"魔族"。故に、この世界の常識で殺す事は出来ない。魔族と戦った事のあるエアニスは、魔族のでたらめな在り方を身を以って知っている。

「ふざけ過ぎだ」

朗々とした声でイビスが言った。エアニス達は何の事が分からず眉を寄せたが、どうやらそれはエアニス達に向けられた言葉では無かったようだ。

「ごめんごめん。」

まだ動けるとは思っていなかったからさ」

大した悪気も無く謝る声の主は、突然虚空から姿を現した。

それは短いゴシックドレスを着た可愛らしい少女。イビスと同じ色の銀髪を長く伸ばし、左右に分けて結わえている。歳はレイチェルと同じ位か。

彼女もイビスと同じく魔族である。エアニス達とはアスラムへの船上以外に、オーランドシティでも遭遇している。

彼女は無造作に、イビスに踏み潰されたツヴァイの亡骸の横にしゃがみこむ。どう見ても死んでいるツヴァイの亡骸が、もぞりと動いた。レイチェルが息を呑む。

「それにしても、最後まで面白いものを見せて貰ったわ。

お疲れ。もう逝ってもいいわよ」

アイビスがツヴァイの亡骸に手を当てると、部分的に形を保っていたツヴァイの体が砂のように崩れ、空気に溶けるようにして消えた。残ったのは、ツヴァイの着ていた服と、肉体との接続部を露にしたグロテスクな義手、そして、割れたデスマスクのみ。

それを見届けたアイビスは腕を組んで立ち上がり、レイチェルに言い放つ。

「全く残酷な事するわよね。半端な浄化の術なんて使うから、この子今まで生きてたのよ。

想像出来る？ 体は半分に千切れて、全身の皮膚が石みたいに固まってヒビ割れてゆく・・・そんな状態でも死ぬ事が出来ないなんて、どれ程の生き地獄だったんでしょね？」

以前、アイビスの放った生ける屍の群れを、レイチェルは"浄化"の術で一瞬にして灰に変えた事

がある。しかし銃弾を介した術では、本来の効力が発揮出来なかったようだ。

砂に還ったツヴァイを見るアイビスの目には、哀れむような色が浮かんでいた。

しかし、違う。それは、哀れみなどではない。例えて言うなら、とても気に入っていた玩具を壊してしまった子供の目。

「・・・その男をそんな体にしたのは・・・あなたなんでしょう？」

レイチェルは声に恐れを滲ませながらアイビスの前に一步踏み出す。

エルカカの村で、レイチェルはツヴァイに致命傷を負わせていた。アイビスが余計な事をせず、あのままエルカカでツヴァイが息絶えていれば、このような事は起こらなかったのだ。

「そうだけど？」

アイビスは何を今更、といった様子で答える。

「組織からの命令で手は出せなかったみたいだけど、コイツあなたの事すっごく憎んでたのよ。で、偶然この鬼畜眼鏡さんとも因縁があったみたいだからさ。面白そうだから研究所で解剖されちゃうまえに"起こして"あげたの。

ありがと、なかなか面白かったわよ。こいつも、あなた達もね」

エアニスは舌打ちをする。ツヴァイが不死の体を手に入れていたという話を聞いた時から、彼女の影は感じていた。この女は、人間の命など全く意に介さない。むしろ、人の殺し合いを見て楽しんでいる。

「あなたたち人間だって、サソリと蜘蛛を喧嘩させて楽しんでるじゃない。あれ、蛇とマンガースの方がメジャーなのかな？ それと同じよ」

エアニスが剣を構え直す。

「知ってるか？ サソリや蛇に殺された人間は沢山居るんだぞ？」

「ふうん、そうなの。それは間抜けね」

アイビスの態度に神経を逆撫でられ、エアニスの口元が釣りあがる。

「はっ！ 自覚が足りねーみたいだなッ！！」

エアニスはアイビスに斬りかかった。

魔族は分かりやすく表すと幽霊のような存在である。物理的な攻撃は全く通用しない。だが、レイチェルの魔導やエアニスの魔法剣ならば魔族の"存在"を削る事が出来る。

しかしエアニスの剣が届くよりも早く、アイビスはイビスに首元のチョーカーを後ろから掴まれ、体重を感じさせないようにフワリと宙に引っ張り上げられた。人間ならば間違いなく首を吊って死んでいるところだが、アイビスはぐえ、と苦しそうな声を漏らしただけで、宙に浮かぶイビスに猫のようにつまみ上げられていた。高さは二階建ての家の屋根ほどもある。周りに跳ぶ為の足場も無く、エアニスの剣は届かない。

「よせ。目的はじきに果たされる。台無しにする気か？」

「このロンゲは関係ないじゃない。こいつ人間にしては強いし、弱ってるウチにヤっちゃおうよ？ レイチェル=エルナースとヘヴンガレッドがあればいいんでしょ？」

首根っこを掴まれたアイビスは頬を膨らませ怒る。彼女のどこまでもふざけた態度に、イビスは目を細めた。

「帰りたくないのか？」

イビスの言葉の意味は、エアニス達には分からなかった。

しかし、その言葉には一際の重みを感じた。

「・・・わかったわよ・・・」

イビスの一言に、それまで子供のように駄々をこねていたアイビスが、途端に大人しくなる。不満そうな表情は相変わらずだったが。

エアニスは宙に浮いた二人の魔族を見上げていると、その姿は突然ゆらりと歪み空気に溶け始めた。消えるつもりだ。

「ま、待て！！」

思わず呼び止めるエアニス。彼らの目的、ルゴワールとの繋がり、何故レイチェルのヘヴンガレットを狙うのか、あの二人から聞き出す事は山ほどあるのだ。

「行け。人間。俺達は、石の眠る神殿で待っている」

その言葉に、レイチェルの顔がざっと青ざめた。

そして、二人の魔族は風に溶けて、消える。



「何しに来やがったんだよ・・・アイツら」

悪態をつきながらも、エアニスは自分でも分かっている疑問を口にする。

レイチェルを助けに来たのだ。彼女に死なれては、困るから。ヘヴンガレッドの力はレイチェルにしか操る事が出来ないから。

あの魔族は、ずっと俺達の事を見ていたのだろうか？

エアニスは頭を振る。考えても分からない。あの魔族については、情報が少なすぎる。

「平気か？」

エアニスは剣を収め、立ち尽くすレイチェルに声をかける。

「あの二人は・・・ヘヴンガレッドを封印する神殿を、知っている・・・？」

レイチェルの旅の目的地。エルカカの民の一部の者にしか伝えられないと言う、"ヘヴンガレット"を安置する神殿。7つの"ヘヴンガレット"のうち、6つは神殿に、最後の1つはレイチェルが持っている。全てのヘヴンガレットを集めた上で封印の儀式を行うのだという。

「あいつらに、神殿で保管されてる"石"を奪われたか・・・？」

「いえ、神殿の場所が分かったとしても、私がいないと神殿の中には入れない筈です。絶対に・・・」

「レイチェルの"石"が目的だと思ってたが、欲を出してきたか・・・。7つの"石"を全て手に入れる気か・・・」

それとも、初めから全ての石が目的だったか。

エアニスは考える。

7つの"ヘヴンガレット"は、1つの"賢者の石"を表す。

"ヘヴンガレット"が一つあるだけでも、ひとつの国を動かす事も出来るというのに、あの魔族は、ルゴワールは"賢者の石"を手に入れ、何をするつもりなのか。

エアニスの脳裏に、取り留めの無い想像が広がる。

まあいい、まあいい。

戦いの舞台が決まっただけで、やる事はこれまでと変わりはない。

邪魔者は倒し、沢山の人間の人生を狂わせてきた"ヘヴンガレット"を、封印する。

人間にとって250年前の魔族との戦争では必要な物だったのかもしれないが、あんなもの、今の世の中には無い方が良さそうだ。

"石"に人生を狂わされた一人として、エアニスは強く思う。

エアニスは頭を振り、淀んだ気持ちを振り払う。

熟慮すべき事ではあるが、今はそれよりも。

「トキ、工場に戻るぞ」

「え？」

突然声を掛けられ、何の事か分からず眉を寄せるトキ。

「何て顔しやがる。

アリシアだよ。

地下道を先行させたチャイムとカインが、例の通信車両を見つけたらしい。

・・・会いに行くぞ」



「こっち」

地下道を抜けて来たトキ達を、チャイムは通信車両まで案内する。

そこは街外れの森だった。森の中とはいえ、大型車両が通れる程に道は広く、道も慣らされている。それでいて、頭上を覆う木々の葉が厚く頭上を覆っていた。人の手によって作られた枝木による天井だ。航空機によって空から地下道の入り口が発見されるのを防ぐ為だろう。この街は大戦の名残や傷跡が、本当に良く目に付く。

「・・・これですか、良く見つけましたね」

土手の窪みへ嵌るように、ダークグリーンに塗られた中型のトラックが隠されていた。天井からアンテナのようなものが何本も緑の天井に向けて突き立っている。傍にはトキ達を待っていたカインと、通信兵だろうか、見知らぬ男が二人、気を失って木に縛り付けられていた。

「探すまでもありませんでしたよ。彼らの方から襲い掛かってきたので」

足元の二人組みを顎で指し、カインは苦笑いをする。

「・・・アリシアネットは抑えましたが、私も専門じゃないので起動の方法が分かりません。彼らに聞こうともしたのですが、話してくれそうにありませんね」

「そう、ですか・・・」

苦い表情でトキは答え、トラックのドアを開ける。中には床に固定された椅子が二脚と、その椅子を取り囲むように、沢山のボタンや画面、ゲージの並ぶ機械が詰め込まれていた。トキは椅子に座りコントロールパネルに目を落とす。写真等で見た事のある全機械式の大型航空機の操縦席のようだった。

何をどうすれば良いかの分からず、トキはコントロールパネルを指で叩いていると、

キューイン

小型モーターが回転するような、小さな音が聞こえた。見れば、パネルに埋め込まれている小さなレンズがトキの顔を凝視するように動いていた。

突然、ガチャンという音と共にトラックの室内灯が灯った。音に驚き身を竦ませるレイチェルとは対照的に、トキは無反応のままレンズの瞳と目を合わせていた。

機械の唸る低い音が響き、次々とトキの前のコントロールパネルにランプが灯ってゆく。

そして唐突に、タールで塗り固めたような重苦しい空気が変わった。

アリシアの存在を確信する事に繋がったあの曲が、スピーカーから流れ始めたのだ。すると、あのトレーラーでの出来事をなぞるように、据え付けられた印刷機が数枚の紙を吐き出した。トレイから零れた紙は、トキの足元へ滑るように落ちる。

トキはその紙を拾い上げようと手を伸ばし、自分の指先が震えている事に気付いた。それに驚いたトキは、熱い物に触れたかのように手を引き、一度だけ目を閉じてから、落ち着いて紙を拾う。紙には長文が印字されており、その書き出しは――

それは、アリシアがトキに宛てた手紙だった。

トキは手紙の文字を目で辿る。その表情は僅かな緊張の色を浮かべたまま、最後の一文を辿るまで変わる事は無かった。

手紙を読み終わると、トキは暫く目を瞑り、そして鉄で覆われた天井を仰ぎ見た。

そしてゆっくりと、長い、長い息を吐いた。

「すみませんでした。僕達の面倒事に巻き込んでしまって・・・。

これで、全部終わりです。本当に、ありがとうございました」

トキの声はいつものように明るい。しかしそれは、誰が見ても分かるような痛々しいまでの空元気だった。

「どういう事だよ・・・？」

これで終わりと言われても、エアニス達は納得出来ない。トキの妹は無事なのか、アリシアネットの正体は何だったのか。しかし、あまり立ち入った事を聞く事もどうかと思い、曖昧な問い掛けに留まる。トキはひらりと手のひらを上に向け、

「だから、全部終わり、ですよ」

痛々しいまでの笑顔で、言った。

「全部・・・終わっていたんですよ・・・」

感情を誤魔化すのはここまでが限界だった。喉の奥が上ずり、顔は意図しない表情を作り出す。慌てて目元を手で覆い、エアニス達に背を向ける。

「トキ・・・」

エアニスがトキの涙を見たのは、これが二度目だった。一度目は一年半前、アリシアとの別れの時。そして、二度目も――。

トン、と、トキは手紙を指で叩いた。

「いや、まだ一つ、残っていますね・・・。アリシアからの頼み事があります」

「頼み事・・・？」

「はい。これが、本当に最後です。手伝って貰えませんか？」



トラキアへ

久しぶり。元気にしてるでしょうか？

まずはごめんなさいと、あやまらせて下さい。

まともなお別れも出来ずにトキの前から居なくなっていまい、本当にごめんなさい。

トキは、もう私は死んでしまったのだと思っているのですが、

それは半分だけ間違いです。

今の私はガーデンに戻って、意識だけの存在になって、研究所の機械に繋がれている筈です。人間としては死んでしまったのかもしれませんが、私の記憶や心といったものは、まだここで生きています。

トキは知らないと思うけど、私の引き継いだ研究に人の脳を使った人工知能の開発というものがあります。

研究を終えた私は、テスト機の開発には生後10年以内の人間の脳に、4570万ダットの情報量を収めたサンプルが必要という研究結果を報告しました。

これは、10歳の子供に普通の人間の160年分の記憶を求める事になります。

だから私は、実現は物理的に不可能としてこの研究を凍結させました。

でも、ガーデンの研究者達は、必要とされる性能に遠く及ばないものの、

最も可能性のある私の脳を使って、テスト機の開発を始めるようです。

実は、私が報告した10歳の子供の脳に160年分の記憶という話は、本当は嘘。

テスト機に必要な脳は、20歳以下の正常な人間のものであれば、誰のものでも良いのです。

私はこの研究が許せなくて、嘘の報告をして研究を凍結させました。

私の嘘がばれたのか、駄目もとで実験を進めるつもりなのか今の私には分かりませんが、でも、これは、自業自得よね。

もっと上手い嘘を言えば良かったなあ、と今にして思います。

今私の脳は身体から取り出されたままの状態で、こうして自分の考えを綴る事も出来ます。

ですが、私の脳を人工知能エンジンに加工する過程で、今の私が持つ全ての記憶は消されてしまう筈です。

思い出も、言葉も、身体の動かし方も、全てです。

だから、私の記憶が全て消えてしまった後でもトキがこの手紙に辿り着けるように、私の擬似的な意識を隠しプログラムとして残します。

情報戦略兵器として私が実戦投入された時、もし戦場でトキと出会う事があったら、このプログラムは実行され、戦況を操りトキを私の居る場所まで導きます。

この手紙を届けるために。

だから、もうひとつあやまらなくてははいけません。

トキは私の存在を感じてここまで辿り着き、この手紙を読んでいるのだと思います。

でもそれは私ではありません。トキが感じたものは、私が私でなくなる前に残した、プログラムでしかありません。

だから、トキの目の前にある機械の中には、もう私は居ません。

もし私が生きているのだと思ってここに来てくれたのならば、本当にごめんなさい。

トキを騙すような事をして、本当にごめんなさい。

トキにお願いがあります。

本当に私が戦場の情報を操る兵器になってしまっていたならば、

目の前の兵器を、壊してください。

それには私の体の一部が使われていますが、それはもう私ではありません。

ただの、人殺しの機械です。

自分の考えも持てず操られるだけの可愛そうな兵士を作らないためにも、

この兵器の犠牲者をこれ以上出さない為にも、

目の前の兵器を、壊してください。

それが私の望みです。

トキともう一度巡り会えてから、私の日常は本当に輝いていました。もちろん、マスカレイドのみんなが優しくしてくれた事も、本当に嬉しかった。

結末としては、とても悲しい事になってしまったけど、出来ればツヴァイを憎まないであげて下さい。私が研究者として、トキやワッツ、ツヴァイを実験対象として扱ってきた事に変わりはありません。

本当は、私にマスカレイドの皆から優しくして貰える資格なんか無いのだから。

それでも優しくしてくれた皆には本当に感謝しています。

本当にありがとう。

そして、ごめんなさい。

このふたつの言葉は、いくら口にしても言い足りません。

今まで言えなかった事と、勝手なお願いをこのような形で伝える事を許してください。

どうか、この手紙がトキの元へ届きますように。

最愛の家族 トラキアへ

アリシア=スティンブルグ



かつて、使い捨ての兵器として扱われていたトキを救い出したのは、アリシアだった。奇しくも今、その立場は逆となり、兵器となったアリシアをトキが救い出そうとしている。しかし、そ

れが救いとなり得るのか、トキには判断が出来ない。しかし、トキはアリシアの望みのままに動く。

それが、不本意だとしても。自らの心を引き裂く行為だとしても。それが正しいと信じて。それでも、トキは思う。

例え、この再会が悲劇と呼ばれるものだったとしても、再びアリシアと巡り逢えた事を本当に良かったと思う。

エルバークの街の近くには、深い渓谷が走っている。

空が白じみ始めた頃、その渓谷に接した森から、一台のトラックが深い谷に向かって飛び出した。

トラックは重力に引かれるまま、加速しながら落ちて行く。

しかし、それを見届けた彼には、トラックはとてもゆっくりと谷底に吸い込まれていくように見えていた。

トラックは谷底の固い岩肌につつきり、潰れて破片を撒き散らす。

そして僅かな間を置き、トラックは爆発する。

立ち昇る火柱と黒煙が、雲ひとつ無い朝焼けの空を焦がした。



三日後。

トキはまだエルバークの旧市街に居た。

枠組みだけを残しガラスの無くなった窓から日の光が射し込んでいる。トキは埃臭いベッドに横たわり、光の帯の中で舞う埃をぼんやりと眺めていた。

その顔には新品の眼鏡がかけられていた。壊れてしまった以前の眼鏡と全く同じデザインの伊達眼鏡。トキの、今の仮面。

全てが終わったその後。街に潜むルゴワールの刺客や増援の襲撃を危惧し、トキ達は街に戻らず、この旧市街の廃屋で過ごしていた。

本来ならすぐに街を立つべきなのだろうが、それは未だ麻薬に犯されたノキアの為の薬が準備出来ていなかった事と、怪我の酷かったトキの右腕が安定するまで、安静にしていた方が良いと言うチャイムの判断によるものだった。

トキの右腕は治療の魔導によって傷も塞がり、痛みも引いていたが、それは魔導の補助によって形を保っているに過ぎないのだと言う。その補助的な治療にある程度身体がついて来るまでは、強い衝撃を受ければ傷は開き、繋がっていた骨は再び折れてしまう。治療の魔導は、その場で完全に"傷が治ってしまうという便利な物ではないのだ。

トキは右腕を伸ばし、こぶしを握ってみる。最初は僅かな違和感が残っていたが、今はそれもない。チャイムが言うには、毎日治療の術を当てていけば、一週間で完治すると言う。

昨晚、薬の調合を終えて眠りについてから、トキは半日以上このベッドの上で横になっていた。

自分の行動理念であった"復讐"を遂げ、トキは生きる目的を失った。復讐者となる前は、自分を救い出してくれた唯一の家族、アリシアの為に生きていた。

今は、そのどちらも無い。アリシアと出会う前、使い捨ての兵器として扱われていた時も生きる目的など無かったのだが、あの頃の自分はどういう思いで生きていたのだろうか。今となっては思い出せない。

仮に思い出したとしても、今のトキにあの頃の自分、U-66と呼ばれていた少年の気持ちは理解出来ないだろう。それを理解するには、トキは人の優しさを知り過ぎてしまったから。

「これから・・・何の為に生きればいいんだよ・・・」

その口調はいつもの丁寧さが欠け、彼の昔の口調に寄っていた。

「別に、自分の為に生きればいだろうが」

突然声を掛けられた。見れば、ガラスを失った窓枠に、エアニスが背を丸めて腰掛けていた。トキは驚いて身を起こす。

「いつからそこに居ました？」

「・・・堂々とそこのドアから挨拶して入ってきただろうが。」

大丈夫かお前？」

トキからの返事は無かった。いつもなら皮肉や悪態を口にしてふざけている所である。見た目以上に滅入っているようだ。

エアニスは溜息をついて表を指差した。

「ノキアとカインが来てるぞ。街を立つらしい」

トキが表に出ると、そこには厚手の旅装束を着たカインとノキアが待っていた。その後ろには荷物を沢山積んだサイドカーが止まっている。

「街を出るんですね」

「ええ・・・ルゴワールを敵に回してしまった以上、この街に居るのは危険ですから。」

ノキアの為に医療施設が整ったエベネゼルへ行こうと思っています。

紹介状も頂きましたので」

カインが見せた書面には、聞いた事の無い偉そうな肩書きの横に、チャイムのサインが記されていた。宛先は、クライン=ゲートウィル。エアニスは見覚えのある名だと思い、すぐにオーランドシティで出会ったチャイムの師を思い出した。

そのチャイムはレイチェルと並んで道端に転がる木箱に腰掛け手を振っていた。もうカイン達と別れの挨拶は済ませているようだ。

チャイムはかつて、優秀な宮廷魔法医としてエベネゼルでは有名だったという。そんな彼女の紹介状はそれなりの力を持っているのかもしれない。しかし、チャイムの人となりを知る程、この紹介状への信頼が薄れていくのは何故だろう。

「ノキアにも、私のやっていた事は説明しました。

もうこんな仕事はしないという約束も・・・ね」

カインの後ろに居たノキアが、深々とトキに頭を下げる。その肌は出会った時よりも青白く、心なしやつれて見えた。麻薬が身体を蝕み始めているのだ。これから旅に出るというにはあまりにも心細い姿だった。

「中毒が抜けるまで、恐らく一年近くかかります。これから大変だと思いますが、頑張って下さい」

「色々とお世話になりました。薬のお礼は・・・いつか必ず」

「お礼など必要ありませんが・・・そうですね。またいつか、元気な姿を見せていただければ嬉しいかもしれませんね」

ノキアはその言葉に、涙を浮かべながら頷き"必ず"と答えた。

立ち並ぶ廃墟の間を、カインとノキアの乗ったサイドカーは走って行った。サイドカーの排気音は固い石壁ばかりの旧市街では良く響き、ふたりの姿が見えなくなってからも、暫く埃っぽい空気を揺らしていた。

トキ達はその音が聞こえなくなるまで、二人の去った方角を眺めていた。

エアニスは空を仰ぎ見、ため息とも深呼吸ともとれない長い息を吐く。

「何とも・・・釈然としない結末だな」

「バッドエンドよりはマシでしょう。こんなものですよ」

「まあ、そうかもな」

最悪のバッドエンドを迎えた事のあるエアニスだが、何も含みを持たさず軽く相槌を打った。

「ところでエアニス」

「ん？」

「あなたは何で生きてるんですか？」

「馬鹿にしてんのかてめえ！？」

「違いますよ」

エアニスに襟首を掴まれても、トキは表情を変えない。

「僕は、自分が何の為に生きてるのか分からなくなってしまったので・・・」

エアニスはどう考えているのか、聞いてみたいのです」

エアニスはせり上げていた肩の力を抜き、毒気を抜かれたような顔で頭を搔く。

「あのなあ・・・そんな事、考えて生きてる奴の方が少ないんじゃないか？」

「何でもいいんです。聞かせてください」

無気力な声でそう言った。本当に参っているのだろう。エアニスはトキを励ます為に気の利いた答えを返そうと思うが、答えが浮かばない。

「あたしは生きるのが楽しいから生きてる・・・かな？」

トキの問い掛けに答えたのはチャムだった。

「旅をして見たことの無い景色を見るのは楽しいわ。散々歩き回った後に食べるごはんは美味し

いし、むかつく奴をぶっ飛ばすと気持ちがいい」

にっこり、とチャイムは悪戯好きの子供のように笑った。

「嫌な事だってあるけど・・・ううん、嫌な事の方が多いけど、それでもあたしは、こうして毎日過ごす事が楽しい。

言っちゃえば、自分の為に生きてるのよ」

とてもチャイムらしい、胸のすくような答えだった。エアニスはず顔を綻ばせる。

「なるほどね。自分の為にか。

お前ほど人生を楽しめてはいないが、俺も同じようなものかもな・・・」

「もちろん、誰かの為にがんばって、その人が幸せになるのを見るのが一番嬉しいけどね」

「それは無いな。他人の幸せは妬ましい」

「おお・・・あたしの心温まる言葉が台無しだわ・・・！」

チャイムはエアニスの心の狭さに失望する。

「レイチェルは？」

何かの為とか、目標みたいなものはある？」

「目標・・・」

チャイムに話を振られ、レイチェルはふと空を見上げる。その横顔が何処と無く寂しそうに見えて、チャイムはドキリとした。

「私は、この旅を終わらせる事と、その後に村を再建する為に、今がんばっているつもりよ」

「村の再建？」

彼女のその考えは、初めて耳にしたような気がする。

「村から出て、旅をしながら"石"の情報を集めている人達は結構いるんです。

それに、私以外にあの襲撃を逃れた村人も居るかもしれません。

その人達の為にも、早く帰る場所を作らないといけませんから・・・」

「そっか、そいつは大仕事だ・・・」

あの魔族どもをぶっ飛ばす事よりずっと大変だな・・・」

エアニスは煙草に火をつけながら苦笑する。冗談ではなく、そう思っていた。

トキはチャイムに肘で突つかれる。

「んふふふ！

旅が終わってからやる事が無いならレイチェルを手伝ってあげなさいよ！」

何故か嬉しそうに、チャイムはどすどすと肘をトキの脇腹に食い込ませる。トキはチャイムの肘を嫌がるように払い退けレイチェルの顔を見ると、彼女は俯きながらトキを見上げていた。

上目遣い・・・である。その様子が助けを求めるようにも見え、トキは思わずこう答える。

「そうですね、それもいいかもしれませんね」

何故かチャイムの表情が輝いた。そしてその微笑みは少しずつニヤニヤとしたいやらしいものへと変化し、その表情は隣のエアニスにも伝染してゆく。

「あらやだー！聞いた奥さん！！」

「誰が奥さんか。でも、聞いた。ふうん」



「怪しいと思ってたのよ！！ やっぱ二人はそんな仲なのね！！」

ずびしと指差しからかうチャイムに、トキは振り向いてニコリと笑う。

「チャイムさん」

「えっ？」

がしっ！ とトキの両腕がチャイムの首に巻き付いた。そしてトキは普段の笑顔のままグイッと、

「あっ！ 折れる！！ 折られるッ！！ 冗談よマジにならないでいぎぎぎぎ！！！」

「おいやめろ！ 本気でそいつの首折る気か！！」

幸いチャイムの首は、曲がってはいけない角度一歩手前でエアニスとレイチェルによって救われたのだった。

トキからチャイムを引き剥がしたレイチェルはぜいぜいと息を切らし、悲しそうな表情を見せる。

「そんなに嫌がらなくても・・・やっぱり、迷惑ですか？」

ひょっとして、トキさん私の事・・・嫌ってますか？」

「え！？」

レイチェルの予想外な言葉に、トキは慌てた。

「そんな事はありませんよ、チャイムさんの言い方が気に入らなかっただけで、別に迷惑などではありません」

「本当ですか？ 私、嫌われてないですか？」

「ええ、もちろん」

「私の事、好きですか？」

「はい！！？」

レイチェルの口から飛び出したとんでもない言葉にトキは目を剥く。

しかし、違うのであろう。レイチェルの人となりを知る者ならば、彼女の一般的な感覚からずれた言葉のニュアンスは理解出来る。

「でた」

「でたわね・・・というかここまで天然だと流石に心配になるわ・・・あの子」

エアニスは腕を組み、チャイムは頭に手を当てて考込む。

今に始まった事ではないが、レイチェルの天然ぶりには毎度驚かされる。世間から隔絶された環境で暮らしていたとはいえ、これはあまりにも酷い。こと男女間のモラルや恋愛感情に対してレイチェルの認識は壊滅状態である。というよりも、認識の範囲外なのかもしれない。

レイチェルがここで言う"好き"という言葉は、単純に"嫌い"という言葉の反対の意味として扱われているだけである。しかし、普通の感覚の持ち主が異性に対して使う"好き"という言葉には特別な意味が込められるものだ。

レイチェル流の言葉の意味を理解してしているのだから、素直に彼女の常識に合わせた返事をすれば良いのだが、若干ズレているとはいえ一般常識を持つトキにとって、その言葉を口にするのは躊躇われた。

「別に好き嫌いというかー、もちろん嫌いでは無いのですが、好きーという事ではー・・・です  
ね？」

何がですね？ なのか。トキにしては珍しく、しどろもどろになって答える。その様子に傷つ  
いたのか、途端にレイチェルの表情が曇ってしまった。

「大好きですよ、レイチェルさん！！」

トキはバッ、と両手を広げ、やけくそ気味にレイチェルに答えた。

チャイムは口元を押さえたまま ぶふうー！！ と噴出し、エアニスも顔を背けて肩を震わせて  
いる。

トキは腰に挿した銃を抜いて、おもむろに、無造作に、とても自然な仕草で、エアニスとチャ  
イムの足元にフルオートで銃弾を叩き込む。

「おおおおおおおー！！！！」

「あきゃあー！！！！！！！！！！」

実弾が弾ける地面の上で、エアニスとチャイムは踊るように飛び跳ねる。

「あっはっはー、お二人はダンスが上手ですね？ お互い手を取り合ったりしちゃって。

タンゴですか？ ワルツですか？ 僕にも教えて下さいよ」

銃を振り上げ、トキはいつもの笑顔で笑った。いつもと同じ表情なのに、その笑顔は凄絶なも  
のに見えた。トキが本気で怒っている。

お互いの服を掴んで震え上がっていたエアニスとチャイムは顔を見合わせる。お互いの顔は気  
付けばとても近くにあった。

バチンと、エアニスはチャイムに頬を叩かれる。まるで仕事をこなすような、事務的な張り  
手だった。何だか最近彼女のリアクションがルーチン化している。

「・・・悪かった、やめよう。なんだか、いつもの不毛なパターンに嵌りかけてる・・・」

「・・・そうですね」

頬を押さえ理不尽を耐え忍ぶエアニスに免じ、トキは大人しく銃を収めた。いつもの、エアニ  
スとトキが不幸になってゆくパターンである。不幸のスパイラルに自ら飛び込む事も無い。

「全く、ばかばっかだわ。行こう、レイチェ・・・ル？」

男どもに愛想を尽かし、自分達の部屋に戻ろうとしたチャイムは、レイチェルの様子がおかし  
い事に気付いた。

とても、嬉しそうに笑っていた。緩く握ったこぶしを緩んだ口元に当て、照れたように誰とも  
視線を合わせようとせず、にこにこにこにこと、笑っていた。そして、チャイムにしか聞こえな  
いような声で言った。

「えへへ、良かった。トキさん、私の事好きだって・・・！」

「・・・」

レイチェルの言葉をチャイムは自分の中で反芻し、

「！！？」

シュバツ！！とトキに向かい全身で振り返る。言葉はなくともその表情は、  
『あれっ！？ さっきの"好き"って言葉、そーゆー意味の"好き"だったの！？』

と言っていた。

トキにはチャイムの驚愕の表情の意味が理解出来ず、隣のエアニスにいぶかしげな表情を向ける。人より遥かに耳の良いエアニスはレイチェルの呟きを拾っていた。

だからエアニスは、トキに向けて親指を立てた。

言葉は、必要ない。

もう面倒くさいから。



「でも正直、あいつらと馬鹿やっているとつまらない事は忘れられるんだよな・・・」

「ああ・・・それは分かりますね」

あれから暫く経ち、エアニス達も出発の準備をしていた。街に置いてきた荷物や車は既に旧市

街へ移動済みで、今はチャムとレイチェルが自分達の荷物を纏め、車に積み込んでいる所だった。

自分の準備を終えたエアニスとトキは石畳に座り込み、少し離れた場所から彼女達を眺めていた。口先で煙草をもてあそぶエアニスは、トキの横顔を見て安心したように言う。

「元気出てきたみたいだな」

「お陰さまで。馬鹿やって忘れてしまうのもどうかとは思いますがね」

「今は忘れていればいいさ。少なくともこの旅が終わるまではな。」

大体、生きてる理由なんて哲学者か暇人が考える事だ。

"死にたくないから生きてる"って理由で十分だろう？」

「おやおや、エアニスは死ぬのか怖いのですか？」

僕やエアニスのような生き方をしていた人間に、それは当てはまらないと思いますが？」

嘲るような色を含む言葉。なんでこいつはこんな言い方をするんだ、とエアニスはトキを睨むが、怒り出すような事はしない。それどころか、エアニスは抱えていた自分のひざに顔をうずめ、本心を吐露する。

「俺は、怖いね。昔はどうだったか忘れたが・・・今は死ぬのが怖い。」

お前もそうだろう。強がりじゃないのか？」

人と関わる程に、生への執着が強くなると感じた事は無いか？」

予想外の言葉に、トキは表情を改めて、考える。

「・・・確かに、一人ぼっちの時の方が気が楽でしたね。」

いつ死んでも構わないと思っていた節もありました」

「俺もだ。でも、だからといってその時に戻りたいと思うか？」

「いいえ・・・」

はあ、やれやれ・・・抱え込むものが多い程、人間は弱くなるという話を聞いた事がありますが・・・いつの間にか僕も弱くなっていたという事ですかね」

「ふん。弱さが、生きる理由になってるって事か」

エアニスはそう言って、自分の言葉に引っかかりを覚え、首を振る。

「いや、でもそれは・・・」

エアニスは一拍挟み、こう言った。

「それは弱さではなく、強さとも受け取れないかな？」

誰かの為に生きようと思う事は、強さと呼べるのではないだろうか。

少なくとも、自分の命を厭わぬ者より、強いのではないだろうか。

エアニスとトキは、強くなれたのではないだろうか。

トキはうーん、と唸り、首を傾げる。

「自分からそんな偉そうな事は言えませんねえ」

「はッ、それもそうだな」

「ですよー」と言ってトキは空を仰ぎ見る。エアニスは煙草を取り出しながら、  
「結局考えちゃってるな、生きる理由」  
「哲学的でいいじゃないですか。知的な感じで格好いいですよ」  
ふっ、と煙を吐きながらエアニスは笑った。  
「暇人なだけだろう」

ばむん、と車のドアが閉じられる。  
「エアニース、荷物の積み込み終わったよ！  
って、何二人で並んでニヤニヤしてんのよ、ホモかと思われるわよー！！」  
「うるせーバーカ！！」という罵詈雑言に「あははは」というわざとらしい笑い声が重なる。  
二人は気だるそうに腰を浮かして伸びをした。  
「彼女達には感謝をしなくてはなりませんね」  
「レイチェルをエサにしたくせに、よく言うぜ」  
「いや・・・まあ、それもありますけど・・・」  
痛いところを突かれ、トキは口元を歪める。一度咳払いをしてから、トキはこう続けた。  
「・・・それだけじゃなくて、僕達は彼女達に救われているとは思いませんか？」  
救われてるのはあいつらの方だろうが、と言いかけて、エアニスは口をつぐむ。  
エアニスは、チャイムの言葉に救われていた。エアニスの復讐に、間接的とはいえ巻き込まれていたチャイムは、エアニスの罪を許すと言ってくれた。  
「僕は、救われています。もし彼女達が居ない形で過去の清算を済ませていたら・・・この世に未練の無くなった僕は、今頃アリシアを追って首を括っているかもしれませんからね」  
「・・・まじでか」  
「結構まじです」  
言いながら、エアニスは彼女達の方へ目を向ける。チャイムとレイチェルは何かを話し、ふたりに笑い合っていた。  
情が移ったのか、いつの間にか恩を感じるようになっていたのか。エアニスはその笑顔を守る為なら、多少の面倒事は背負い込んでも構わないと思えるようになっていた。  
最初は退屈凌ぎで付き合っているつもりだったが、いつの間にか彼女達と一緒に居る理由が変わってしまったようだ。  
エアニスはまた溜息をつく。もうこれはエアニスの癖と言ってもいいのかもしれない。  
「・・・まあ、あいつらのお蔭で旅を楽しませてもらってる事は感謝してるよ」  
トキも同じ思いなのか笑って軽く頷くが、すぐにその表情は寂しげなものへと変わってしまった。  
「しかし、その旅ももうすぐ終わってしまうと思うと、少し寂しいですね」  
旅の目的地であるバイアルスまで、そう遠くは無い。  
二人は旧市街の向こうにそびえる山脈を眺める。切り立った峰は薄く雪化粧をしていた。もう一月も経てば、季節は冬である。

エアニスはポケットから車のキーを取り出し、指に引っかけチリン、と回した。

「・・・行こう。本格的に雪が降り出す前に終わらせなくちゃ」

楽しいだの嬉しいだの、能天気な事を言っていないのも現実である。

レイチェルにはやらなければならない事があり、エアニス達もその為に旅をしているのだから

。



エルバークの街を出たエアニス達の車は、街の南を横切る溪谷を渡り、谷に沿った街道を走る

。

丁度、アリシアが眠る場所の近くである。

ぼんやりと溪谷を眺めていたトキは、思い出したかのように自分の荷物を漁ってから、窓ガラスを開けた。

「あ・・・」

レイチェルが声を漏らす。

トキは荷物から取り出した自分のデスマスクを、溪谷に向けて放り投げたのだ。

仮面は回転しながらゆっくりと溪谷へと落ちてゆき、白い点となって消えた。

トキはそれを見届けると、何も無かったかのように窓を閉め、シートに沈み込んだ。

ここ数日あまり休むことの出来なかったトキは、目を閉じて眠りに就こうとする。その顔に疲れの色は無く、むしろ胸のつかえが取れたような穏やかな表情をしていた。

それを見ていたエアニス達は何も言わず、ただトキが眠りやすいよう静かに外の景色を眺めている事にした。

- 第五部 おわり -

月の光を纏う者 -5-

<http://p.booklog.jp/book/52936>

著者：猫崎 歩

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/blah/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/52936>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/52936>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ